

筑紫野市岡田土地区画整理事業に伴う文化財発掘調査

岡田地区遺跡群Ⅲ

～Ⅱ区の調査～

筑紫野市文化財調査報告書

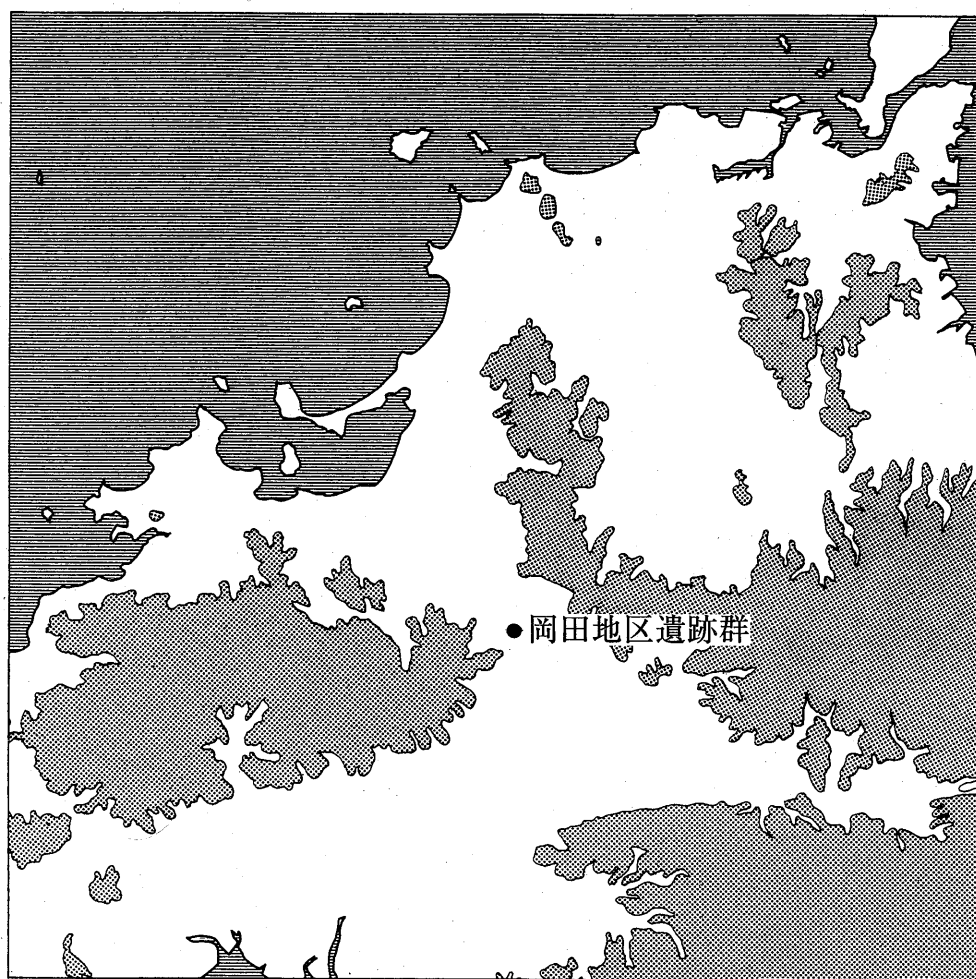
第 56 集

1998

筑紫野市教育委員会

岡田地区遺跡群Ⅲ

～Ⅱ区の調査～



序

東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野を持つ当市は、太古の昔より交通の要衝として栄えてまいりました。市の北部は「此府人物殷繁、天下之一都会也」と称された大宰府条坊の一部であったようで、今回の調査でみつかった官道はその大宰府から豊後（大分）方面に通じるルートであると考えられており、大宰府周辺域の古代史を知るうえでとても重要な成果となりました。この他の調査でも大宰府から米ノ山峠を抜け豊前方面に通じるルートの最初の駅で、万葉集で詠まれた蘆城駅家跡と推定されるものも発見されております。また江戸時代には、長崎街道・日田街道・薩摩街道が通り、筑前六宿に数えられる原田宿・山家宿がありました。山家宿は溝口や郡屋土蔵など当時のものが残っており、シーボルトやケンペルなどもこの地を訪れております。

市域には各時代のさまざまな遺跡が静かに眠っています。それは長い間かって蓄えられてきた先人たちの時代を生きた証しです。過去から連綿と続く人間の営みは、現代に生きる私たちもまたこれを受け継いでおり、この大地の上に、私たちの日々の暮らしが営まれているのです。そしてこれは後世の子孫たちに語り伝えていくべき文化であると確信しております。それはさまざまな社会的な矛盾にまみれながら今日に生き、まもなく21世紀を迎えようとしている私たちにとって、地域社会や各々の人間性を見直していく上で確かな指針となっていくことでしょう。

しかしながら、8万数千余の人口を抱える本市における「開発」は加速度的に進み、市政の発展とひきかえに、数多くの遺跡が本来の姿を失っている現状があり、今後さらにその「保護」ならびに環境への「融和」を図っていかなければならないと考えております。

最後になりましたが、発掘調査に従事していただきました方々、ご協力を賜りました地元岡田地区の住民の皆様方をはじめとする関係各位の方々に心よりお礼申し上げますとともに、今回の成果が強度の文化財に対する関心を深めるご縁ともなれば幸いに存する次第でございます。

平成10年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が平成6年度から9年度にかけて実施した「筑紫野市岡田土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の「岡田地区遺跡群Ⅲ」である。
2. 本報告書では、A～K調査区を一括してⅡ区として掲載した。
3. 遺構の略号は、溝をSD・土坑をSKとし、遺構番号はG～K調査区を通し番号とした。
4. 調査に係る遺構実測は、小鹿野亮・奥村俊久・渡邊和子が行い、一部を(株)大成ジオテックに委託し写真測量により図化した。
5. 本書に掲載の遺物の実測は、主に小鹿野が一部を渡邊が行った。
6. 本書掲載の遺構写真は、小鹿野・渡邊が撮影し、空中写真は(有)空中写真企画・遺物写真についてはフォトハウスOKAに委託し撮影した。
7. 挿図中の北は磁北を示すが、遺構配置図に使用した方位は国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 出土木材の樹種同定については、環境考古研究会（金原正明・金原正子）に委託した。
10. 報告書作成に関わる製図は(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
11. 遺物の復元および整理作業には、浅谷芳江・加藤美智子・加藤明子・北野正子・宗和代・田中紘子・高木保子・鶴浄美・松石かおる・松尾敦子・百田愛子・山内妙子が従事した。
12. 本書の執筆は、石塔とダブリューについてを小鹿野が、小鹿野調査分と他に関しては小鹿野・渡邊の協議に基づいて、渡邊が執筆・編集した。

目 次

本 文

	頁		頁
I. 調査に至る経過と組織	2	8. 岡田地区遺跡群に残る地割について	18
II. 各区域の調査概要	3	9. 老松神社境内所在の石塔について	18
1. A・B調査区	3	10. G・H調査区	20
2. C調査区	3	11. I調査区	21
3. D調査区	4	12. J調査区	21
4. E調査区	4	13. K調査区	23
5. 小結	13	14. ダブリューについて	32
6. F調査区	14	III. 岡田遺跡K調査区出土木材の樹種同定	33
7. 館址について	16		

Fig.

Fig. 1. A～K調査区位置図 (S1/4,000)	1	Fig.17. 石塔実測図 (S1/30)	19
Fig. 2. 出土遺物実測図 (S1/2・1/3)	3	Fig.18. 出土土器実測図 (S1/3)	20
Fig. 3. 出土遺物実測図 (S1/4)	3	Fig.19. SD52土層図 (S1/40)	21
Fig. 4. SD出土遺物実測図 (S1/3)	5	Fig.20. 出土遺物実測図 (S1/3)	22
Fig. 5. 出土遺物実測図 (S2/3・1/3)	6	Fig.21. SK実測図-1 (S1/60)	24
Fig. 6. SK実測図 (S1/60)	6	Fig.22. SK実測図-2 (S1/60)	25
Fig. 7. SK 3・4 出土土器実測図 (S1/3)	7	Fig.23. 出土土器実測図 (S1/3)	27
Fig. 8. SK 1 出土土器実測図 (S1/3)	8	Fig.24. 出土木器実測図 (S1/3)	28
Fig. 9. SK 1 出土石器実測図-1 (S1/1)	10	Fig.25. 杭・木器等出土状況-1 (S1/30・1/50)	
Fig.10. SK 1 出土石器実測図-2 (S1/1)	11		【折込み】
Fig.11. その他の出土遺物実測図 (S1/3)	12	Fig.26. 杭・土器等出土状況-2 (S1/30・1/50)	
Fig.12. 出土土器実測図 (S1/2)	14		【折込み】
Fig.13. 土塁土層図 (S1/40)	14	Fig.27. 出土木器実測図-1 (S1/2・1/4)	29
Fig.14. 土塁現況測量図 (S1/300)	15	Fig.28. 出土木器実測図-2 (S1/4・1/8)	30
Fig.15. 館址推定図および土塁遺存図 (S1/1,000)	15	Fig.29. ダブリュー塚実測図 (S1/50)	31
Fig.16. 推定館址と地割遺存図 (S1/2,500)	17		

表(Tab.)

Tab. 1 K調査区土坑計測一覧表	26
Tab. 2 木器一覧表	31

PL.

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| PL. 1 | 出土木材の顕微鏡写真① | PL.14 | K調査区(東側のみ)、SD1・2・3(東南から)、SK6・9・16・28・67 |
| PL. 2 | 出土木材の顕微鏡写真② | PL.15 | SK11、72・66、SD3木器出土状況、SD3
柵状遺構 |
| PL. 3 | 出土木材の顕微鏡写真③ | PL.16 | SD3木器出土状況、SK3遺物出土状況、ダ
ブリュー塚(東から)、ダブリュー塚(北か
ら)、K調査区ダブリュー塚(調査前) |
| PL. 4 | 出土木材の顕微鏡写真④ | PL.17 | 出土遺物 |
| PL. 5 | 出土木材の顕微鏡写真⑤ | PL.18 | 出土遺物 |
| PL. 6 | 出土木材の顕微鏡写真⑥ | PL.19 | 出土遺物 |
| PL. 7 | 出土木材の顕微鏡写真⑦ | PL.20 | 出土遺物 |
| PL. 8 | 出土木材の顕微鏡写真⑧ | PL.21 | 出土木器 |
| PL. 9 | 出土木材の顕微鏡写真⑨ | PL.22 | 出土木器 |
| PL.10 | 出土木材の顕微鏡写真⑩ | | |
| PL.11 | E調査区遠景(北から)、上空写真、SK1・2・3・4 | | |
| PL.12 | F調査区土塁(西から)、土塁(北から)、土塁断
面、石塔、H調査区、SD57 | | |
| PL.13 | H・I・J調査(遠景)、I調査区、J調査区(東
南部のみ)、SD49(東南から)、J調査区(西側
部)、SD49(北より) | | |

付図

- 付図1 E調査区遺構配置図 (S1/300)
- 付図2 GH調査区遺構配置図 (S1/300)
- 付図3 G調査区遺構配置図 (S1/300)
- 付図4 J・I調査区遺構配置図 (S1/300)
- 付図5 K調査区遺構配置図 (S1/300)

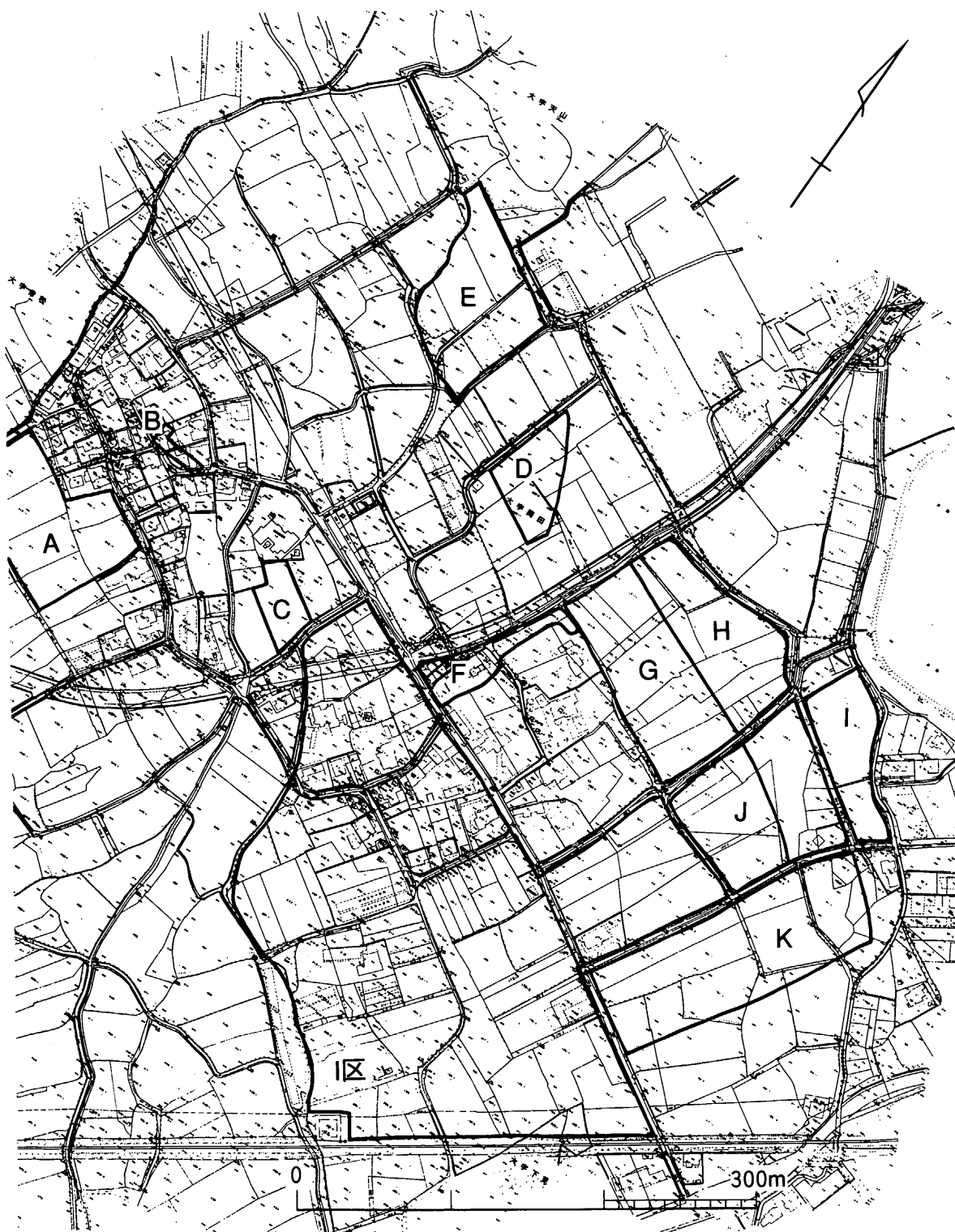


Fig. 1 A～K調査区位置図 (S1/4,000)

I. 調査に至る経過と組織

総合的な調査に至る経過については、既に「岡田地区遺跡群Ⅱ」のⅠ. 調査に至る経過で詳細に述べられているので、ここでは割愛する。

平成6年10月に官道（西海道）が確認され、この遺跡が大宰府の周辺域では検出事例としては初見であることから、官道周辺域については全面調査の必要性があると、再三、組合と工事工程の協議を図った結果理事会から工事工程を遅延させない条件で全面調査の実施の了承を得た。

これを受けて、教育委員会では応援体制をとることで工事の差し迫っているD・K区の調査を開始し、官道周辺域と二現場併行で発掘調査を実施した。

調査の組織

（筑紫野市岡田土地区画整理組合）

（理事会）				（事務局）			
総 括	理 事 長	平 城	章	局 長	吉 田	稔	
	副理事長	岡 島	勝 實	次 長	鬼 木	正 巳	
総 務	理 事	久 保	徳 松	総 務	中 川	勝 雄	
	〃	岡 島	章		蒲 原	泰 子	
	〃	菅 原	滋	換地補償（平成6年度～平成9年9月）			
換地補償	〃	富 永	義 春		早 川	清 輝	
	〃	波 賀	典 紀	工 事（平成6年度～平成7年度）			
	〃	杉 山	正 夫		桜 木	立 美	
工 事	〃	岡 島	和 志 生	（平成8年度～平成9年度）			
	〃	波 賀	仁 司		松 本	信 一	
	〃	（平成6年度～平成7.6.12）					
	〃	南 嶋	久 義				
	〃	（平成7.6.13～）					
	〃	岡部隆太郎					

（筑紫野市教育委員会）

総 括	教 育 長	永 淵	正 敏	臨時職員	柴 田	数 子
	教育部長	永 田	晋 一	技 師	小 鹿 野	亮
	社会教育課長			担 当	技 師	小 鹿 野
		岡 部	隆 充		技 師 補	（平成7年4月～10月）
庶 務	文化財担当係長（～平成7年度）				吉 田	高 穂
		森 実	秀 美	発掘調査	技 師	小 鹿 野
	課長補佐兼文化財担当係長			主 事（平成6年度応援）		
		（平成8年度～）			奥 村	俊 久
		古 賀	幸 信	技 師（平成6～8年度応援）		
	臨時職員	中 富 貴	代 美		渡 邊	和 子

Ⅱ. 各区の調査概要

1. A・B調査区

調査担当者が決定される以前の調査対象範囲の確認調査では、A・B区ともに全面に遺構が存在する旨の所見があったため、平成6年調査開始と同時に広大な地域の剝土を行った。しかしながらA区ではSK 1基、SD 1条、ピット3、B区においてもSD 1条、ピット9しか検出できなかった。このことが後の官道周辺域の全面調査の必要性に、区画整理組合から投げかけられた大きな問題点となったことは否めず、今後の調査方針を改めて検討することとなった。

前述したように総体的に遺構の遺存状況は悪く、遺物の出土も殆どない。

両区ともに遺構検出面の地山は砂礫層で、かなり削平されていて検出された遺構は底面に近いものであり、検出されたピットについても建物跡としてまとまりのあるものはない。**A区のSD 1**は北東から南西方向に緩やかに曲線を描き、長さ約14mを測る。断面は浅いU字状を呈し、幅0.25～0.3mを測る。底面は、ほぼ平坦で埋土は単一層。深さは残りの良いところでも5cm程度である。**B区のSD 1**、西から東へ向き長さ約4mを測る。東側へ延びていた可能性をもつが、官道周辺域の調査時には確認されていない。断面はU字状を呈し、幅0.8～1.5mで、深さは残りの良い所で10cmである。底面は僅かな凹凸があるものの、ほぼ平坦であり埋土は単一層である。**A区のSK 1**、検出された土坑の形状は不整三角形であるが、埋土の状況から考えると本来は長さ約2.4m、幅0.7～1.2mを測る不整長方形に電柱埋設用の不整長方形の土坑が攪乱で切ったため、検出時の形状となっている。埋土には弥生土器等が混入するが、図示できるものは1点のみである。深さは0.2～0.1mを測り、床面は凹凸があり一定していない。

出土遺物 (Fig. 2・3、1～5、PL.17)

1はピットから出土した紡錘車で、焼成は良好で淡茶褐色を呈し、径3.5cm、厚さ0.8～0.9cmを測る。2・3は磨滅の著しい弥生中期の甕の底部で、焼成は普通。色調は共に外面淡褐色、内面明褐灰色を呈す。胎土は2が細砂粒、3が1mm大の石英粒を多く含んでいる。いずれもB区からの出土である。5は弥生後期の甕の口縁部で、頸部から「く」の字状に外反しながら立ち上がり、頸部屈曲部には台形状の突帯が一条巡る。焼成良好、内外ともに淡褐色を呈し、胎土には1～2mmの石英粒が多く含まれている。5のみA区のSK 1よりの出土。

2. C調査区

A区の北側に位置する。調査対象地を再度、詳細に試掘調査し、攪乱や削平により遺構がない所を除いて調査区を設定、調査を行った。

検出された遺構はSD 3条、ピット8、SK 1基のみである。SD 1・2は北西～南東を向き、やや曲線を描くも併走する。SD 1は幅2～2.2m、深さ0.2m、SD 2は途中から連続性をもつ土坑状となる。幅0.9～1mを測り、ともにU字状を呈する。SD 3は西～東へ向い、幅約1.1m、深さ0.2mを測る。いずれも遺物は出土しないが、比較的新しい時代の所産であろう。

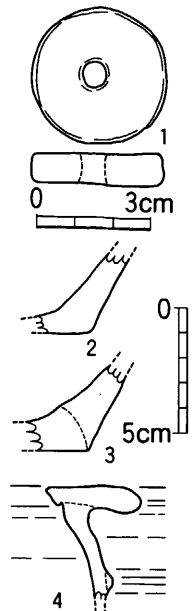


Fig. 2 出土遺物実測図 (S1/2・1/3)

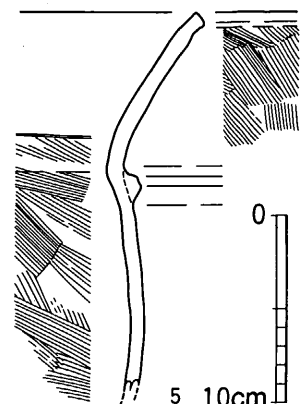


Fig. 3 出土遺物実測図 (S1/4)

3. D調査区

C区同様に試掘調査を詳細に行い、調査区を設定した。検出された遺構はSD 2条、ピット23で遺物は出土していない。SD 1は北～南東方向へ曲線を描きながら走り、幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.22mを測る。SD 2は北北西から途中不連続な土坑状を呈し、南へ延びる。幅は0.2～0.5m、深さ0.1～0.3m。いずれも断面はU字状、底面は凹凸があり一定していない。ピットも残りは悪い。

4. E調査区（付図1、PL.11）

当調査区は日焼・鞭掛遺跡の西側にあたることから、弥生後期～古墳前期に関連するものが所在するものと期待されたが、検出された遺構はSD28条、SK 4基、ピット123である。ここも前述の調査区同様、かなり旧地形が失われており遺構の遺存状況は悪い。しかしながら縄文後期の遺構・包含層が検出された事により、この周辺域に縄文後期の集落址の所在が推測される。

調査区は北・西・南側と1～1.5m程の段落となっていて、周辺域より高い部分である。遺構検出面は床土直下で基盤層はやや黒っぽい灰褐色の砂質土で、周辺の日焼遺跡と層序を比較するとかなり削平を受けていると推測できる。縄文時代の包含層が確認できる中心はSD10からSD11の間で、この部分は周辺と基盤が若干異なる。縄文期はこの部分に浅い凹みが存在したのかも知れない。

またSK 1からSD22の間のピット群の基盤は淡褐色の粘質土へと変化する。遺構の密度も調査区東側ほど少なくなり遺存状況も非常に悪く、遺物の含まれるものも少ない。しかも建物跡としてまとまるものは、なかった。

SD（付図1、PL.11）

1は南西から途中で逆くの字状に曲り、北東へ向く。幅0.7～0.9m深さ15cmを測り逆台形を呈する。幅30cmで浅いU字状を呈する2は、SD 1と10の間をやや蛇行しながら南北に走る。土坑状を呈し短い。3は北北西からSD 5と重複するところまで弧を描き、その先は僅かに蛇行しながら北北東へ向く、幅1m曲線部のみ2mで底面は凹凸があり、一定せずSD24に切られる。SD 6・7を切って北から西南方向へ走る5は、不整形な土坑状を呈し短い。6はSD 3・5に切られ東西方向に走り、幅0.8mを測る。SD 3とはほぼ平行するように走る7は、北北東側でSD 3の方へ曲り終息する。またSD24に切られ、SD15と重複する所から西方向に曲る。逆台形を呈し、幅0.9～1.1m、深さ10cmを測る。北北西から南東方向へやや蛇行しながらも併走する8・9は、長さ3m前後で終息部に近い部分で北北西へ延びていた可能性をもつ。8は幅0.3～0.4m、9は0.6～0.8mを測る。ともに浅いU字状を呈し、埋土は比較的しまりが無い。もしかすると新しい時期のものかも知れない。10はSD 3に平行しながら西から北東へ向くが、台地の縁辺部近くでくの字状に曲り北北東へ走る。幅0.4～0.6mと場所により異なるが深さは6cm前後とはほぼ一定している。孤状に検出された11は縄文の包含層の中心部にあり、幅0.6～0.9m、深さ10cm前後を測る。12は不連続な土坑状からなり、SD21を切る。幅0.3～0.8mと一定しない。SD 3・7・10に切られる13は東側へ緩やかに曲線を描きながら走り、SD14と重複する直前で終息する。14・16・18は南西～北東へ向き、幅0.3m前後、深さ4cm前後と残りが悪い、浅いU字状を呈する。20は3・7・10に直交する。SD12に切られる21は調査区北西隅で攪乱により延長方向が検出できなかった。SD22・23の間に遺存する逆台形状のものに続く可能性をもち、北側から徐々に深くなり攪乱付近で東側に曲りSD23と重複する所で終息する。22は21を切るもSD23のコーナー部分で切られる。23は西からやや蛇行しながら東へ約30m延び、北西方向へ向きを変え徐々に浅くなる。22・23の埋土は、しまりがなく柔かい。

SD出土遺物 (Fig. 4・5、PL.17)

6は弥生の甕の底部でローリングにより調整は不明。焼成は良好で内面浅黄色、外面はにぶい橙色を呈す。胎土は細砂粒を多く含んでいる。7は鉢の口縁で、外面明褐色灰色、内面はにぶい橙色を呈し、焼成良好。胎土には細砂粒を少量含む。ともにSD 1の出土。8は内外面ともに明青灰色の須恵器の蓋。胎土は精製され、堅緻で丁寧な調整を施す。SD 2出土。SD 4より出土した9は、色調内外ともに暗赤黄褐色で焼成は良好である。器表が剥落しているが、外面にハケ目がウッスラと残り、胎土も割に精製されている。10は須恵器の坏の口縁。焼成は良好である。内外面ともに明青灰色を呈す。SD 5出土。黒色処理の施された土師器の坏11は、胎土は精製されているが、焼成は普通。復元口径11cmを測り、外面は部分的にミガキで調整を施している。SD 6よりの出土。12・13はローリングによる磨滅が著しく、ともにSD 7出土。12、色調は内外ともに青灰色を呈し、焼成は普通。胎土は精製された須恵器の坏。13は高坏の脚部で、色調内外面ともに淡橙色を呈す。胎土には石英粒が僅かに混じり、焼成は良好である。調整は器表剥落のため不明。指頭痕の顕著に残る14は器台で、焼成は良好。胎土には砂粒を多く含み、外面明褐色、内面にぶい褐色を呈している。17は弥生の甕の口縁部、内外面ともに褐色の色調を呈する。胎土には砂粒を若干含み焼成は良好。14・17ともにSD12からの出土である。15はSD13出土の鉢の口縁部。外面は器表剥落のため調整は不明。焼成は良好、内外面ともに明褐色の色調を呈す。胎土に石英粒・細砂粒が少量含まれる。16

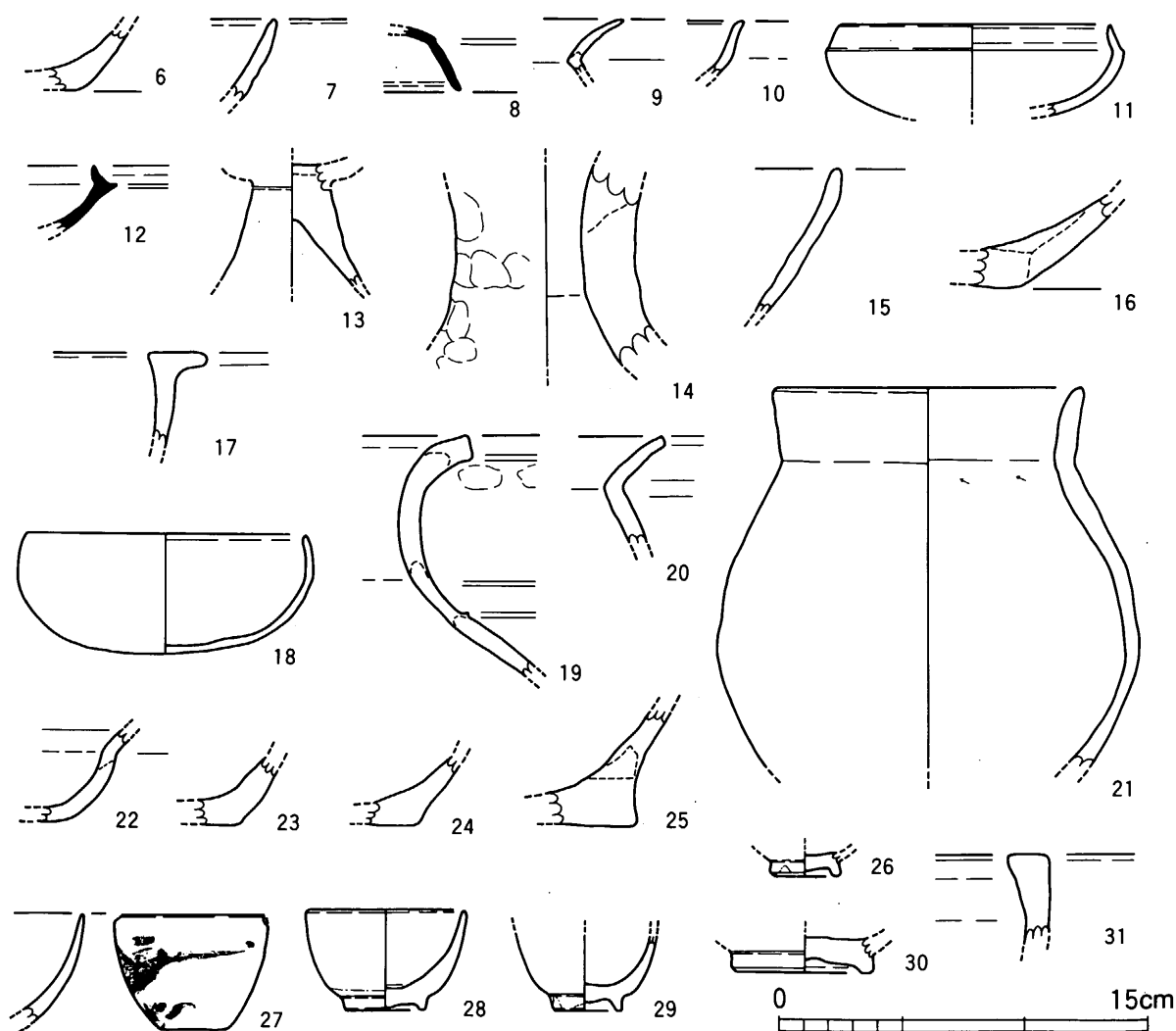
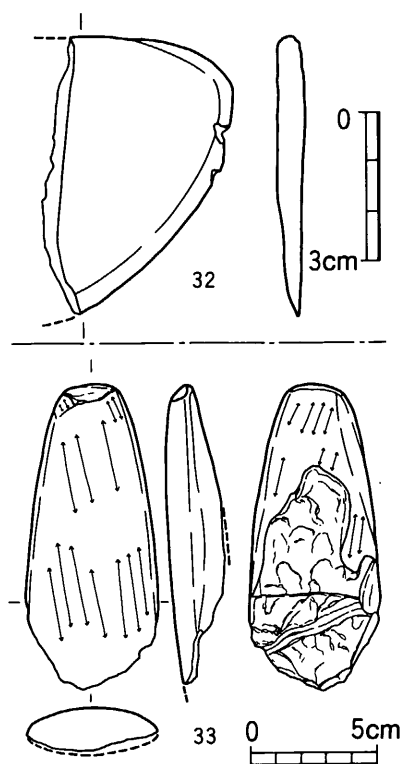


Fig. 4 SD出土遺物実測図 (S1/3)

は弥生の壺の底部で、ローリングのため器表剥落。色調は外面に
 ぶい橙色、内面は明褐灰色を呈し、焼成は不良。胎土には2～3mm
 の砂粒を多く含む。SD11より出土。19もSD11出土の壺の口縁部で、
 内外面ともに、にぶい褐色の色調を呈し、焼成は良好。頸部に低
 い凸帯が巡り、外面は指頭痕が顕著に残る。胎土には1mm程の砂
 粒を少量含んでいる。18・20～24はSD21出土。18は黒色処理の
 施された土師器坏で焼成良好。20は土師器甕の口縁部で、色調は
 内外ともに暗赤褐色を呈す。細砂粒を多く含むが、焼成は良い。
 器表剥落のため調整は不明。21は復元口径12.5cm、胴部最大径17cm
 を測る。胴部の最大径は下位にあり、内外面ともに明褐色で外面
 の一部に黒斑がある。調整は器表剥落のため不明。22は24同様、
 器表が剥落している。焼成良好、胎土には僅かに砂粒を含む。色
 調は淡黄色を呈する小型の鉢。23～25は弥生の甕の底部で、いず
 れも磨滅が著しく、胎土も精製されていない。25～31はSD22か
 らの出土。26は小盃の底部片で、高台内面と畳付部の釉を掻きと
 るが、見込部分に胎土目痕が残る。胎土は精緻で不純物は少ない。Fig. 5 出土遺物実測図 (S2/3・1/3)



27は染付碗。外面にのみ折枝梅のような樹木文と草花文風の文様の絵付がなされ、濃みは比較的薄
 く、くすむ。釉薬は半透明で丁寧になされる。28の盃は口径6.6cm、器高4.15cm、底径3.3cmを測る。
 乳白色の釉薬がうすく施され、見込には胎土目痕が残る。ちりめん高台を呈すが、絵付はなく、胎
 土にはやや不純物が混じる。29は色調白色を呈する盃。胎土は精緻。高台内面と畳付部の釉は掻き
 とられている。施釉はムラがあるため焼成時にはじけている。28と同様ちりめん高台を呈す。30は、
 著しくローリングをうけ、釉がはがれているが龍泉の碗の底部である。高台畳付部のみ釉をはぎと
 るが、高台内面の剥ぎとりは行っていないために釉薬が凝固したままとなっている。胎土も質の悪
 い素地を使用し、粗雑な製品である。32は石庖丁片、著しく磨滅し、全長・幅ともに不明。刃研ぎ
 は片面からのみ行っている。SD 3からの出土。SD21から出土した33は、蛇紋岩製の小型扁平磨製
 石斧で刃部を欠損しているが、全面研磨を施していたと考えられる。刃部は両刃か片刃なのかは不
 明で、平面形は刃部に最大幅をもち基部が狭くなる楔形を呈している。

SK (Fig. 6、PL.11)

調査区に点々と検出され、まとまった分布は示さない。形状も多様で方向も一定していない。

SK 1はSD11とSD21の間に位置し、長さ2.2m幅1.5mを測る。形状は不整長方形を呈す。底面は
 僅かに凹凸があり、北側が一段低くなる。出土遺物はFig 7～9で図示したが、縄文後期の土器と

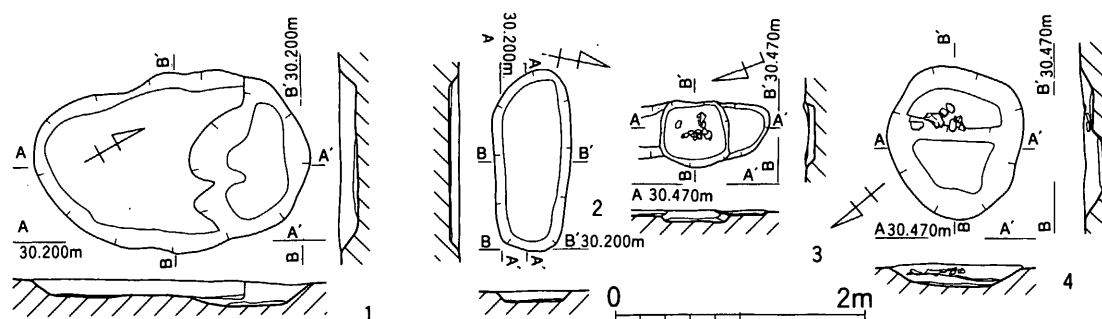


Fig. 6 SK実測図 (S1/60)

石器が土坑内に乱雑に出土した。深さは高い方で0.1m、低い方で0.2mと浅く、基盤の淡褐色粘質土を掘りこんでいる。埋土は黒褐色粘質土。調査区がかなり削平されていることを考えると他にも縄文期の遺構が存在していた可能性は大きい。SK 2、SD 1 とSD 3 の中間で検出された土坑。形状は不整長方形を呈し、長軸1.1~1.5m、短軸0.5~0.6m、深さ8cmを測る。底面は平坦で、遺物は縄文土器の細片が出土。SK 3・4は調査の東側で検出。3の形状は不整円を呈す。径1.0~1.2m、深さ10~20cmを測り、テラス状に段をもつ。出土した土器はテラスの床面からで縄文土器のみである。4は0.5×0.55mの隅丸方形を呈す土坑で深さは10cmと浅く、溝状の遺構を切って検出。底面は平坦で、埋土も茶褐色粘質土と単一である。遺物は検出面スレスレの所から出土した。

出土土器 (Fig. 7・8、PL.18)

34・35・36はSK 4出土。34は内面を条痕での調整の後ナデ調整により器面調整。外面はタテ方向に条痕により器面調整。色調は内面淡茶褐色、外面淡黒褐色を呈する。胎土は僅かに砂粒を含み、焼成は良好である。35、内面は34と同様に条痕の後ナデ調整が施され、外面はナデ調整のみ。色調は内外面ともに淡黒褐色を呈し、焼成は良好。36は内外面ともに淡黒褐色を呈する浅鉢の頸部~胴部片。胎土には少量の細砂粒が含まれる。内外面ともに条痕の後ナデによる器面調整を施している。37は焼成良好で、胎土には僅かな細砂粒が含まれる。色調は外面赤褐色、内面淡黄褐色を呈す。外面はハケ目調整後に櫛歯状工具による櫛描沈線分と櫛描波状文が交互に施されている。櫛描波状文の曲線は整っていない特徴をもつ。小片が5点出土、同一固体と思われるが接合はできなかった。櫛描文の特長から、中部瀬戸内地方の土器と思われ、当時の岡田周辺域での交流関係を示すものとして興味深い。SK 3からの出土。Fig. 8、38~56はSK 1からの出土。土器片の出土は多かったが図示できるものは少ない。38・49は碗に近い形で口縁部がやや内湾する。38内面淡褐色、外面淡赤褐色を呈し、内外面ともにナデによる調整を施し、口縁部は波状口縁で波状の中心部に凹みをもつ。同様に波状口縁をもつ49は、口唇部に刻み目をもつ。内面は淡黒褐色でナデ調整がなされ、外面茶褐色を呈し、調整は条痕の後でナデを施すが、条痕がウッスラと残っている。39は内外ともに淡黒褐色を呈す浅鉢の胴部片で、胎土も精製され、焼成も良好である。40・41・44は底部片で、いずれも内外ともにナデ調整がなされている。40の色調は内外面ともに淡黒褐色、41は内外面ともに淡褐色を呈す。44は外面淡赤褐色、内面淡黒褐色を呈し、胎土も砂粒が多く含まれて、焼成も悪くもろい。40・41は焼成は普通である。42も波状口縁をもち、口唇部に刻み目を施している。器壁の調整は内外面ともに条痕の後、ナデがなされていて内面の調整は丁寧。色調は淡黒褐色を呈す。

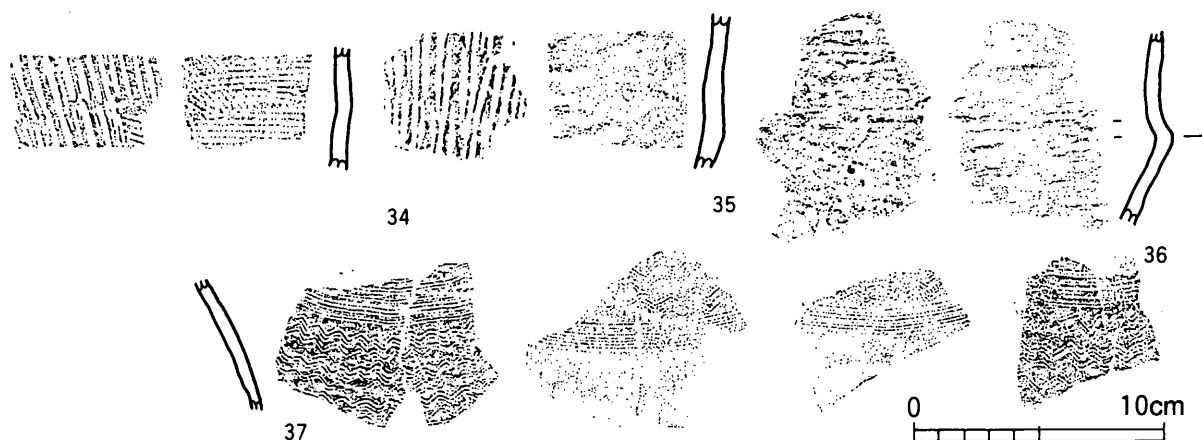


Fig. 7 SK 3・4 出土土器実測図 (S1/3)

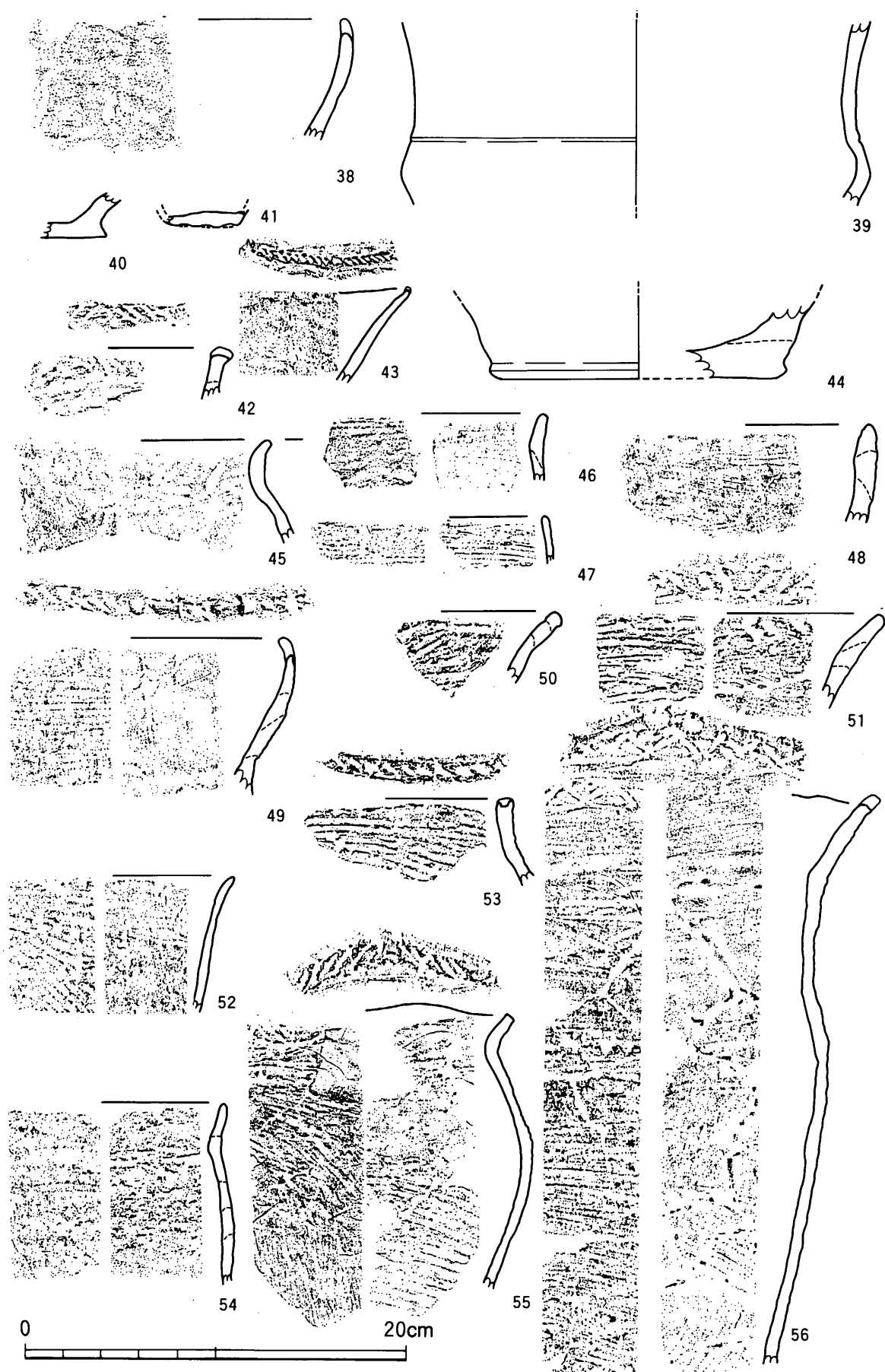


Fig. 8 SK 1 出土土器实测图 (S1/3)

シャープなつくりの43は内外面ともに淡黒褐色を呈し、調整は条痕の後でナデを施している。やはり口縁部は波状となり、口唇部には刻み目が施される。45の色調、内面明褐色、外面褐色を呈し、器壁の調整は条痕の後ナデ調整を施す。口縁部は直線的に直立する。同様に46～48の口縁部は直線的に直立して、器壁の調整はいずれも条痕の後ナデが施されている。色調は46が内外面ともに橙色、47が内外ともに暗褐色、48が外面淡褐色、内面淡黒褐色を呈している。胎土は46・47は砂粒が僅かに混じるが、48には砂粒の混じりが多い。50は内外面ともに黒褐色の色調を呈す。調整は条痕の後ナデが施されている。内面の口唇部下に沈線が一条もつ。51は口唇部に刻み目をもち、色調は内外面ともに褐色を呈する。器壁調整は条痕の後、ナデ。50・51いずれも短い口縁部が外反する。内外面ともに黒褐色を呈する52のつくりはシャープで、胎土には砂粒が少量混じるが焼成良好である。調整は内外面ともに条痕の後でナデを施したもので、内面のナデは丁寧。53は口唇部にやや大きめの刻み目をもち、色調は内外面ともに淡褐色。調整は条痕の後ナデがなされている。内面のナデは丁寧。外面はナデ調整されてるにもかかわらず条痕が明瞭に残る。頸部から緩やかに外反する口縁をもつ54は波状口縁をなすと考えられる。色調は外面明褐色、内面黒褐色を呈する。外面はナデ調整、内面は条痕の後でナデ調整が施される。胎土には細砂粒と雲母片が多く含まれる。55の口縁は短く頸部から外反し、波状口縁をもつ。内外面ともに淡黒褐色の色調を呈し、口唇部に刻み目を施す。胎土には砂粒が僅かに混じるが焼成は良い。器壁の調整は内面にヨコ方向の条痕を施した後、ナデ調整。胴部上位のナデは丁寧だが下位は条痕が残る。外面も同様に条痕の後、ナデがなされている。56は出土した土器の中では残りの良いもので、色調は外面赤褐色、内面に濃い橙色を呈す。口縁部は外反し波状となる。波頂には凹点をもち、口唇部には刻み目を有する。器壁の調整は条痕の後、ナデがなされるも、内外面ともに条痕を残している。刻み目の特徴から、北久根式土器と考えられる。

出土石器 (Fig. 9・10、PL.19)

北九州の地域では縄文後期に顕著な出土を示す黒曜石製の縦長剥片を素材とした剥片石器で、すべてSK 1よりの出土、漆黒色の黒曜石で佐賀県伊万里市腰岳産と考えられる。57・58は石鏃。57は素材となった剥片の打面側を使用、素材の主要剥離面および大剥離を残し、側辺の一部と挟入部に加工を施している。形態的には二等辺三角形を呈するが、先端部と脚部の一方が欠損している。58は大剥離面側の側辺部と挟入部に加工を施すが、大剥離面の一部を残す。主要剥離面側は全面に加工を施している。形態的には二等辺三角形を呈すが挟入部が深い。59～61はつまみ型石器。59は素材の打面側を表面から加工を施して除去。側辺部には加工を施さず、挟入部にのみ加工を施したものである。60、やはり素材の打面側を使用し、打面側と挟入部に加工を施す。挟入部は他の2つに比べ挟入が深く、長さは短い。61は素材の打面は加工を施し除去するが、バルバスカーを残す。他は挟入部にのみ加工している。59・61は黒曜石に気泡が混じるが腰岳産である。62～65は比較的大形の縦長剥片を素材としたもの。62は側辺部の一方に沿って使用痕と判断される痕跡が観察されるものである。63は素材の主要剥離面側の打面部に加工を施し、側辺部は素材のままで、両側辺ともに使用痕が観察される。主要剥離面の剥離方向は上・下方向の二方向からである。他の素材に比較して整った形をもつ64は、素材の一部に自然面を残す。打面側は主要剥離面に加工を施して打面を除去しているが、バルバスカーを残す。両側辺に沿って使用痕が認められ、剥離方向は上・横・下位からの三方向である。65は素材の打面を除去し、右側辺部に加工を施す。一方では使用痕が観察できる。66は打面側に加工を施し、打面を除去。素材の先端部を折断したやや厚手の剥片。67は打

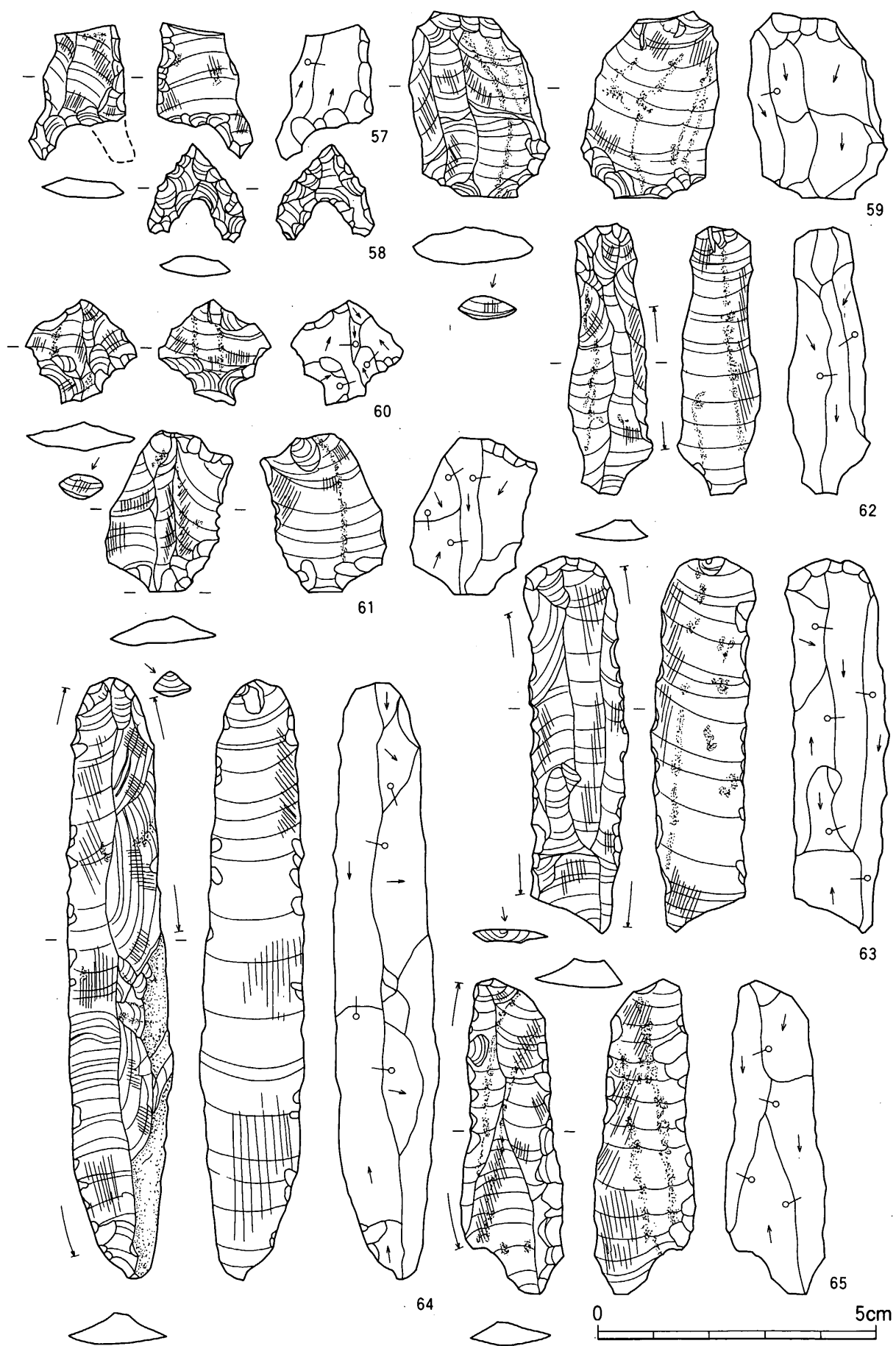


Fig. 9 SK 1 出土石器实测图—1 (S1/1)

面側を折断し、側辺部に沿って使用痕の認められるもの。68、67同様に打面側を折断。左側辺に加工を施し、右側辺部には使用痕が観察できる。66～70は気泡が混じる黒曜石だが、腰岳産である。69は素材の打面を除去し、先端部近くに加工を施す。ほぼ直線的な刃部を形成し、その延長上に切っ先をもつ。素材の剥片には自然面が残り、剥離方向は上・下位の二方向である。70はやや厚手の素材を使用している。主要剥離面の打面側の両側辺に加工を施し、バルバスカーなどを除去。左側辺部は69と同様に、やや直線的な刃部を形成し、両側辺の加工により鋭い切っ先をつくりだしている。素材の剥離方向は上方向からのみである。

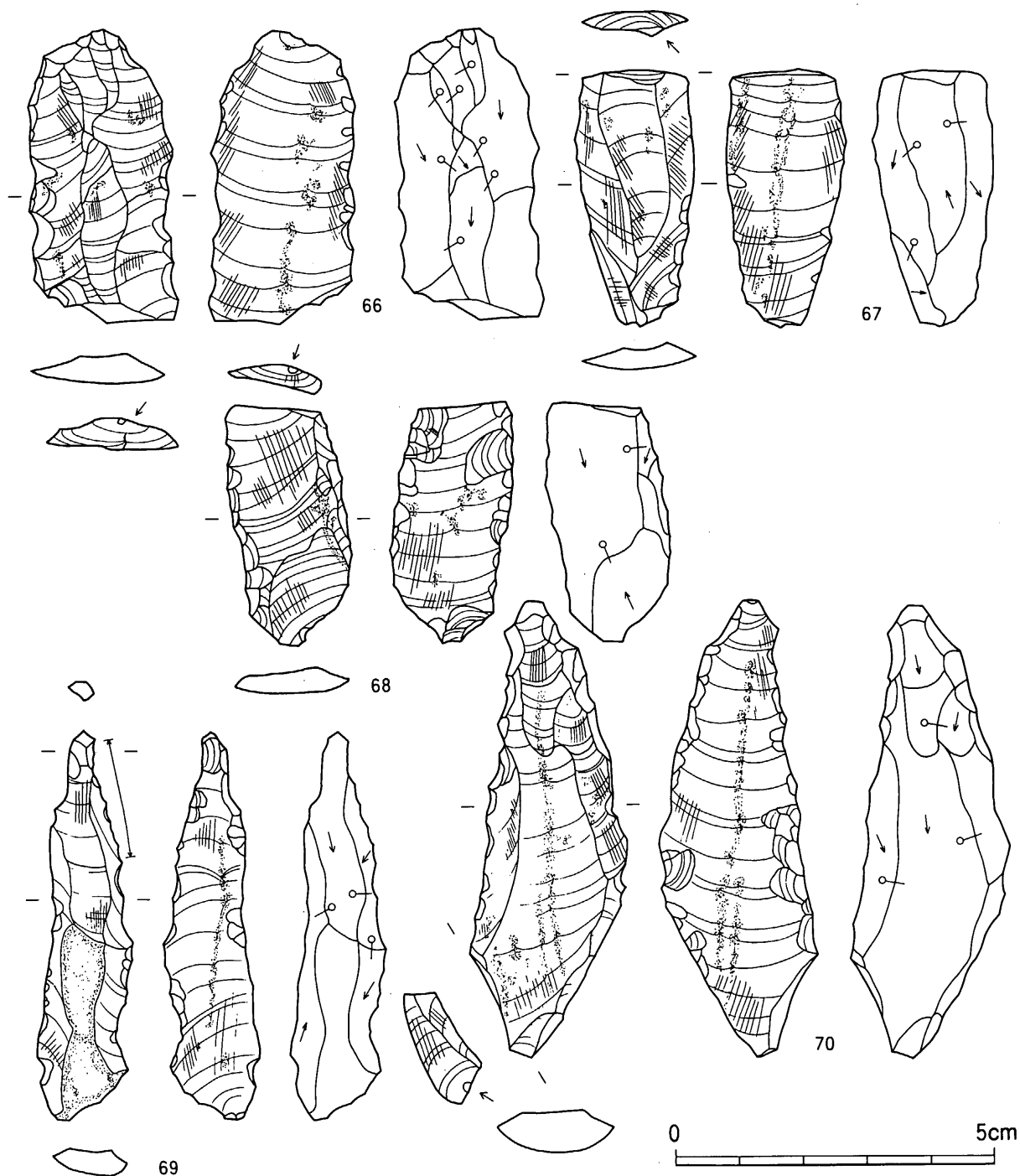


Fig.10 SK 1 出土石器実測図－2 (S1/1)

その他の遺構

E調査区内の遺構の検出状況は、概要で述べたように溝が中心の遺跡である。検出したピット123について述べる。ほとんどのピットが径20cm前後で深さも10cm程度と浅いものが多い。稀に径50～60cm前後、深さ25cm程度のものもあるが、全体として建物跡として、まとまるものは見受けられない。しかしながら埋土の状況で大別することは可能である。縄文時代の遺物を含むピットの多くは黒褐色粘質土の単一層の埋土が多く、稀に黒褐色混りの粗砂の場合も認められる。黒褐色混りの粗砂の埋土をもつピットは、縄文期の包含層と思われる部分に集中する。この他には、基盤の淡褐色土混りの黄灰色砂層もある。また近世以降の遺物しか出土しないピットや遺構（SD）の埋土の多くは黒灰色砂層の堆積が多く認められる。これらのピット群の他にも、確認調査の段階でトレンチの中に小ピットが認められたが、形状・大きさ・集中度から人為的なものでないと思われるものが多く調査の対象にはしなかった。これは鞭掛遺跡の調査でも同様の結果である。出土した遺物も細片が多く、図示できたのはFig.11に示す6点のみであった。

その他の出土遺物（Fig.11、PL.19）

71はピット35より出土した滑石製石鍋の底部片である。外面は煤が多く附着、内面は青灰色の色調を呈す。残存部より推測すると復元口径は大きなものとなり、かなり厚手の底をもつと考えられる。現状では、内面の調整は不明。外面はケズリのみで整形するが丁寧な仕上げである。ピット31から出土した72は、縄文土器の口縁部片である。内面淡褐色、外面淡黒褐色を呈し、口唇部に浅い列点を施す。内面は丁寧なナデで整形、外面は口縁部直下にはヨコ方向の条痕、後不揃いのやや大きめの列点を施す。その下位は斜方向の条痕、後ナデ調整。口縁直下の列点付近の幅の違いから、おそらく波状口縁をもつものと思われる。75も縄文土器で、胎土には僅かな砂粒と雲母を含むが堅緻な土器である。内外面ともに色調は淡黒褐色を呈す。器壁の調整は内面にはやや細めの条痕を施し、その後ナデで仕上げ、外面はタテ方向の条痕にアナガラ貝による疑似縄文を施す。丁寧な仕上げの土器である。73・74・76は表採、遺構検出時の出土遺物である。73の坏は内外面ともに色調は橙色を呈する。胎土には少量の細砂粒を含むが焼成は良い。器壁の調整はローリングで、著しく磨滅しているため内外面ともに不明。74は甑と考えられる底部で、外面淡黒色、内面褐色の色調を呈する。胎土は細砂粒を微量に含む。内面には指による整形痕がウッスラと観察できるが、その後の調整は、73と同様にローリングによる磨滅が著しいため不明瞭となっている。底部の穿孔は、中心部からズレているが一孔だけである。76は凝灰岩製の磨石で半分以上欠損している。本来はやや楕円形に近い形状であったものと思われる。表・裏面は、よく使用されたのか平坦である。しかも裏面に比べ、表面にはところどころに浅い凹みが観察されることから、磨石としての機能だけでなく敲石としての用途もあわせもっていたと考えられる。

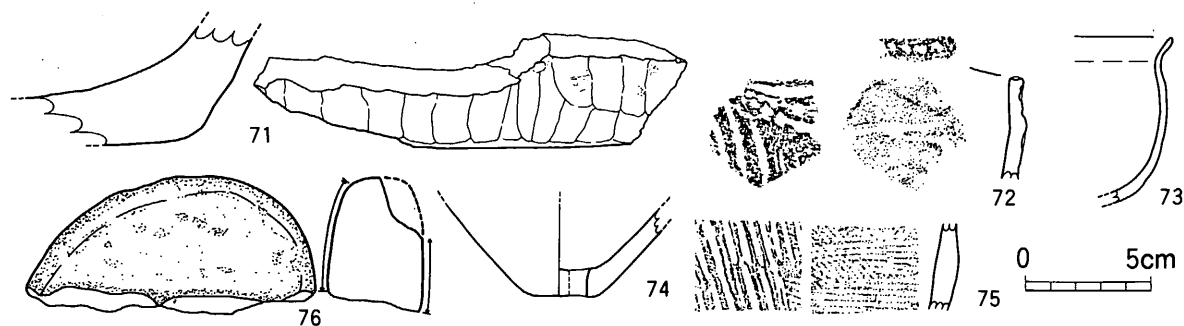


Fig.11 その他の出土遺物（S1/3）

5. 小 結

前述したA～E調査区の報告に基づき、I区の西側および北西側の遺跡のあり方、問題点を整理してみたい。

各調査区で述べたように、A～E調査は旧地形が大きく改変されている。特にA～C調査はその改変が、くり返し行われていたことはトレンチ調査でも確認できた。この地区はI区を含めた自然堤防上に立地していて、C調査はその端部に近い所である。報告書作成中に気づいたことは、くり返し改変がなされたにも、かかわらず部分的に官道の地割ラインが確認されることである。この自然堤防上の延長ライン～宝満川に向かって圃場整備の確認調査を行ったが、総体的に基盤は残らず遺構等は検出できなかった。しかも現況の地割にも官道ラインを見いだせない。これは宝満川の度かさなる氾濫によるものと考えられる。

E調査区は周辺の田と1.0～1.5m程度の比高差があり、宮地岳から南に延びる丘陵の裾端部と推測でき、日焼遺跡の一部と考えられる。日焼遺跡の報告ではもっと北側を裾端としていたが、地形の改変により遺跡が削平されていたと考え、今回の調査地点まで含むこととした。E調査区における遺構のあり方は丘陵縁辺部にのみ遺構が遺存したと推察できる。

E調査区出土の石器について (Fig10・11、PL.19)

筑紫野市内では、縄文期の土器・石器はほぼ全域から出土している。その中でも縄文早期のものは萩原・天山・小賀谷・原遺跡から、まとまって出土している。その他の時期のものは散発的な出土状況であった。縄文後期の遺構に伴って、まとまって出土したのは今回が初めてである。

今回出土の石器は、西北九州（特に佐賀・長崎・福岡を中心として）において縄文時代中・後期に存在する黒曜石製の縦長剥片を素材とする石器群と考えられるもので、“四箇周辺遺跡調査報告書” (2)の分類に従い述べてみたい。57は素材の主要剥離面・大剥離面が大きく残されたものでⅢ類いわゆる剥片鏃である。58は大剥離面の一部が残されているもので広義の剥片鏃、Ⅱ類に分けられる。いわゆる“つまみ型石器”と呼ばれるものである。62～70は刃器に大別できるもので、さらに細分できるがⅠ～Ⅲ類でとどめた。Ⅰ類は形のよく整った剥長剥片を素材にし、その一端を一側辺あるいは両側辺から尖頭状に整形しているもので、ほぼ直線的な刃部とその延長上に鋭い切っ先をもち他の刃器とは明確に区別されるもので、ここでは69・70が該当する。69・70は鋭い切っ先部とは判断しにくい観もあるが、一応Ⅰ類の範疇として扱った。Ⅱ類はⅠ類と同様に縦長剥片を素材としているが、二次加工は側辺部に沿ってあるいは局部的に施されている。Ⅰ類に比較するとその剥離は不揃いで全般的にやや粗雑な感じを受ける。そしてさらに剥片の一端もしくは両端が、意識的に折り取られたと考えられるものと、素材の形状をそのまま保ったものに細分できるが、今回も細分はせず一括した。63～65・68がⅡ類の範疇と考えられる。Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類同様に縦長剥片を素材にするが、その側辺部や局部には二次加工が認められず、使用によると考えられる刃こぼれや擦痕が観察できるもので、Ⅱ類同様に剥片の一端もしくは両端が、意識的に折り取られたものと形状を保ったものに細分できるが一括した。62・66・67がこれに該当する。この様にSK1から出土したものは、縄文中・後期に特徴的な剥片石器を出土した例として把握できる。しかも遺跡の立地状況を考えると、E調査区の周辺域は丘陵・山地に近い位置にあり、宝満川の自然堤防が点在する地域でもある。調査区内は後世にかなり削平を受けて、縄文期の遺構が失われているとは云え、この周辺域に生活址が存在していた可能性はおおきく興味深いものである。

6. F 調査区

老松神社の位置する一郭は区画整理内の現地換地の所で、大規模な改修のなされない部分であった。しかしこの一郭の西辺および東西辺に土塁が現存していて、中世以降の館址が想定できるため土塁内にトレンチを設定し確認を行った。そして西辺の土塁は下ムチカケ～日焼線の道路拡張に伴い一部が削平されるため、現況の測量および土塁の土層断面図を作成した。さらに老松神社境内にある石塔の調査を行い、F 調査区とした。

土塁 (Fig.13～15、PL.12)

調査時に遺存していた西辺から北西側コーナーおよび北東辺の測量図を作成し、北コーナーから南へ25mの位置にある現在家屋の出入口を土層観察用として調査。

現状では、土塁の上部は幅1.5～2.0m程の平坦な面をなし、竹林となっていて、土塁上の柵列などは検出できなかった。さらに土塁の内部は家の建築等で平坦にさらに外部の土塁裾は、下ムチカケ～日焼線の一期工事により削平され、溝の有無は確認できない。

土層観察によれば旧地表面上に暗茶褐色粘質土を10cm前後積んで基底面としている。現存での基底面は2.85mを測る。この基底面の上に幅1m、高さ50cm前後の積み土を行う。さらにこの積み土よりやや低めに外部に向かって積み土を行い、平坦面を形成。平坦面の上部に積み土をくり返して土塁の頂部を形成していったものと推定される。そして土塁の内部側には頂部より一段低いテラス状のものがあつたと考えられる。

土塁の積み土には、版築による手法は用いられておらず、粘質性をもつ土やバイラン土を積み重ねただけである。高さとしては竹の根によるカクランが進んでいるため、最高所で1m、テラス付近で60cm程度を確認したにとどまる。

北西コーナー部から東へ遺存する土塁は、西辺部に比べると上面もやや広めで、高さも僅かに低く東へいくほど破壊されている趣がある。この土塁の外周部に土塁線に沿うように幅2.5m前後の道があり、溝跡ではないかと仮定したが、改修されない場所であったため、トレンチでの確認調査はできなかった。このように西辺部・北東部の外周の溝は明確にならなかった。コーナー部は若干の凹みをもって、上述した道に続いているが、これもこの時点では土塁に関連するの否か不明である。ただ土塁内に邸宅のある92才の久保キミコ氏によれば、外周に“中山堀”と呼ばれるものが存在していたと聞く。このことから一応、外周に堀があつたものと想定しておきたい。

出土遺物 (Fig.12-77、PL.19)

F調査区からの出土遺物は、図示した77のみで他はまったく出土していない。 Fig.12 出土土器実測図 (S1/2)

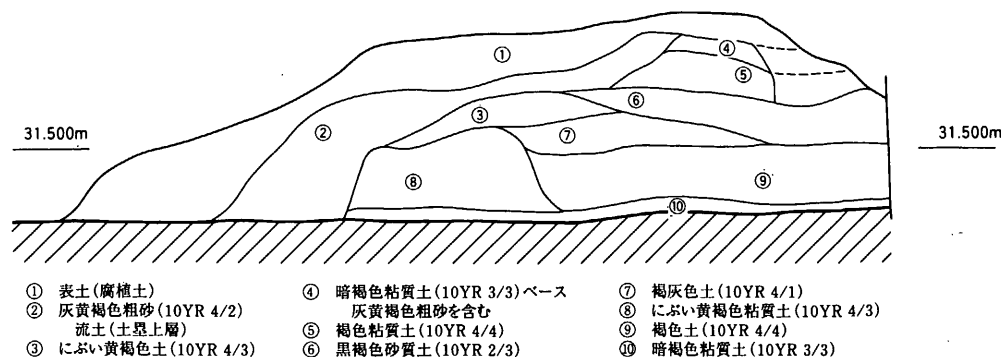
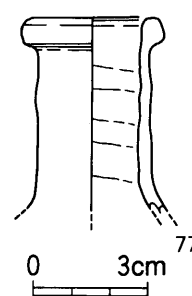


Fig.13 土塁土層図 (S1/40)

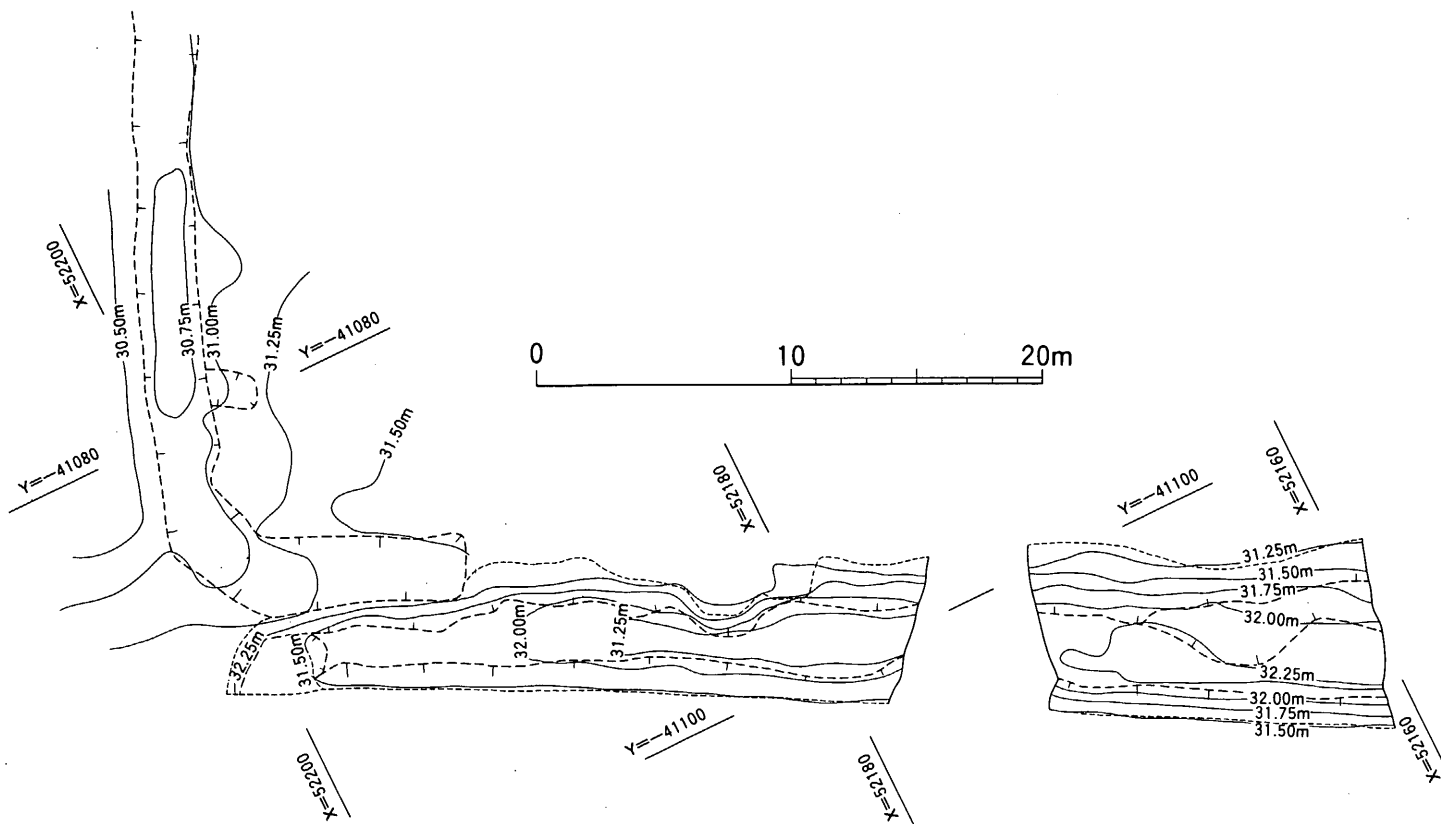


Fig.14 土塁現況測量図 (1/300)

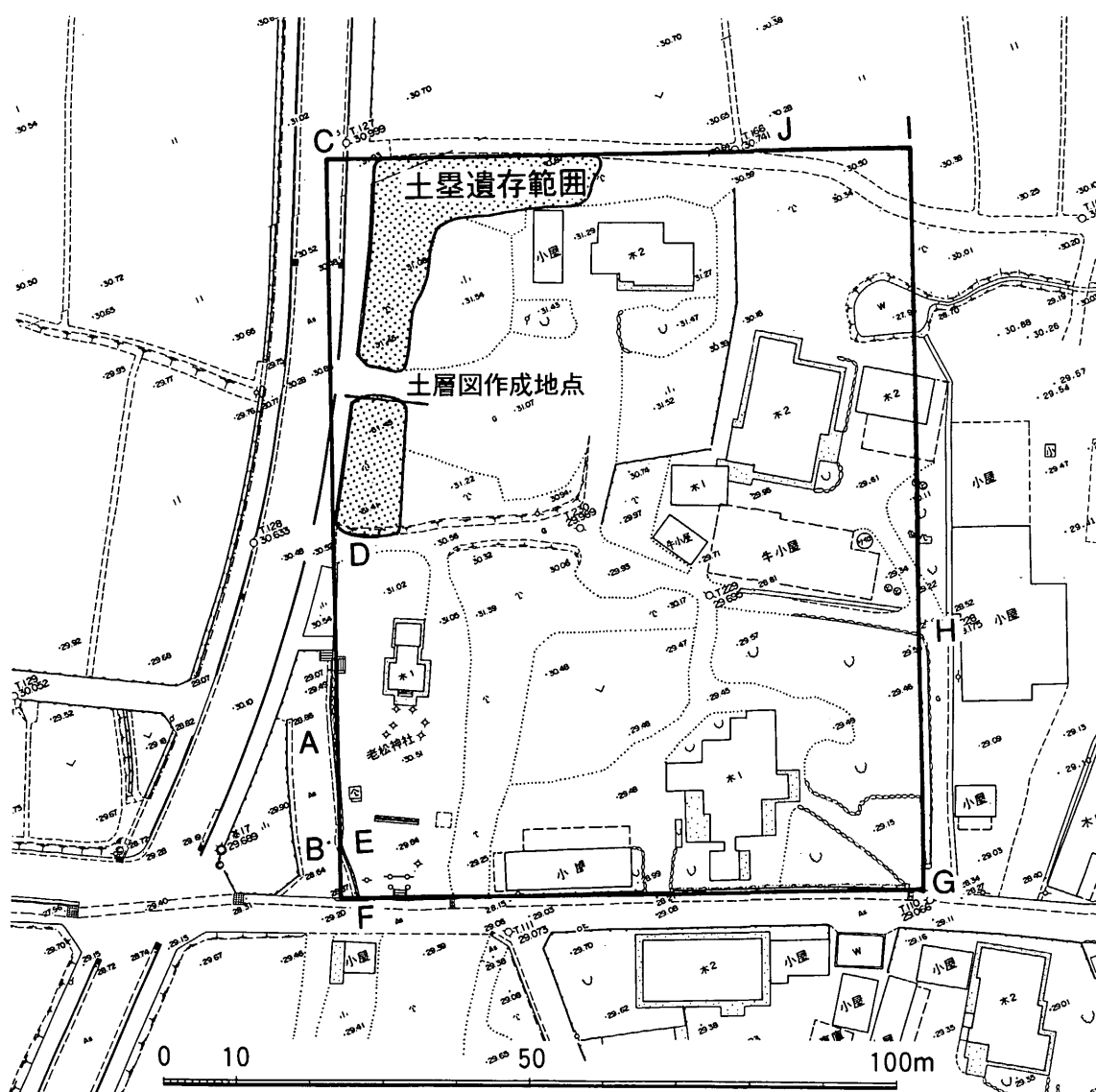


Fig.15 館址推定図および土塁遺存図 (S1/1,000)

土壘の積み土、基底面から60cmの所から出土。徳利の頸部で、口縁部は小さく折りまげた玉縁をなす。口径3.8cmを測り、胎土は精製されていて堅緻な陶器である。釉は全面に施釉されていて、色調は暗オリーブ色を呈す。

7. 館址について

前述のように館址と考えられる一郭は西辺と北西コーナー、北東に土壘が残されていたにすぎない。郭内の館全体の規模、土壘の囲繞方法を窺うことはできないが、周辺の地形・地割ラインから復元を試みてみたい。

岡田地区遺跡群の占地は、後背湿地の点在する自然堤防上に所在する。その中でも土壘の遺存する一郭は、その自然堤防上の北西側に位置し、北側をのぞく三方とは1 m前後の比高差をもつ高まりにあたる。北側部分は宮地岳より派生した丘陵端部が自然堤防に接する所で、周囲には後背湿地が多く点在して、やはり周辺部とは比高差が認められる。

Fig.15で示すように土壘が明確に残存するのは、C-D、C-Jの範囲で、J-Iには土壘を破壊もしくは切り崩して、できたと思われる高まりが残存する。土壘の遺存するC-Jと老松神社入口側F-Gの地割ラインは、ほぼ併行して存在している。F-Gが区画のラインが残っていると仮定すると南北の幅が100mと推定できる。また老松神社の西側のA-B、D-Fさらに久保正勝氏宅への入口部G-Hがほぼ併行することを勘案すると館址の推定域はC-F～G-Iと想定できる。さらにD-Fから西側の余剰帯は下ムチカケー日焼線に交差するが、不合理な余剰帯として捉えられ、A-BがD-Fに併行する事などからA-B～D-Fの間は溝状遺構の存在を彷彿させる。しかしここは改修のなされない所なので調査による明確な確認はできていない。ただF-Gの水路改修工事の際に観察した土層によれば、泥炭状の黒色粘質土が1 m前後、認められ、やはり溝状遺構の存在は否定できないものと考えられ、現状の地割ラインから溝の幅は3 m前後を測るものと想定できる。北辺部の土壘の外周には2.5～3 m程度の浅い水路状のものが巡り、西辺と同様に溝の存在を推定させる。現状ではC-I～C-Fには溝が存在していたと想定しておきたい。

溝および土壘のコーナー部分は、どのような形態であったかを検討してみたい。北辺のJ-Iに向って南側へ水路が曲がる。これを北東コーナーの残存部として理解しておきたい。同様にE-Fにも直線ではなく、東側へ曲がっていく地割線が残り、これが南西側のコーナーと位置づけられる。現況測量図では郭内から郭外へ水路状のものが流れ、土壘が交差する形態を示す。これらから土壘は多少蛇行し、コーナー部分は曲線を描くものと想定できる。このことから100×85mの長方形の形態をとり、現状では北・西側に溝を配する館址？を想定できる。

一方郭内の空地部分にはトレンチを設定し確認調査を行ったが、攪乱も多く遺構等は検出できなかった。D-Hラインより南側の老松神社側は安定した基盤層は、すでに削平されていることが確認できた。旧地形を考慮すると、館すなわち建物が築造された時は、南側部分は積み土による整地がされ整備されていたと思われる。上述した様にトレンチ調査では建物などは確認されなかったが主たる建物は現存の家屋の位置にあった可能性もある。

年代については、出土遺物は一点で良好な時期決定の資料とは云えないが、ローリングを受けたものではなく上限を示すものと考えられる。出土土器からは中世頃と位置づけられ、長方形単郭の居館様式は鎌倉時代以降の館と考えられる点にも符号できるとされる。

余談になるが、郭内に邸宅を構える久保正勝氏の系譜は高橋紹運の時代（16世紀末）までは確実

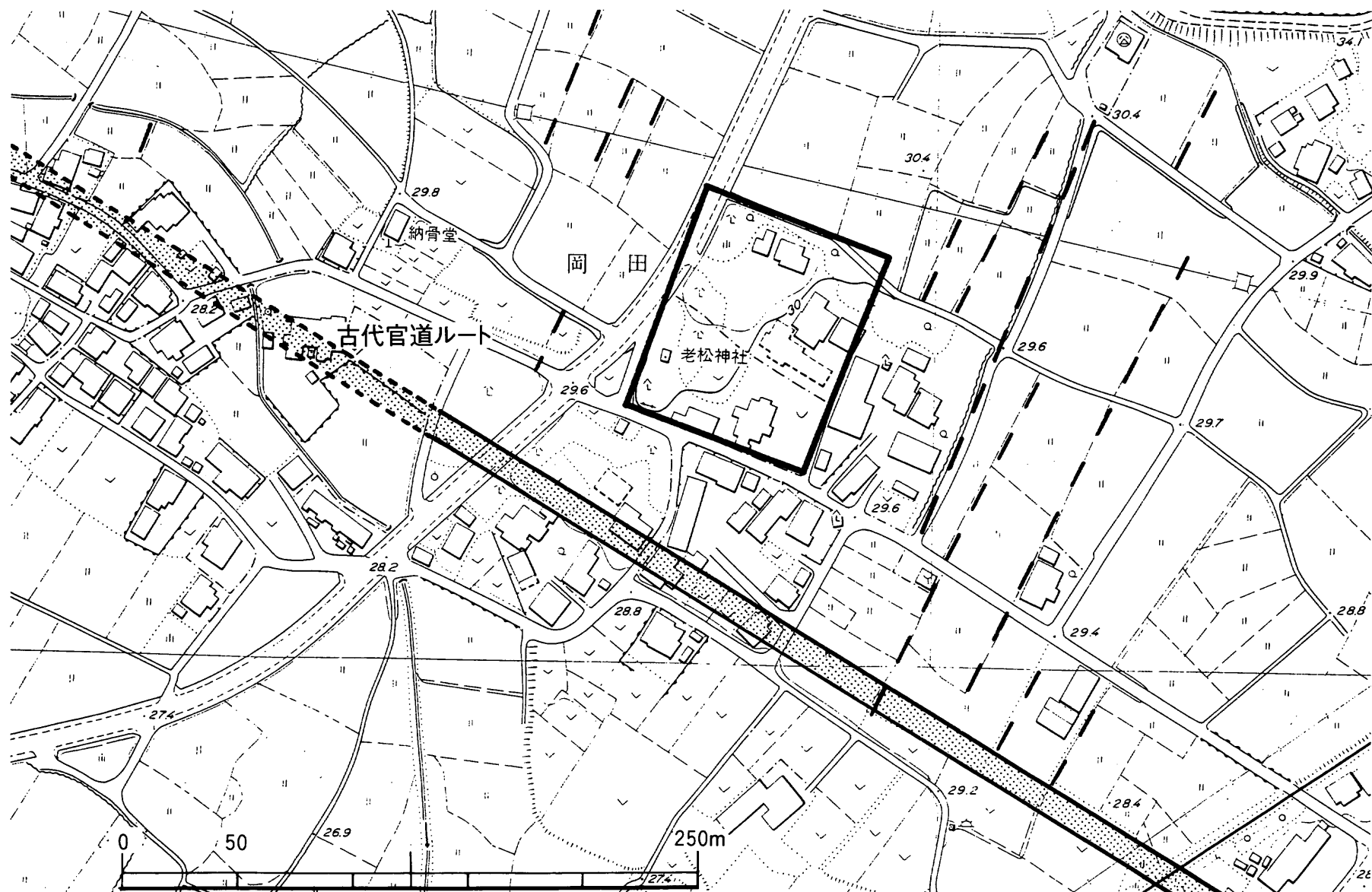


Fig.16 推定館址と地割遺存図 (S1/2,500)

にさかのぼることができ、久保家は代々ここを居住地としていたと聞く。そして久保氏宅を最近まで、ナカンキド（中木戸？中城戸）と俗称し、郭内にある塚状の屋敷神？、江戸時代末に勧請された老松神社の祭礼は久保家が行なってきたとも聞く。このことは久保家と土塁あるいは館址との直接的な関わりを示す資料ではあるが、根拠ともならない。しかし、あながち否定できうるものでもないと考えられる。周辺域を見渡せば、中世の城と考えられるものも近隣には存在していることから中世のものと関連づけられるが推察の域を出ない。現状では館的で該期村落とは異なりながらも日常生活を営むにふさわしい位相をしめしていたものと考えたい。

官道廃絶後に、これらの素地となるものが存在し、中世へと受け継がれていったのか確認できるまでには時間的にも、浅学で勉強不足の感は否めない。多少なりとも報告書作成でこのことを考える機会になり、改めて今後別稿で官道廃絶以後の相関関係を検討してみたいと思う。

8. 岡田地区遺跡群に残る地割について (Fig.16)

古代官道の地割線は、I区の報告書でも述べられている様に区画整理前の地図上に読みとることができる。しかも岡田地区の既存宅地は古代官道に沿って建てられていて、最近まで古代の基本的エリアが残っていたことが分かった。このことに関してはI区の報告書に詳細に述べられているので略す。そして官道北側部分は明治以降の耕地整理で古代の景観が失われたものと理解していたが、老松神社の一郭に館址が存在することから再度検討すると、館址と併行する地割線を随所に見出すことができた。しかもI区で報告された、老松神社の東隣の調査では古代の建物跡とは時期差もあり、建物自体の方向が明らかに異なる一群の建物跡が検出されている。これらの一群の建物跡は館址と考えた土地地割に一致する。このことは古代中心域に拠点的にあったものが荒廃し、老松神社の一郭に拠点的な中心域が推移したことを示唆していると云えよう。

これらを総合すると岡田地区遺跡群は、耕地整理がなされたとは云え古代のエリアを部分的に残しつつ、中世以降の地割を随所に残す融合された土地であると云える。また周辺域では条埋地割は確認されていない。これは官道が整備され官衛的施設が配置されて後にも生産基盤となる地形が、周辺域もしくは、この自然堤防上に存在しなかったことも示していると思われる。

9. 老松神社境内所在の石塔 (Fig.17、PL.12)

阿弥陀三尊「板碑」

岡田地区の板碑は、産土神である老松神社の鳥居右側に安置されていた。これは、灰白色の砂岩の正面のみを平らに加工しており、両側縁・背面は自然面を残している。地上高1.8m・幅1.0m・厚さ0.5mを測り、比較的小型のものである。額部付近の形状は著しく乱れており、額部～頂部にかけては欠失している可能性が高い。全体的に損傷が激しく碑面が風化しているため、種字もわずかに残っている程度で、紀年銘や偈文・願文などは確認できなかった。このため碑の年紀や造立主意については不明である。現状が原位置ではないことは確かだが、移設されたにしても岡田かその周辺にあったものであることに間違いはない。

種字の配置は、キリーク（阿弥陀）を中心としてその下位にサ（観音）・サク（勢至）を配する典型的なモチーフの阿弥陀三尊の板碑であるが、蓮台や花瓶・三具足などの装飾文様は刻まれていない。種字の形状は方形に近く、薬研彫りで刻まれているが、全体的に肉薄で鋭さに欠け、やや貧弱な感じを受ける。キリークの「イー」の払いが強く短く抜かれており、癖のある字体である。

板碑の造立行為は、平安末～中世にかけて全国的に行なわれた仏教作善である。福岡県では延久

二（1070）年の自然石板石塔婆^{（註1）}が最も古く、13世紀末～14世紀には板碑文化が波及していたものと考えられる。岡田地区の板碑は、状況から推測すると、少なくとも14世紀以降のものである可能性が高い。

今回の調査では、老松神社の西側から裏手にかけては土塁が確認されている^{（註2）}。また地元では、神社の東側周辺が「ナカンキド」と呼ばれていたらしく^{（註3）}、在地勢力の（館のような）拠点があった可能性がある。この板碑は、こういった状況のなかで創出されたものなのかもしれない。

「猿田彦大神」銘の文字碑

上記の「板碑」と並立して安置されていた。地上高1.35m・幅0.75m・厚さ0.5mを測る。石材は砂岩を用いており、全面のみ平らに加工したもので、碑身の中央を二重に窪ませて「猿田彦大神」の字体を配置している。銘は薬研彫りで、石の中心軸に対してやや右傾ぎみに刻まれているし、刻みもどちらかといえば雑な感がありバランスが非常に悪い。

猿田彦大神は、記紀に登場する天孫降臨に関わる国津神である。江戸時代中期以降は「庚申さん」として盛んに喧伝され、庚申塔に刻まれたり掛け軸になったりと全国的な普及をみる。しかし、なかには鬼門除け（屋敷神として）や三隣亡除けのために造立した例^{（註4）}もみられ、庚申塔のバラエティーは非常に多岐にわたっているため、本報告では「庚申塔」としては扱わなかった。

註1 福岡県直方市植木観音堂所在。

播磨定男「九州所在の板石塔婆」『徳山大学総合経済研究所紀要 第4号』1982年

註2 本報告書p.14～p.18を参照のこと。

註3 久保正勝氏ご教示。

註4 群馬県渋川市・八幡神社境内の例などがある。

参考文献

小沢国平『板碑入門』国書刊行会 1978年

播磨定男『中世の板碑文化』東京美術 1989年

小花波平六「信仰の部」『日本石仏事典（第二版）』雄山閣出版 1980年

福岡県教育委員会『九州の石塔～福岡県の部』 1973年

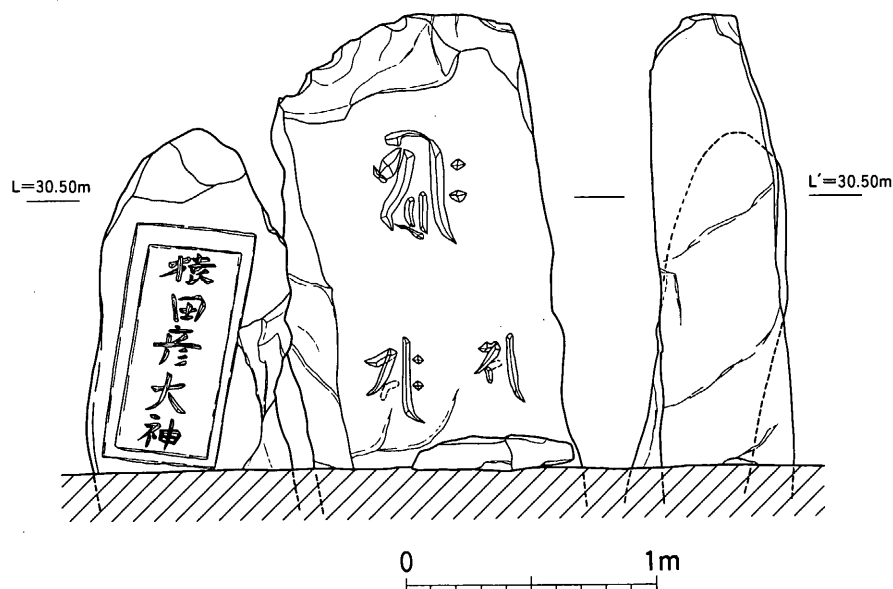


Fig.17 石塔実測図 (S1/30)

10. G・H調査区（付図2、PL.12・13）

工事の工程上、平成7・8年度に分割して調査を行なったためG・H調査区とした。総合した検出遺構は、溝15条、ピット85を数える。

調査区の東南中央付近に溜り状の湿地の肩部が検出された。これはJ調査区の西側に位置する湿地状溜りと同一のものである。

SD56は、この調査区内では大きな溝で北側から南へ走り、僅かに蛇行しながら前述の溜りへと向かう。北側は調査区外へと延びる可能性をもつ。溝の幅は北側で最大となり4.0m。深さ1.4mを測る。途中稜線があったりテラス状のものも見受けられるが、大まかには幅1.2～1.5mで逆台形状の断面をなす。この溝は出土遺物からI区の官道下で検出されたSD50と関連があるかも知れないが、両溝とも溜り状に向って走るため、現状ではつながるか否か明確でない。SD56の東

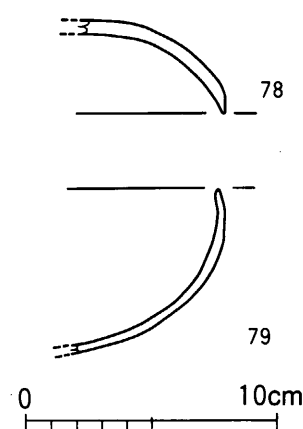


Fig. 18 出土土器実測図 (S1/3)

側には現道路に沿うように三条の溝が検出された。これらも北側へ延びる可能性をもち、北端より17mの地点で三条が交差する。その内の二条は、緩やかに曲線を描き南へ向って終結する。残りの一条は南東側の溜り状へ向かう。いずれも断面形はU字状をなし、東端よりの二条は幅20～25cm、深さ5cm前後を測る。残りの一条は、SD56と同様に北西端に最大幅をもつが、幅0.5m前後、深さは10cm程度のものである。SD56の西側には幅0.4～1.0m、深さ10～30cmのものがSD56とほぼ併行しながら走る。これも溝の最大幅、最深部は北西側で断面形状はU字形である。

北西側から曲線を描き不連続な土坑状のSD58は、幅0.5m前後を測る。蛇行しながら南へ向かって延び20mほどで終息する。その終息地点付近から同様な形状、大きさの溝が蛇行して南へ走る。埋土が同様の単一層で、形状などを考慮すると同一のものと思われる。

SD59は西から東へ向う溝で幅0.4～0.7m、深さ10cm前後を測り、やや蛇行するが直線的にSD58と交差する直前で終息し、10m程の間かくをあげ同様な形状をもつ溝が溜り状へ向かう。これに併行する様に土坑状の不連続な溝が西～東へと走るが短い。埋土などは横の溝と同一である。

SD60は西～東へ弧を描きながら走る。これに交差するように北～南へ蛇行しながら幅0.4～1mの溝が走る。これも最大・最深部は北側にあり、南側で終息する。断面形状はU字形を呈す。この周辺にピットが多数検出されたが、建物などとしてまとまるものはない。G・H調査区内では15条の溝が検出されたが、ほとんどのものが埋土等から考慮して、極端に古いものとは考えにくい。この中では唯一SD56のみが古墳時代のものとして位置づけられよう。

出土遺物 (Fig. 18、PL.19)

78・79ともにSD56から出土したものである。78はローリングを受け、器表は著しく磨滅しているが部分的に調整痕が認められる。内外面の口縁部付近はヨコナデが施されている。そして口縁部と体部堺目付近に不規則なコテ圧痕を施す。胎土は精製されていて焼成は良い。色調は内外面ともに褐色を呈す。復元器高3.8mを測り、口縁端部は直線的な蓋である。79は碗で色調は内外面ともに明褐色を呈す。胎土は精製されているが焼成は普通。調整は口縁部付近は内外面いずれもヨコナデで仕上げ、内面の体部は不定方向のナデを施し、外面の体部は手持ちのヘラケズリで仕上げる。現存器高6.8cmを測り、外面部の口縁部と体部堺は、ヘラケズリでやや直線的、口縁部は内湾して、体部から底部へはスムーズに曲線を描く。

11. I 調査区 (付図 3、PL.13)

調査区の西側と東南側に溜り状の湿地が所在。その溜りを結ぶように幅 5～6 m の自然流路状のものが蛇行しながら、調査区の中央部に検出され、遺構をのせる安定面は、この自然流路状のものを挟んで細長く存在する。検出遺構は溝 15 条、ピット 190 である。総体的にピットは径 20 cm 前後で深さ 20 cm 程度のものが多く建物跡としてはまとまらない。

SD48 は幅 0.4～0.55 m に深さ 8～17 cm で南から北東へ向かって自然流路状に流れこむ。流路を挟んである SD44 も同様な方向に走るが流路側が幅 0.7 m、深さ 15 cm、北東側が幅 0.45 m、深さ 20 cm を測り、流路側がやや浅い。北西から南東方向に直線的に走る SD45 は、幅 1.3～1.2 m、深さ 15～4 cm を測る。いずれも断面は U 字状を呈し、埋土もしまりがなく単一層である。SD45 の北側にある SD46 は、平面土坑状をなし「く」の字状に曲がり、幅 0.5～1.1 m、深さ 5 cm 前後を測る。SD47 は幅 0.3 m 前後、深さ 5 cm 前後で南西から逆 L 字状に東南側に曲がり、流路へ向かう。これも浅い U 字状の断面を呈する。また流路の中にある溝は流路が埋没した後にできたもので、新しいものと思われる。

いずれにしても検出された溝は、概ね溜りや流路に向かう様に掘られていて、水はけを十分に考慮にいたした結果つくられたと思われる。

12. J 調査区 (付図 3、PL.13)

この調査区も工事の都合上、平成 7・8 年度に分割して調査を行った。G・H・I 調査区で述べたように調査区の西中央部と北側に湿地状の溜りが存在している。全域は安定した基盤上にあるとはいえ、縦横に近代の土管が配されている。検出された遺構は溝 22 条、ピットで 7 ある。

SD49 は東南から北へやや蛇行しながら西側へ曲線を描いて、I 調査区の西側の溜りへと向かう。この溝は K 調査区の SD35・32 が重複していて平面形状は幅広で片側にテラスがある様に誤解しやすい。溝の底面は水の流れの勢いを示すように著しく蛇行している。幅 0.35～0.45 m の SD50 は蛇行して、SD49 と同様の溜りに向かって走る。SD49 と SD51 の間にある 7 条の溝は幅 0.5～0.75 m、深さ 5 cm 前後で、土坑状の不連続な溝が併行して走る。総体的に幅 0.4～0.75 m、深さ 5～10 cm 程度で浅い U 字状を呈し埋土はしまりのない単一土層である。SD51 は K 調査区の SD40 に続くと考えられる溝で、東端部は幅 4 m、深さ 87 cm で蛇行しながら 15 m ほど延び、そこで K 調査区から走る SD 4 を切る。さらに 25 m 延びた所で、溝幅が狭くなり北西の溜り方向へ向かう。この変換点で溝の断面形態も変化するため、SD40 は本来は 40 m 付近で終結していた可能性もあるが、分割して調査した場所でもあり調査担当者も違うため詳細な確認ができていない。調査区の南側に位置する SD52 は、K 調査区の SD 3 と同一と考えられる溝で、断面形態は Fig.19 で示すように逆台形を呈す。東南端からやや蛇行しながら 40 m 程北上し、ほぼ SD 4 と併行しながら走り、また 40 m 付近で大きく弧を描きながら溜りへ向かう。また東南端から 8 m 付近で SD54 を切る。SD54 は幅 1～2 m で緩やかに弧を描きながら北西へ走り、断面形は浅い U 字状を呈している。

西中央部にある溜り状の湿地のプランは明確にならず、肩部から数段にステップ状のものがつき最深部へと向かっている。

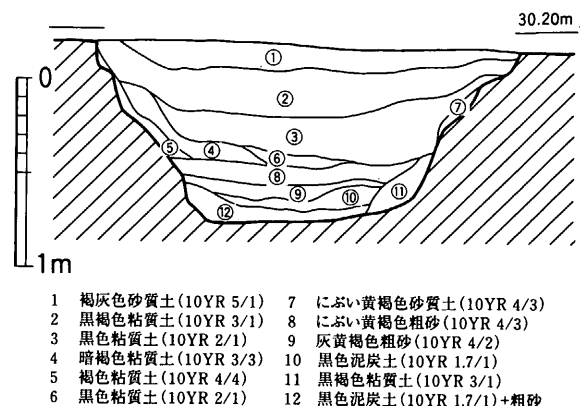


Fig.19 SD52土層図 (S1/40)

出土遺物 (Fig.20、PL.19)

80・82・83・85・87・89はSD49出土。80、畳付部は露胎するが他は施釉のなされた碗。保存状態が悪い82は内面に鉄分が付着する。畳付部以外は全面施釉がなされ、オリーブ灰色に発色している。83は外面にのみ施釉がなされた播鉢片で、口唇部はヘラ切で平縁。内面灰黄褐色、外面褐灰色を呈し、胎土には僅かな砂粒が混じる。85、細粒砂岩製の砥石。本来は長方形の形状を呈していた可能性もあるが、欠損部が多く明確でなく、現状では3面の砥面をもつ。87は筒状碗の底部で、内面の見込みと高台畳付部には釉が施されない。絵付は不明で腰部に二条圈線が巡り、高台部に砂目痕を残す。土師器の碗の高台部である89は著しいローリングにより器表剥落。内外面淡褐色の色調を呈す。SD50から出土した88は染付碗の高台部で、色調は緑灰色を呈し濃みはかなりくすんでいる。高台付近に三条の圈線が巡る。81は染付碗の高台部である。内面見込みと外面高台内側に砂目を残し呉須がかなりにじんだものになっている。色調は淡緑灰色を呈す。SD51より出土。91は土師質の火鉢の口縁部片。色調は内面褐色、外面黒色で一部褐色を呈す。胎土には細砂粒を少量含んでいる。ローリングにより器表があられているが、内外面ともにヨコナデにより仕上げられている。SD65から出土。84・86・90はSD53から出土の染付碗の破片である。84の高台畳付部は施釉がされず、露胎となっている。絵付は外面に梅樹が描かれ、内面の見込み周縁に圈線が一条描かれている。86は口縁付近の破片で釉はやや不透明で、所々に気泡が生じている。釉の発色は良好、絵付は淡い藍色で口縁外面に二条の圈線を配したものである。高台脇に二条の圈線を配する90は、高台内に「福」の裏銘が描かれている。釉の発色は良好で乳白色の色調を呈す。92、調査区北西側の溜り状の肩部付近より出土。須恵器の坏身で、胎土は精製されていて焼成良好で堅緻な土器片である。内外面ともに暗青灰色の色調を呈する。93・94もSD51や52が終息して溜りに流れこむ付近で出土したもので明確に遺構にともなうものではない。このためともに磨滅が著しい。93は土師器の高坏の脚部片。内外面、にぶい黄橙色の色調を呈す。二重口縁の口縁部片と考えられる94は、胎土には細砂粒が少量含まれ、焼成は普通。色調は内外面ともに暗褐色を呈する。93・94ともに調整は不明である。

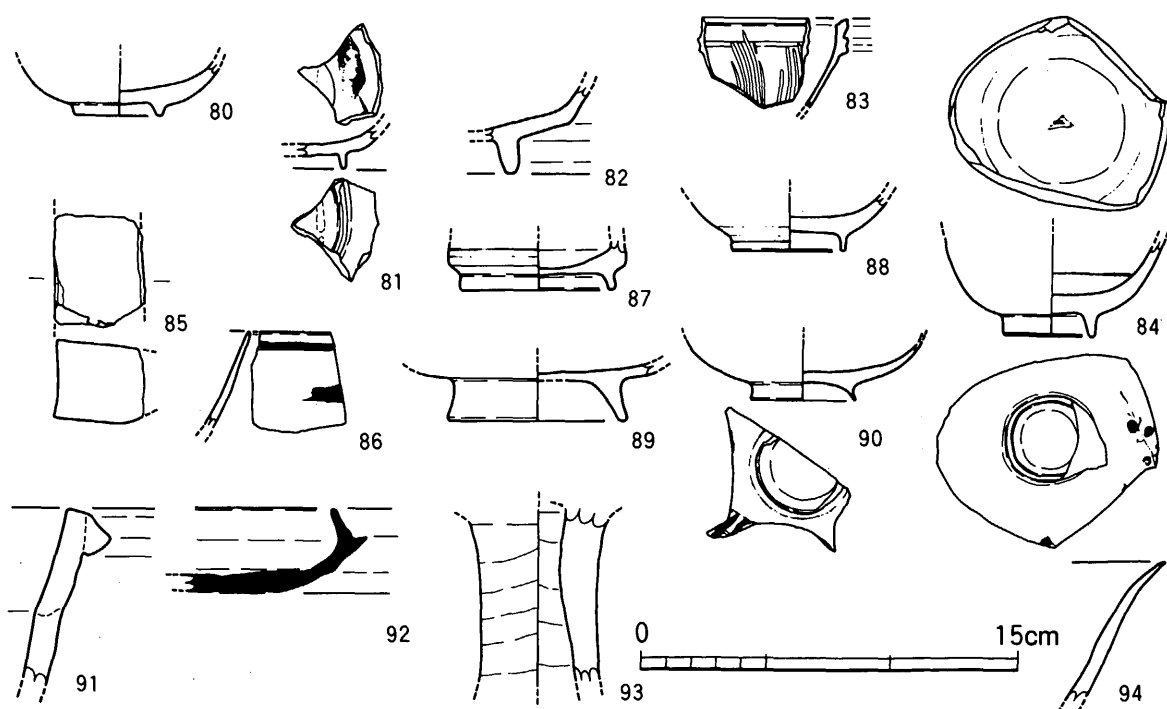


Fig.20 出土遺物実測図 (S1/3)

13. K調査区（付図5、PL. 14・15・16）

調査は工事工程に合わせて2分割して行なった。調査区の南側はJ調査区と同様に近代の土管が縦横に走る。東側から北東側には、G～J調査区で検出された様な湿地状の溜りが存在する。しかもこの溜り状は、今までのものに比べると大きく深いものである。そして検出された溝は、今までと同様に溜り状に向かって走っている。北東側の溜り状付近は、近代に瓦作り用として粘土取りが行われているため攪乱が著しいが、SD42を堺に遺構密度は薄くなるため、それほど遺構が存在していたとは考えにくい。

J・K調査に配される土管の方向について、地割となんら関係があるか否か、興味深いものであるが誌面の都合上、今回は検討からはずす。今後機会があれば、改めて検討してみたい。

検出された遺構は、溝48条、土坑70基、ピット458である。ピットは総体的に径10～30cm、深さ10cm前後と建物を想定できるものは少なく、まとまるものもなかった。しかし調査区の南側は官道横の建物群と隣接する所でもあり、総合的に検討する必要があると思われる。しかしながら官道周辺域の基盤とここの基盤を比較すると、安定基盤面がかなり削平されていることが窺え、そして安定基盤があったと想定できるのはSD2付近までで、その北側は従来から安定基盤面はなかったと推察される。溝の多くはJ調査区へ続くものが多い。

SK（Fig.21・22、PL.14・15）

土坑は70基検出された。形状は不整円・隅丸方形・楕円形などバラつきがあり、しかも大きさも一定でなく、非常に大形のものとピットを若干大きくしたものなど、これもバラつきがある。

SK1、一部を土管の掘り方に切られるが不整長方形を呈し、長さ1.9m、幅0.9m、深さ20～25cmを測る。底面はテラス状に浅い段をもち、下段の床面はほぼ平坦である。SK2これも一部を土管の掘り方に切られ、形状は隅丸長方形を呈す。底面の中心部付近にピットがあり、床面はほぼ平坦面をなす。長さ2.1m、幅0.9m、深さ29cmを測る。SK3、不整長方形で長さ2.1m、幅1m、深さ29cmを測る。床面は平坦でなく、中心部が深い形状を呈す。SK4も不整長方形の形状をなし、長さ2.4m、幅1.1m、深さ19cmで、床面はほぼ平坦である。土坑墓の可能性もあるが、調査時には確認できていない。形状が隅丸長方形をなすSK5は、床面が平坦で北東側にピットをもつ。長さ1.8m、幅1m、深さ32cmを測る。SK6は形状隅丸長方形を呈し、北側に狭いテラスをもち、長さ2.4m、幅1.1m、深さ15cmを測る。床面は平坦で西側に径20cm前後のピットがある。形状が不整方形をなすSK7は、南東側にテラス状の段と、床面の中心部に長さ1m、幅0.6m、深さ16cmのピットをもつ。壁の立ち上がりは緩やかである。SK8は平面形状、不整円を呈し、東側にテラス状の段を有する。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは斜めにやや急に立ち上がる。もしかすると土坑が2つ切り合っていた可能性もあるが明確でない。隅丸長方形の形状を呈すSK9は、前述の1～8に比べるとやや小形で、長さ1.3m、幅0.8m、深さ19cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、壁の立ち上がりは斜めでやや急である。SK16は長さ1.5m、幅0.9mを測る土坑と長さ1.4m、幅0.5mを測る土坑が後者の中心付近で交差したようなT字形を呈する。つまり前者の細長い形状の土坑は、SD16の続きの不連続な土坑と考えるほうが妥当であろう。なぜなら南北の断面では床面は平坦面だが、高さが南から北へ下がっていくこと。平面形で表現されている稜線など考慮にいれると重複していると考えたほうが妥当である。唯一遺物の出土している土坑であるが、この遺物はどちらのものとも現段階では不明である。ただ調査時点では、同一番号を付しているなのでここでは、ひとつのものとして取り扱っておく。SK28は隅丸長方形を呈す。長さ1.95m、幅1.0m、

深さ31cmを測る。SK60はSK16と同様に2つの土坑が重複している可能性をもち長さ4m、幅0.5～1m、深さ6～12cmを測る。やはり調査時には重複は確認できていない。SK11もSK60と同様に土坑が重複している可能性があるが明確でない。壁の立ち上がりは急で斜めに、形状は不整長方形を呈し、長さ2.8m、幅2.1m、深さ0.5mである。埋土中より遺物が出土しているが細片のため図示できない。形状が不整三角形を呈するSK67は壁の立ち上がりは急で、テラス状の平坦をもつ。これも土坑が2つ重複している可能性をもつが確認できていない。長さ3.9m、幅2.1～3.2m、深さ0.25～1.0mを測る。SK66はSK63を切った土坑で、形状は隅丸方形を呈する。床面は部分的に平坦だが、ガラガラと凹凸もある。長さ3.2m、幅3.2m、深さ0.8mを測る。SK63は不整形の形状を呈す土坑でPit118とSK66に切られる。床面は平坦でなく斜めに下がるが、多少掘りすぎている感じである。長さ2.4m、幅2.3m、深さ0.5～0.7mとなる。

出土遺物 (Fig. 23, PL. 20-102)

102はSK16から出土した須恵器の坏。復元口径16.7cm、器高6.3～6.7cm、高台径10.7cmを測る。色調は内外面ともに青灰色を呈す。高台は小さく低く体部堺は明瞭な線にはならない。

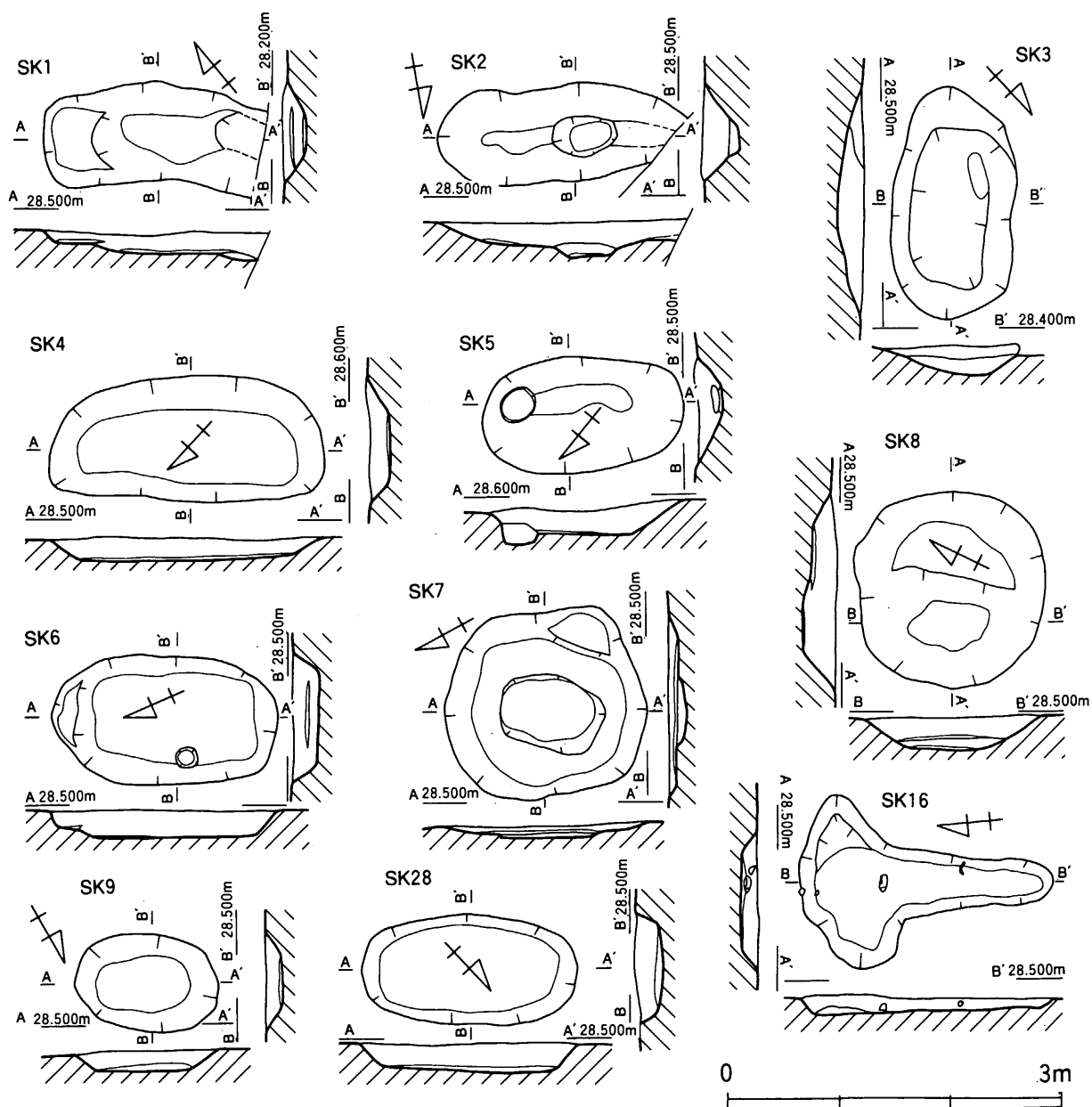


Fig. 21 SK実測図-1 (S1/60)

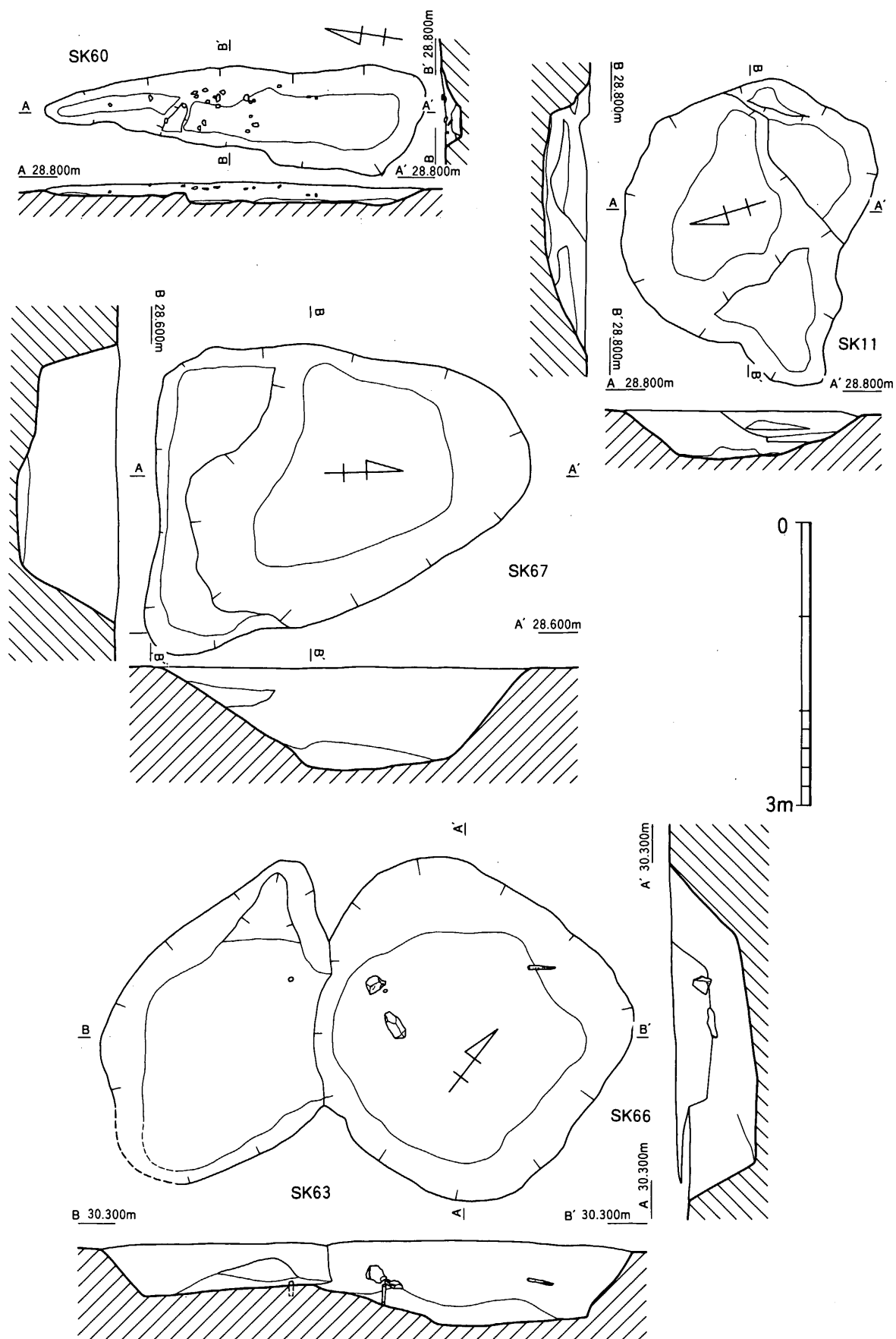


Fig.22 SK実測図-2 (S1/60)

Tab. 1 K調査区土坑計測一覧表

号	平面プラン	大きさ(m)			備 考	号	平面プラン	大きさ(m)			備 考
		長	幅	深				長	幅	深	
1	不整長方形	1.9	0.9	0.25	土管(SD44)に切られる	37	不整長方形	1.7	0.75	0.20	
2	隅丸長方形	2.1	0.9	0.10 0.21	床面にビット有り 土管(SD43)に切られる	38	欠 番				
3	不整長方形	2.1	1.08	0.29		39	不 整 円 形	1.56	1.4	0.20	
4	不整長方形	2.42	1.12	0.19		40	隅丸長方形	2.7	1.8	0.14 0.49	不整長方形(1.6×1.2)のビット有り
5	隅丸長方形	1.83	1.06	0.32	床面にビット有り	41	不 整 形	2.6	2.25	0.41	
6	隅丸長方形	2.4	1.16	0.13 0.23		42	楕 円 形	1.85	2.16	0.21 0.41	Pit 166に切られる
7	不 整 形	1.75	1.68	0.16 0.18		43	楕 円 形	2.17	1.6 2.16	0.81	
8	不 整 円 形	1.75		0.18 0.27		44	不 整 形	1.8	0.9	0.15	
9	隅丸長方形	1.3	0.83	0.19		45	隅丸長方形	1.71	0.9	0.68	床面にビット有り
10	楕 円 形	2.22	1.65 0.85	0.32		46	不 整 形	1.8	1.3 1.7	0.16	
11	不整長方形	2.8	2.35	0.13 0.48		47	不 整 円 形	1.3	1.4	0.21	
12	不 整 円 形	1.91		0.26		48	不 整 形	2.45	1.15	0.38	
13	不 整 形	2.78	2.28	0.30		49	楕 円 形	1.8	1.44	0.14	土管(SD37)に切られる
14	不 整 円 形	1.0		0.20	土管(SD33)に切られる	50	不 整 円 形	2.15 + α	2.15	0.64	SK68に切られる
15	不 整 形	2.57	1.1	0.10 0.44	床面にビット有り	51	隅丸長方形?	2.77 + α	2.25	0.42	SK68に切られる
16	不 整 形	2.25	1.5 0.43	0.10		52	楕 円 形?	3.5	3.1 + α	0.51	
17	不 整 形	1.82 + α	0.9	0.09 0.14	土管(SD33)に切られる 床面にビット有り	53	不整長方形	2.0	1.32	0.08 0.28	
18	楕 円 形	1.24	0.73 + α	0.31	溝(SD10)に切られる	54	楕 円 形	1.55	1.18	0.40 0.44	
19	不整長方形	2.12 + α	0.75	0.14 0.16	土管(SD43)に切られる	55	隅 丸 方 形	1.7	1.45	0.21	
20	不整長方形	1.8	0.63	0.15		56	隅 丸 方 形	1.26		0.20	
21	隅丸長方形	1.8	0.65	0.18		57	楕 円 形	1.45	1.5	0.06 0.24	
22	不整長方形	2.46	0.95	0.09 0.40	ビット53に切られる 床面にビット有り	58	楕 円 形	1.68	1.0	0.19 0.26	
23	隅丸長方形	1.7	1.1	0.08 0.24	床面にビット有り	59	不 整 円 形	3.6	2.67	1.06	
24	隅丸長方形	1.83 + α	0.96	0.15	SK23に切られる	60	不整長方形	4.03	1.07	0.11	土管(SD24)に切られる
25	楕 円 形?	1.65 + α	1.25	0.07 0.13	調査区外に続く 床面にビット有り	61	不 整 形	2.0	1.56	0.17	土管(SD24)に切られる
26	隅丸長方形	2.1	0.97	0.14 0.13	床面にビット有り	62	隅丸長方形	1.63	0.76	0.08	
27	不 整 形	1.65	0.63	0.21		63	不 整 形	2.48	2.38	0.76	SK66に切られる
28	隅丸長方形	1.95	1.03	0.31		64	楕 円 形	2.35	1.18	0.19	
29	不整長方形	3.4 + α	0.73	0.15 0.23	土管(SD38)に切られる	65	楕 円 形	1.4	0.84	0.06 0.17	
30	楕 円 形	1.8 + α	1.3	0.11	土管(SD31)に切られる	66	隅 丸 方 形	3.28	3.21	0.66 0.84	
31	不 整 形?	2.3 + α	1.34 + α	0.25	SK32、土管(SD31)に切られる	67	不整三角形	3.91	2.82	0.16 0.97	
32	楕 円 形	1.04	1.65	0.77 0.17		68	不 整 円 形	5.1	5.22	0.25 1.08	土管に切られる
33	楕 円 形	2.42	1.79 + α	0.44	土管(SD49)に切られる	69	隅 丸 方 形	5.44	6.46 5.26	1.39	
34	不 整 形	2.92	1.31 1.4	0.41	床面ビット有り	70	不整方形?	1.4 + α	0.6 + α	0.31	調査区外に続く SD34に切られる
35	不整長方形	1.85	0.8	0.06 0.15	床面ビット有り	71	不 整 形?	2.65 + α	2.93 + α	0.17 0.52	床面にビット有り
36	不 整 形	2.3	1.0	0.08							

SD (付図 5、Fig.25・26、PL.14・15・16)

検出された溝は48条である。当初担当者は土管の埋置された溝も含んで遺構番号としているが、ここでは土管の排水溝は除いた。このため溝の個別説明は通し番号とならない。

SD 1 は、西側からやや蛇行しながら南へ向かい20m付近で大きく南に湾曲し、さらに北向きに湾曲し、ここでまた逆L字状に曲がり東南部の溜り状へ向かう。逆L字状になった部分からはやや蛇行しながらも、ほぼ直線的になる。溝の西端部は幅1.8m、深さ0.6mを測る。さらに西側へと延びる。しかし西側の調査地点では浅く不明瞭となって途切れている。

また湾曲した部分付近の底面より弥生前期末の甕の口縁部片が出土したことから、環濠を想定したが西側の調査区で溝が途切れたため明確にならなかった。溝の断面は逆台形を呈す。湾曲部付近は水の流れの関係からか、本来の形状が著しく崩れ幅が広がる。溜り状に近い部分が、溝の本来の形状を明確に残す。幅1.6m、底面幅0.3mで、片方の壁の立ち上りは急で、もう一方は急な立ち上がりをなすが上端近くでテラス状の段をもつ。部分的に設定した土層セクションで観察すると壁の立ち上がりは本来の形状を残す部分もあるが、水の急激な流れなどで本来の形状を失っていることが窺える。SD 2 は東南の溜りから北西方向へ走る溝で僅かに蛇行し、ゆるやかな曲線を描いている。北西側へはまだ延びる可能性をもつが調査対象区外になるため不明。また北西端より17m付近でSD 4 によって切られる。また溝内には1ヶ所、丸杭を利用した柵状遺構が検出されたが後述する。溝の埋土は底面直上に暗灰褐色砂質土、その上部にごく僅かな灰褐色粗砂、この暗灰褐色砂質土から土器・木器類が検出された。溝壁は両側辺ともに途中に段をもち緩やかな傾斜で上端部へと立ち上がる。SD 1 の様に急激な水の流れによる形状の変化は部分的に認められるが、ほとんど本来の形状を維持しているものと思われる。SD 3、ほぼSD 2 に平行する様に東南の溜りから北西方向へ走り、北西側はJ調査区のSD52に続く。SD 2 に比べ部分的に蛇行して、SK69付近で北東側へ湾曲し、緩やかなS字状になって溜りへ流れる。これもSD 4 に切られている。溝壁はSD 4 に重複する付近までは緩やかな傾斜で、U字状を呈していたと思われる。SD 4 はJ調査区のSD51に重複する溝でSD37に併走し、この部分から逆L字状に南西方向へ走り、SD 2 と重複する付近で丸く終息する。J調査区からコーナー部までは僅かに孤を描く、ここからSD 5 までは緩やかに西側

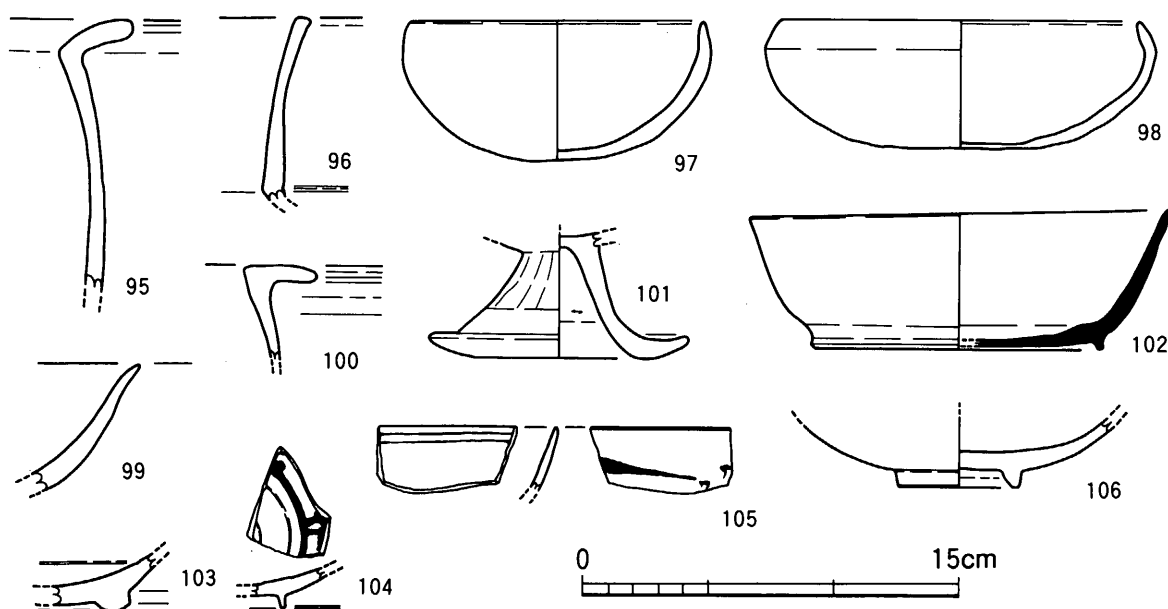


Fig.23 出土土器実測図 (S1/3)

に孤を描き、SD 2・3を切って終息する。このSD 4は他の溝に比べL字状に曲がるのを特長とする。これが古代の地割線あるいは中世の地割線とどのような関係があるのか改めて検討してみたい。SD 5はSD 4に切られて逆L字状に曲がる溝で幅1.2m、深さ20cmを測る。SD 2に切られるSD 6は幅0.6m、深さ10cmで浅いU字状を呈する溝である。SD 7は西北から南へ走り、幅0.4m、深さ10cmの浅い溝で不連続な形状を呈す。SD 8は幅0.8m、深さ10cmを測り、北から南東方向へ走る溝である。SD 9～13は南西から北東へ向かう幅0.5m前後の溝でほぼ併行して走る。いずれも不連続な細長い形状で断面は浅いU字状をなす。遺物は出土していないが埋土も同様なもので同時期と考えられる。幅0.5m、深さ10cm前後を測るSD19は南から北へ僅かに孤を描いて走る。SD21は南から東の溜りへ走る溝で、幅0.5m、深さ10cm前後である。ほぼ同様な方向に走るSD22は、溜りまでは走らず途中で終息する。SD31はSD 4のコーナー部からJ調査区の方に延びるが未調査区や道路付近で終息する可能性をもつ。SD40を切って東側の溜りから孤を描いて延びるSD34は、幅0.65m前後、深さ12cm程度の浅いU字状の溝で西側で南に曲がり終息する。SD35はSD37と40・34に切られ、途中で東側から延びるSD36と重複して一条となっている。SD38は北西から南東に向かう溝で細長い土坑状を呈し、幅0.5～1.3m、深さ10cm前後を測る。SD39・38にほぼ併行する土坑状の浅い溝であるSD40は東側の溜りから北西側へ走る。北西側J調査区のSD41か51に続く可能性をもつが、交差する所が道路下で明確な判断ができていない。さらにSD41に交差する付近で別の浅い溝と重複する。このことがSD49・51のどちらへ続くかをより複雑にしている。溝はU字状で幅2.5m深さ0.9m前後を測る。SD42は東側をSD40に切れ僅かに蛇行しながら、ほぼ直線的にJ調査区SD49へと延びる。断面の形状は逆台形を呈し、幅1.2m前後、深さ25～35cmを測る。

SD 2内の柵状遺構 (Fig.25、PL.15)

柵状遺構は東南の溜りから北西へ35m付近に位置し、溝に直交して北東～南西方向に構築。溝幅の半分強、北東部側のみである。使用された構築材は径5～10cm、長さ45～80cm程度の丸杭および割材（矢板）などで、頭部の欠損しているものは少ないことから、本来の高さを残していると考えられる。また溝の上場の高さと杭の頭部の高さもほぼ同じであることから、この柵状遺構は、低位置に設置されたものではなく、溝の上端と同一高さから設置されたものと推測できる。

構築方法は基本となる1列の杭に流木・杭などの横木を用い、それらを両方から丸杭・割材などで固定している。現状では、基本になる1列しか明確でないが、柵状遺構よりさらに東南側に丸杭・流木・構築材などが出土していることから、この構築材はもっと多かったものと考えられる。なお溝底より土器（Fig. 23-97・98・101）が3点出土していることから、古墳時代の柵状遺構と考えられる。

出土遺物 (Fig. 23、PL.20)

95は弥生の甕の口縁部。色調は内外面ともに、にぶい橙色を呈し、細砂粒を多く含む。96、丹塗りの壺の口縁部。ともにSD 1よりの出土。97は復元口径12.3cm、器高5.7cm、98の復元口径16cm、器高5.3cmを測る椀。ともにローリングにより調整は不明。101は高坏の脚部で黒色塗装の施されたもの。調整はナデ仕上げである。97・98・101はSD 2から出土。99、青磁碗の口縁部片で、口唇内側に一条の圈線が巡り、

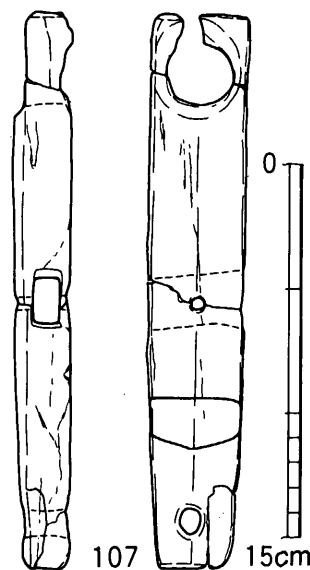


Fig.24 出土木器実測図 (S1/3)

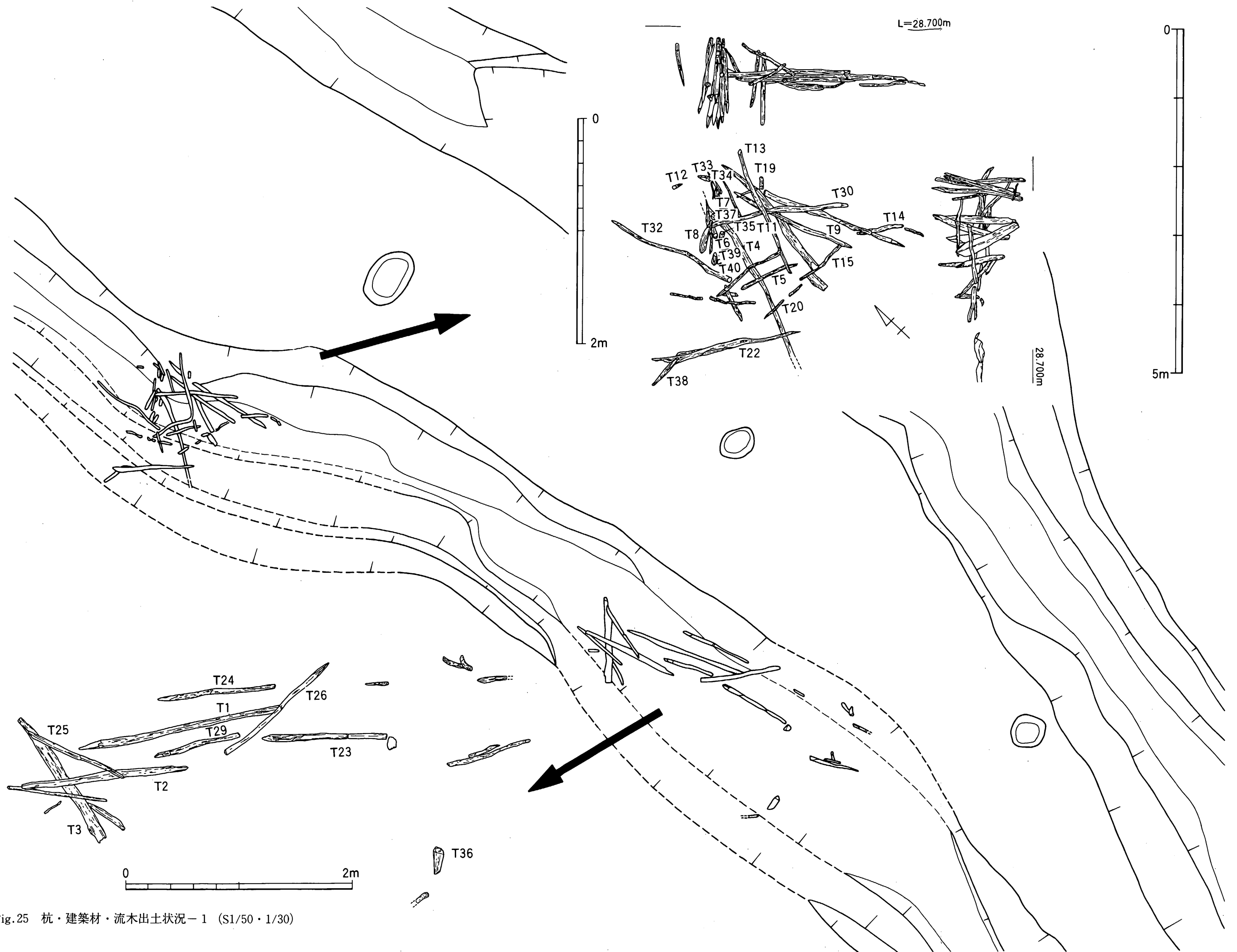


Fig.25 杭・建築材・流木出土状況－1 (S1/50・1/30)

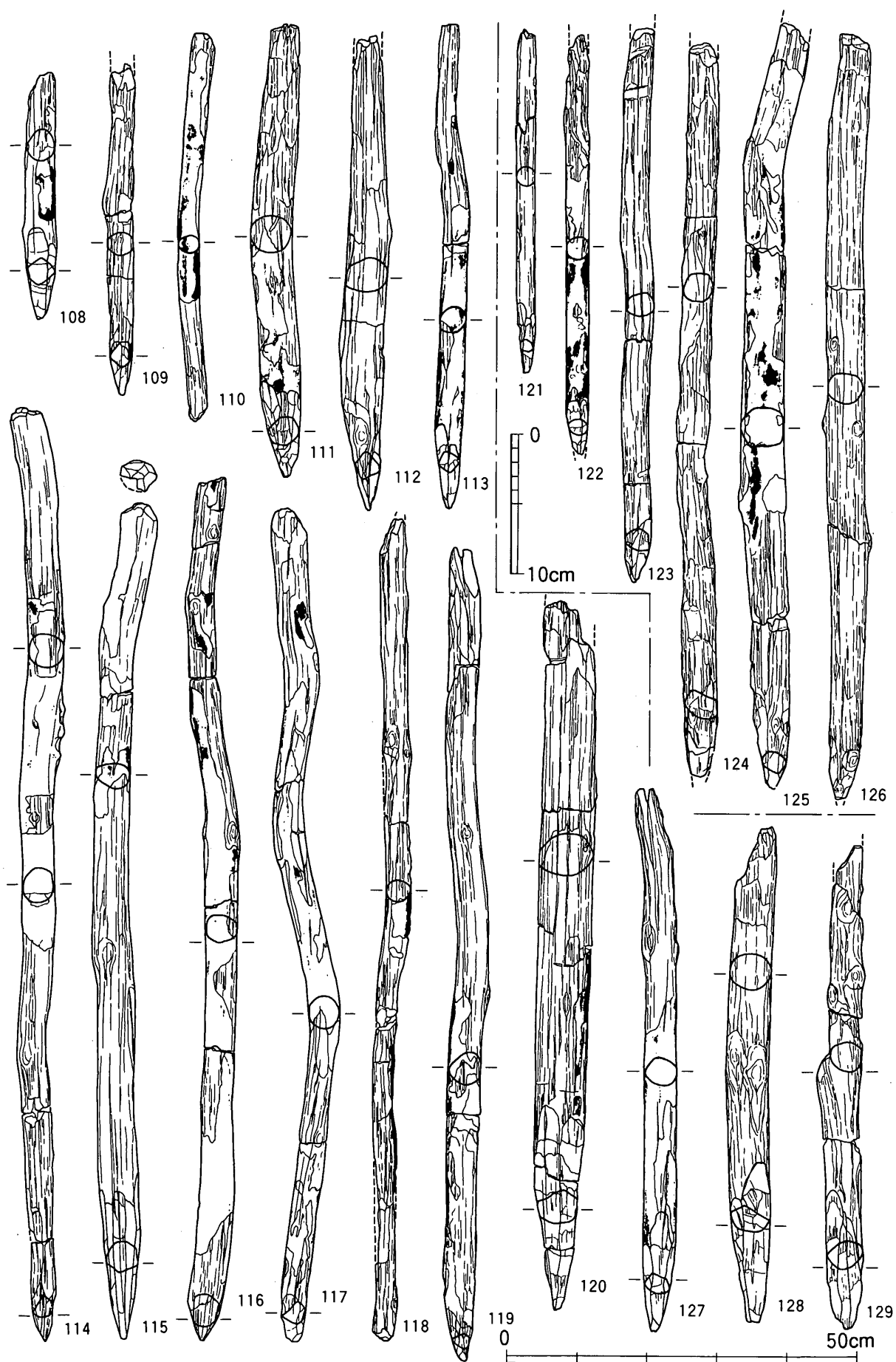


Fig.27 出土木器実測図-1 (S1/2・1/4)

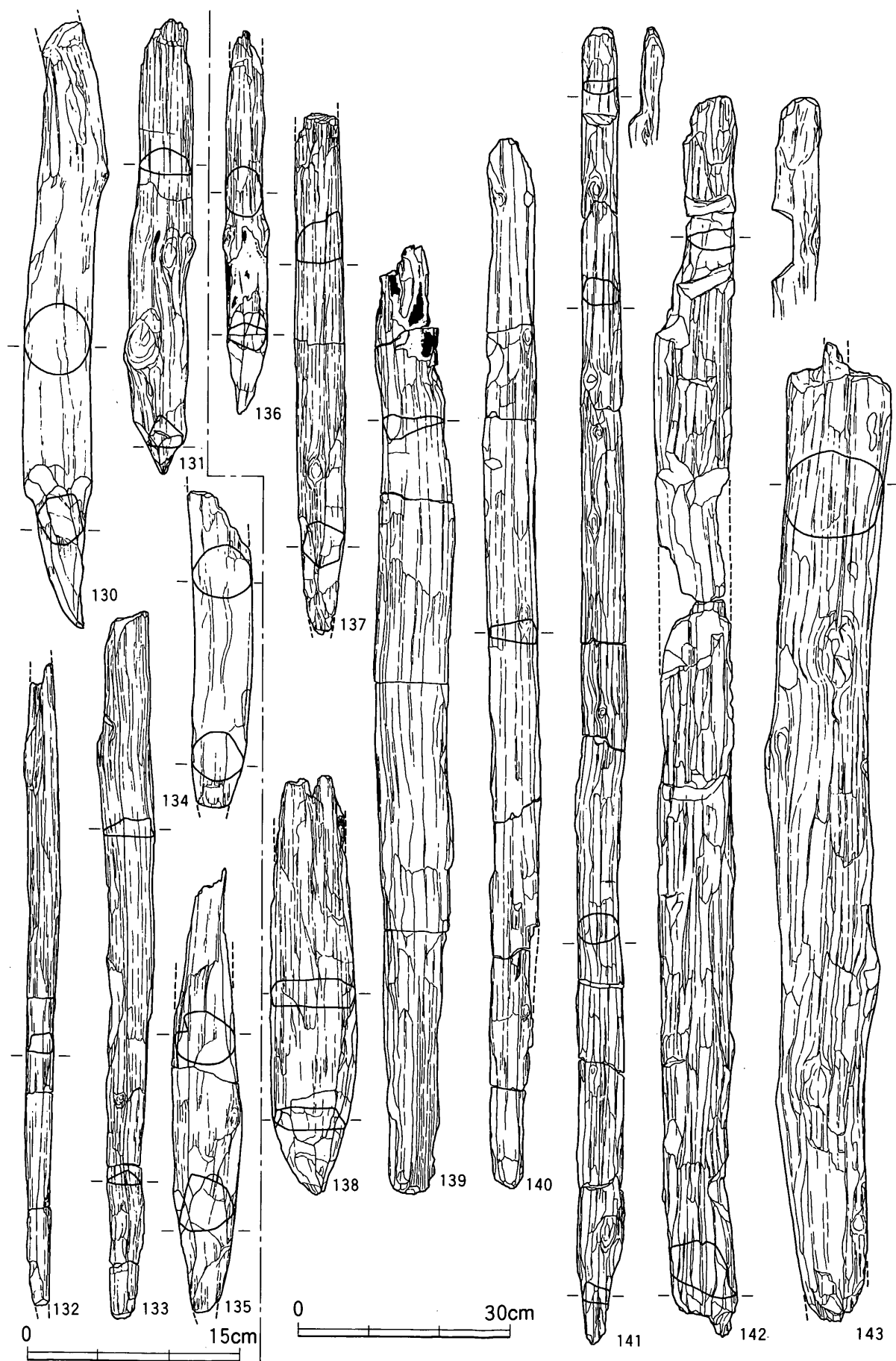


Fig.28 出土木器实测图-2 (S1/4·1/8)

器表内外面に気泡が認められる。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。103も青磁碗の高台部で、施釉は高台脇～高台内は露胎となる。高台は削り出しでちりめん高台となり、胎土にも細砂粒が僅かに混じり、気泡が目立つ。ローリングが著しい100は、弥生の甕の口縁部で器表剥落のため調整は不明。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈す。104は染付小皿片。見込み内面は蛇の目釉剥ぎ。見込み部分に絵付があるが、文様の詳細は不明。見込み外周に一条の圈線が巡る。

出土木器 (Fig. 24・27・28、PL.20・21・22)

SD40から出土した107は長さ22cm、上端幅3.8cm、下端幅3.0cm、厚さ2.0cmを測り、上・下端および中心部に孔を有する。中心の孔の部分は横位から長方形穿孔をも有し、この長方形穿孔を貫通している。断面は表面が平坦で、裏面は中心に向かって高くなる。表・裏・側面および孔の仕上げも丁寧。

Fig. 27・28の木器はすべてSD 2からの出土。番号を付して取り上げたものは44点を数え、図示し掲載したものは35点である。流木中には杭や建築材の転用杭なども認められる。杭の種類は丸杭が大多数を占め、その内には先端部を片側のみ尖らせたもの、2～3方向から尖らせたものに分けられる。また割材が数点あり、丸木を1/2に分割して先端を尖らせたもの、丸木を1/2・1/4・1/8に分割して矢板にしたものに分けられる。さらに建築材を転用して横木に使用したと考えられるものも4点出土している。141は頭部に欠き込みをもつ。欠き込み部付近だけに加工を施し、他は自然のままである。142も同様に頭部付近に欠き込みをもつが、これはコの字状の欠き込みで、先端部は欠損。143は先端を尖らして、頭部に柄があるが欠損している。

Tab. 2 木器一覧表

状態	種類	残存長	幅	厚さ	径	樹皮	備考	Fig
T-1	横位 丸 杭	189	-	-	6	□	先端片削ぎ、頭部つぶれ	
T-2	横位 矢 板	150	8	4	-	□	1/8、完形、頭部つぶれ	140
T-3	横位 矢 板	137	11	4.5	-	□	1/6、先端つぶれ	139
T-4	横位 丸 杭	70+α	-	-	4.5	□	3方	113
T-5	横位 丸 杭	56+α	-	-	3.5	□		110
T-6	立位 丸 杭	67+α	-	-	6	□	3方、頭部焼き	112
T-7	立位 丸 杭	79	-	-	5	□		127
T-8	立位 矢 板	60+α	11	4	-	□	1/8、先端つぶれ	138
T-9	横位 丸 杭	118	-	-	6	□	先端片削ぎ、頭部つぶれ、焼き	119
T-10	丸 杭	70+α	-	-	6	□	頭部および先端欠損	129
T-11	横位 建築部材	46+α	-	-	5	□		
T-12	立位 丸 杭	36+α	-	-	5	□	4方、頭部欠損	108
T-13	横位 丸 杭	117	-	-	4	□	頭部および先端つぶれ	118
T-14	横位 丸 杭	133	-	-	6	□	2方、頭部つぶれ	114
T-15	横位 丸 杭	110+α	-	-	6	□	先端片削ぎ、頭部つぶれ	125
T-16	丸 建築部材	176	-	-	14	□		142
T-17	丸 建築部材	140+α	-	-	14	□	柄あり	143
T-18	横位 丸 杭	62+α	-	-	3	□	先端片削ぎ	121
T-19	立位 丸 杭	63+α	-	-	9	□	1/2、2方、先端焼き	131
T-20	横位 丸 杭	57+α	-	-	2	□	先端片削ぎ、つぶれ	
T-21	横位 丸 杭	105+α	-	-	8	□	先端片削ぎ	120
T-22	丸 建築部材	120+α	10	5	-	□	焼きあり	141
T-23	丸 杭	110	-	-	6	□	完形、頭部および先端つぶれ	126
T-24	丸 杭	105	-	-	4.5	□	完形、頭部焼き	124
T-25	矢 板	95+α	4.5	2.5	-	□	1/12、先端焼き、状態悪い	132
T-26	丸 杭	122	-	-	6	□	完形、頭部つぶれ	115
T-27	丸 杭	46	-	-	3	□	頭部つぶれ	
T-28	丸 杭	49+α	-	-	4.5	□		109
T-29	横位 丸 杭	80	-	-	4	□	頭部つぶれ、焼き	123
T-30	丸 杭	121.5	-	-	5	□	2方	116
T-31	矢 板	101+α	77.5	3	-	□	1/12	133
T-32	横位 丸 杭	120	-	-	4.5	□	両端とも焼き	117
T-33	丸 杭	66+α	-	-	6	□	先端片削ぎ、頭部欠損	111
T-34	丸 杭	60+α	-	-	3.5	□	先端つぶれ、頭部欠損	122
T-35	立位 丸 杭	55+α	-	-	6	□		136
T-36	矢 板	75+α	7	7	-	□	1/4、先端つぶれ、4方	137
T-37	立位 丸 杭	71	-	-	6.5	□	完形、頭部つぶれ	128
T-38	横位 丸 杭	32+α	-	-	4.5	□	頭部欠損、先端焼き	135
T-39	立位 丸 杭	43+α	-	-	4.5	□		130
T-40	立位 丸 杭	40+α	-	-	5	□		
T-41	横位 不明木製品	21	-	-	18	□	容器の未製品?	
T-42	曲物 桶	44+α	-	0.5	-	□		
T-43	横位 不明木製品	22	4	1.5	-	□	ソケット状の貫通孔、柄のよう	107

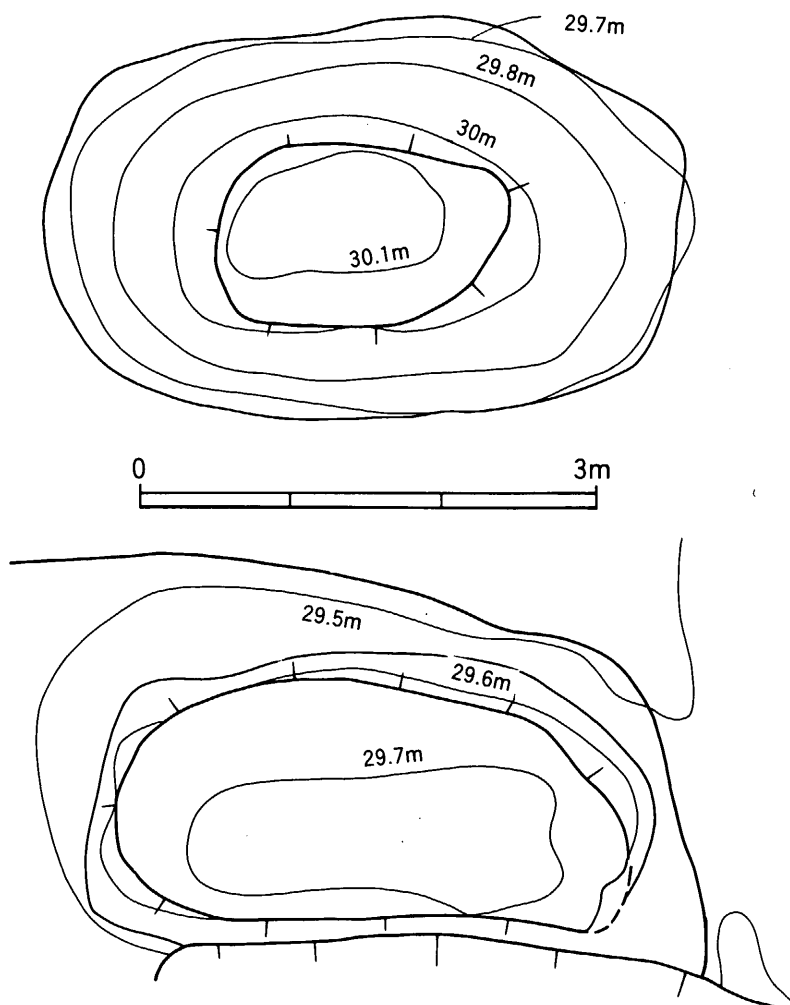


Fig. 29 ダブリュー塚現況図および地山整形図(S1/50)

14. ダブリューについて (Fig.29、PL.16)

K調査区の北側縁辺に当たる水田において、ダブリュー塚と考えられる稲作儀礼に関わる塚がみついている。塚は径4×2.5m・高さ0.3mの低い楕円形のマウンドを形成し、周溝や上屋などの付属施設は伴っていなかった。トレンチを入れて確認した結果、マウンドの下に基底面を形成し簡単な盛土を行っていることが確認された。

「ダブリュー」とは駄風流・駄浮立・駄糞流などの字が当てられている。「ふりゅう」は祭礼に付随する囃子や踊りを意味しており、いわゆる駄まつりのことである。佐々木哲哉氏によると、修験者の行っていた「駄祈禱」を受け継いだもので、陰暦4月から5月にかけての牛馬に対する夏の疫病除けを祈願する行事と、水神祭りとが習合して「水神牛馬まつり」となっている例が多いとのことである。このまつりは甘木・朝倉地方に多くみられ、「田植えの前後に牛馬を連れて川入りをし、よく洗った後、川岸に笹竹を立て、藁枕に備え、竹筒に神酒を入れ、ナス・イモガラなどと共に笹に吊るし、お払いを受けて祈願を込める」といったものが一般的な方法である。(註1)

岡田の場合は、この塚ではつい最近まで神事が行われており、その方法としては、その年の11月3日頃に竹を組み合わせて簡単な祭壇を作り、宝満川で採れた魚を供えていたとのことである(註4)。ただし、ダブリューはその神事に使われた品々を現地に残さず、川に流してしまうので、今回の調査は遺物がまったく確認されていない。このため、塚の築造時期や当地におけるダブリューの初源については、残念ながら確認できなかった。

しかしながら、岡田における「ダブリュー」のもっとも特徴的な点は、塚が築かれていることである。これは、この場の祭祀が定型化されていたことを示している。この塚がある付近の田圃は、「ジルケタ」(湿気が多く、水はけが悪い田の意味)とよばれており、周辺がかなり不安定な土壌であったことが発掘調査でも確認されている。また、江戸時代の中頃にこの北側縁辺部に2つの堤が築かれていること(註2)などからも、この土地がかなり水はけが悪かったことを看取できる。(註3)この地において大規模な土地改良が行われるのは大正初期以降のことであり、このため「ダブリュー」がこの地に受容され、現在まで脈々と受け継がれてきているものと推測できるのである。

註1 佐々木哲哉「駄ふりゅう」『福岡県百科事典 下巻』西日本新聞社 1982年

*筑紫野市本道寺・柚須原では9月15日、大野城市某所では9月下旬に行われている。

山中耕作編『西南学院だ史学民俗調査報告 第3輯』西南学院大学学術研究所 1984年

大野城市歴史資料展示室解説シート 民俗No.6『農業2』

註2 山家宿の大庄屋 水城久七の指導により、享和元(1801)年に完成している。

筑紫野市教育委員会『ちくしの散歩 山家宿こぼればなし』

註3 地権者 久保正勝氏ご教示。

参考資料

福岡県『福岡県史 民俗資料編 ムラの生活(上)』1984年

『日本の食生活全集 福岡』編集委員会『聞き書 福岡の食事』農山漁村文化協会 1987年

Ⅲ．岡田K調査区出土木材の樹種同定について

環境考古研究会

金 原 正 明
金 原 正 子

出土木材の樹種同定について

環境考古研究会 金原 正明
金原 正子

1、試料

試料は、岡田K調査区出土木材43点である。

2、方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作成し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3、結果

結果は表に示すとおりである。以下に分類群の特徴を記す。

a. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. Et Zucc. マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直・水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは北海道南部・本州・四国・九州に分布する。常緑の高木で、高さ40m・径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

b. スギ *Cryptomeria Japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質によりスギに同定される。スギは本州・四国・九州・屋久島に分布する。日本特産の常緑の高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

c. スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県・新潟県佐渡以南）・四国・九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m・径1.5mに達する。材は耐久・保存性がやや低く、

建築材・器具などに用いられる。

d. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは本州（関東以西）・四国・九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m・径1.5mに達する。材は耐久・保存性が低く、建築材などに用いられる。

e. シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：部分的ではあるが、年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。なおシイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無で同定できるが、本試料は小片のため、広範囲の観察が困難であったのでシイ属の同定にとどまる。

f. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にアカガシ・イチイガシ・アラカシ・シラカシなどがあり、本州・四国・九州に分布する。常緑の高木で、高さ30m・径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

g. コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ・アベマキなどがあり、本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m・径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具・農具などに用いられる。

h. ブナ科 Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりブナ科のコナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ節・コナラ属クヌギ節のいずれかである。なお本試料は小片であるうえに、保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科の同定にとどまる。

i. クマシデ属 *Carpinus* カバノキ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔である。放射組織はほとんど同性であるが、上下の縁辺部のみ、ときおり方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は、ほぼ同性で1～3細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属に同定される。クマシデ属は落葉の高木または大型の低木で、北海道・本州・四国・九州に分布する。

j. クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ・ヤブニッケイ・タブノキ・カゴノキ・シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

k. モチノキ属 *Ilex* モチノキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40くらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞のみからなる単列のものと、2～6細胞幅で異性の多列のものからなる。

以上の形質よりモチノキ属に同定される。モチノキ属は常緑または落葉性の高木または低木で、モチノキ・クロガネモチ・イヌツゲなどがあり、北海道・本州・四国・九州に分布する。

なおモチノキは常緑高木で、高さ15m・径50cmに達する。やや堅硬な材で、施作・器具・彫刻などに用いられる。

l. ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

横断面：小型の道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を超えるものがある。放射組織は平伏細胞・方形細胞・直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ・ハマヒサカキなどがあり、本州・四国・九州・沖縄などに分布する。常緑の小高木で通常高さ10m・径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

m. シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科

横断面：小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、まれに単穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、5～8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部には直立細胞が見られる。

以上の形質よりシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州・四国・九州に分布する。常緑の低木で、通常高さ1～5m・径10cmくらいであるが、大きいものは高さ10m・径70cmに達する。

n. 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔である。

接線断面：放射組織は多列の異性放射組織型である。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察が困難なため、散孔材の同定にとどまる。

4. 所見

岡田K調査区の出土木材は、多い樹種より、コナラ属アカガシ亜属7、ツブラジイ6、スダジイ4、シイ属3、ヒサカキ属2、モチノキ属2と続く。これらはいずれも照葉樹であり、木材の用材が照葉樹林起源の樹木を主に構成されている特徴を示す。

参考文献

佐伯浩・原田浩「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 1985年

佐伯浩・原田浩「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 1985年

出土木材の樹種同定結果一覧表

試料番号	樹 種	学 名
1	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
2	シイ属	<i>Castanopsis</i>
3	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima
5	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
6	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
7	シャシャンボ	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.
8	散孔材	diffuse-porous wood
9	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
10	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
11	シイ属	<i>Castanopsis</i>
12	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
13	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
14	散孔材	diffuse-porous wood
15	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
16	散孔材	diffuse-porous wood
17	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima
19	シイ属	<i>Castanopsis</i>
21	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima
22	クスノキ科	<i>Lauraceae</i>
23	散孔材	diffuse-porous wood
24	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
25	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
26	散孔材	diffuse-porous wood 悪
27	ブナ科	<i>Fagaceae</i>
28	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima
29	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
30	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
31	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
32	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
33	モチノキ属	<i>Ilex</i>
34	シャシャンボ	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.
35	散孔材	diffuse-porous wood
36	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
37	散孔材	diffuse-porous wood 悪
38	散孔材	diffuse-porous wood
39	モチノキ属	<i>Ilex</i>
40	クマシデ属	<i>Carpinus</i>
41	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. Et Zucc.
42	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don
43	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>

横断面

放射断面

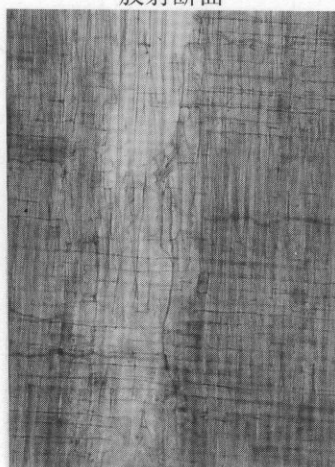
接線断面

PL.1

T-1



0.5mm

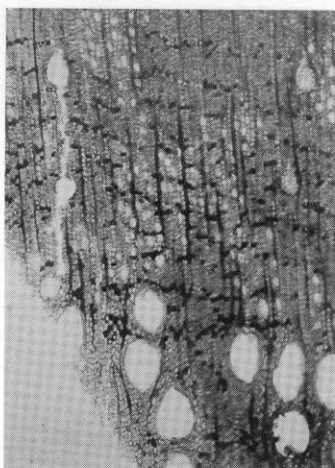


0.2mm

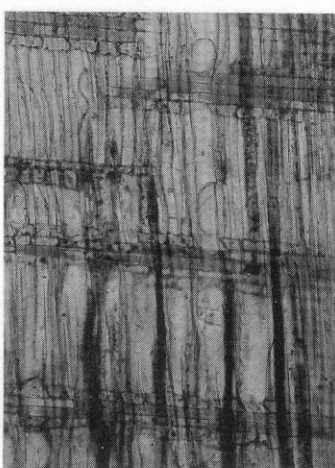


0.2mm

T-2



0.5mm

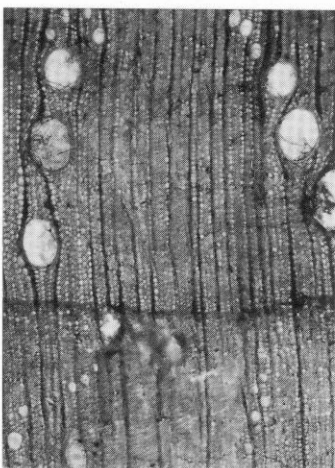


0.2mm

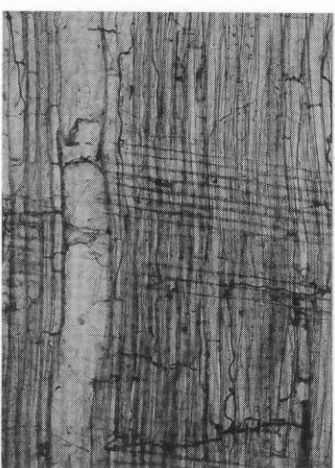


0.2mm

T-3



0.5mm

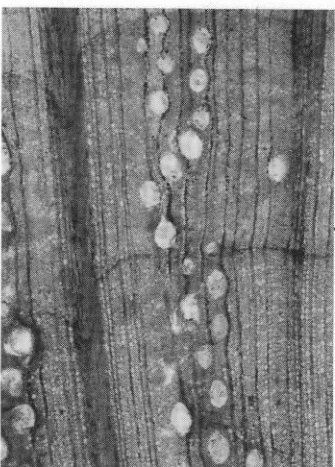


0.2mm

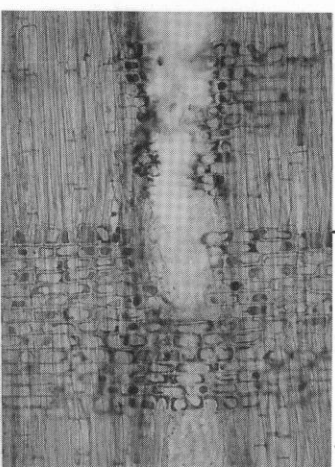


0.2mm

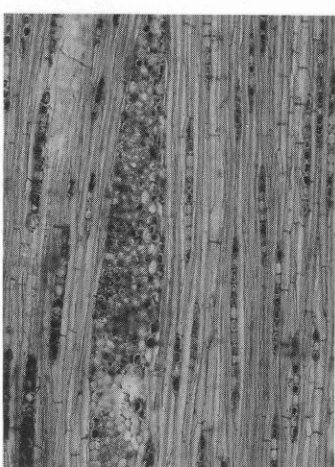
T-5



0.5mm



0.2mm



0.2mm

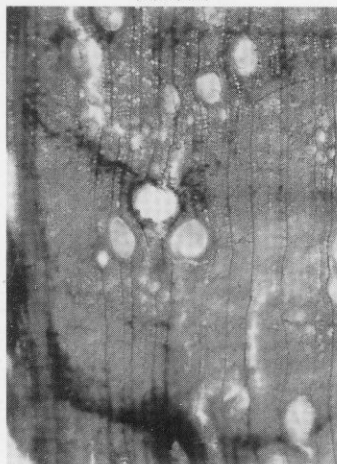
PL.2

横断面

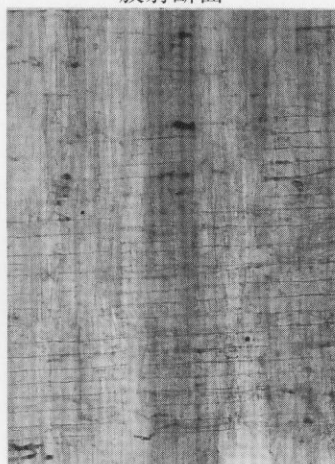
放射断面

接線断面

T-6



0.5mm

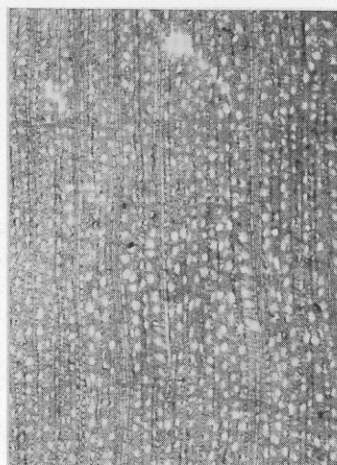


0.2mm



0.2mm

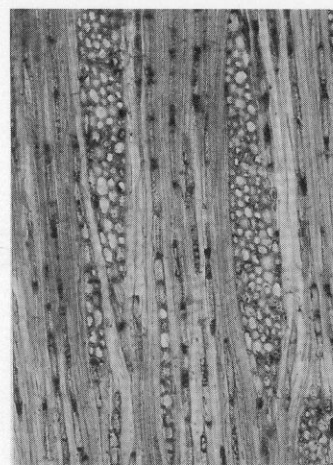
T-7



0.5mm

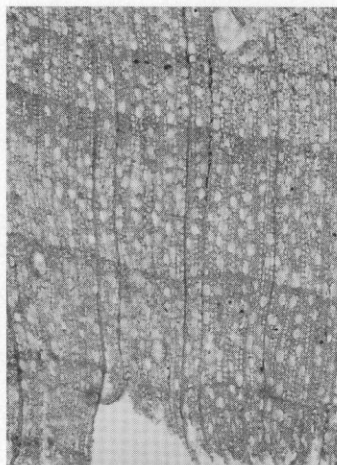


0.2mm



0.2mm

T-8



0.5mm

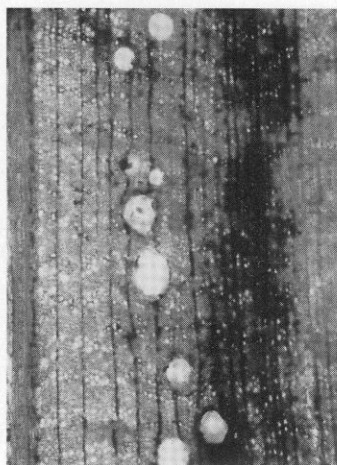


0.1mm

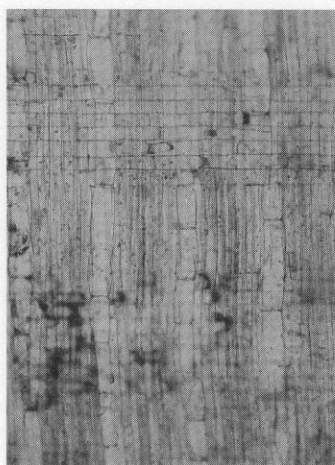


0.2mm

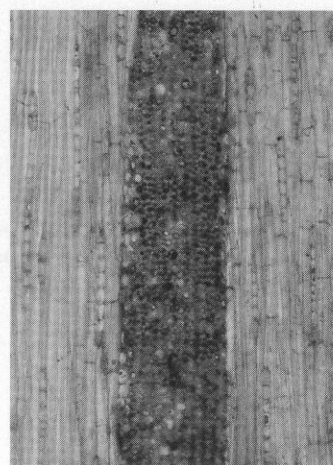
T-9



0.5mm



0.2mm



0.2mm

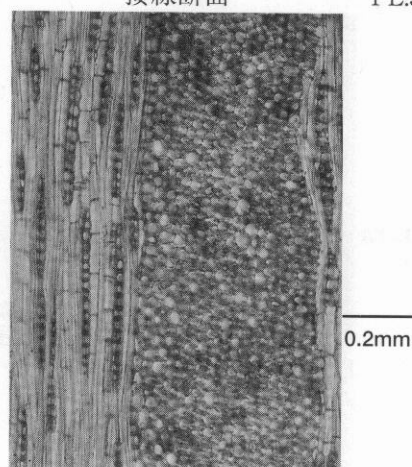
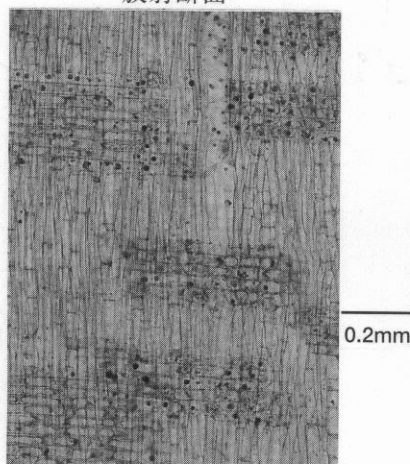
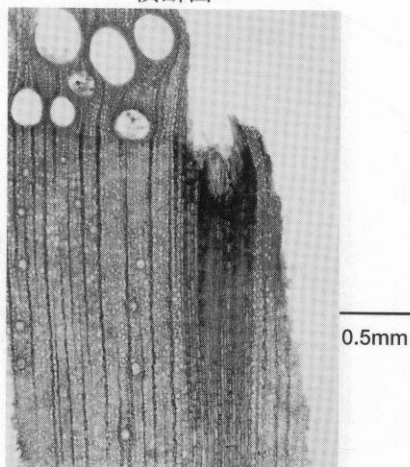
横断面

放射断面

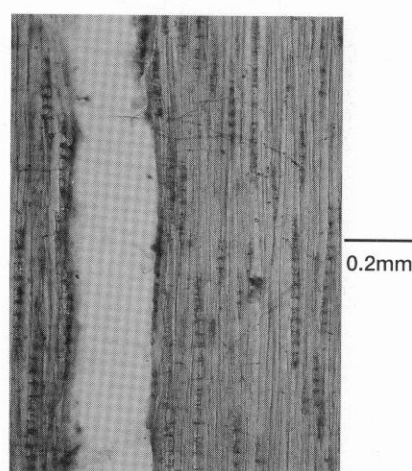
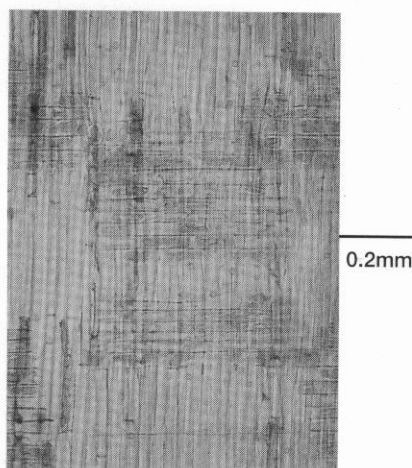
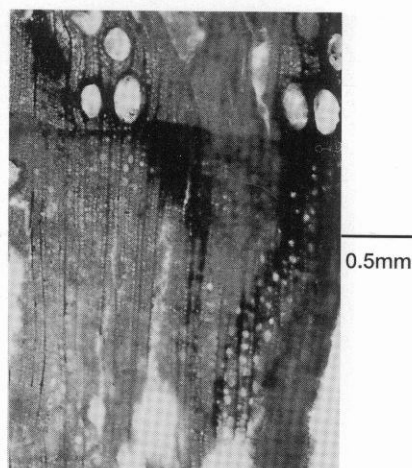
接線断面

PL.3

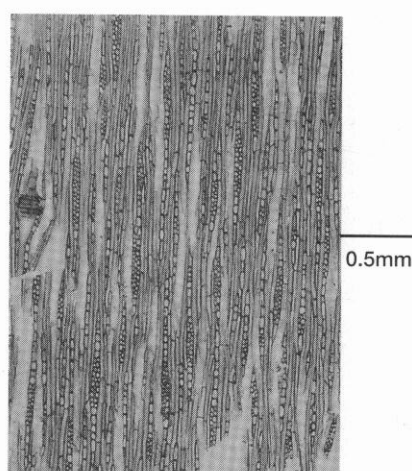
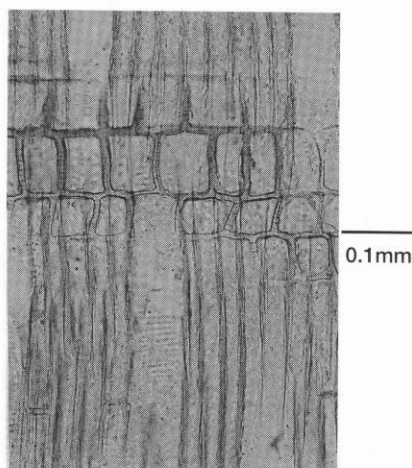
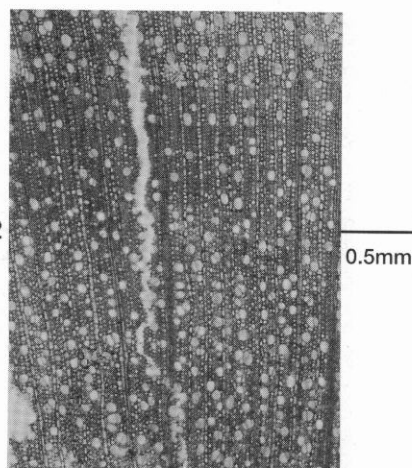
T-10



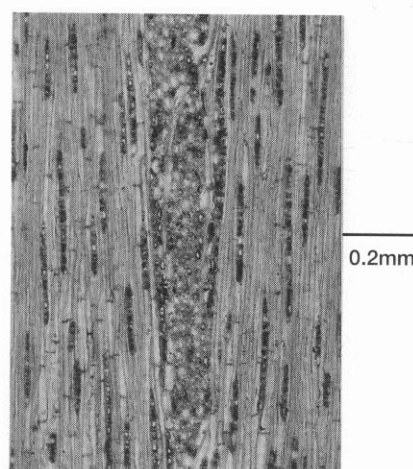
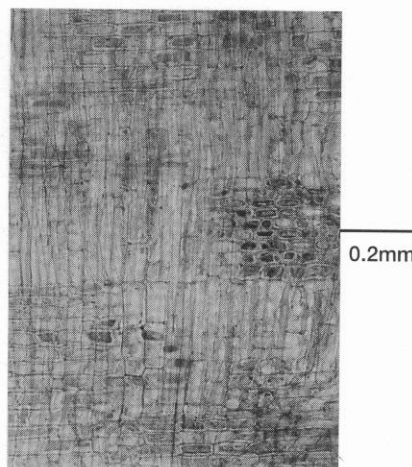
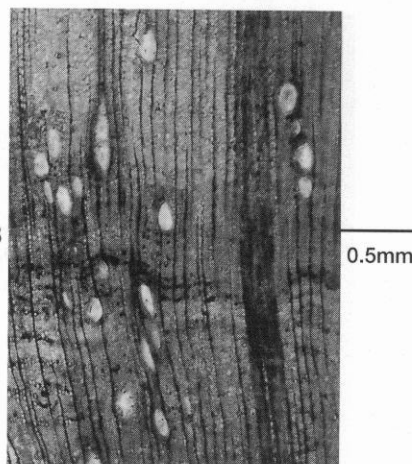
T-11



T-12



T-13



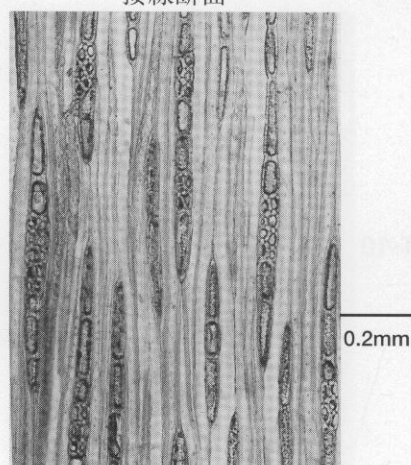
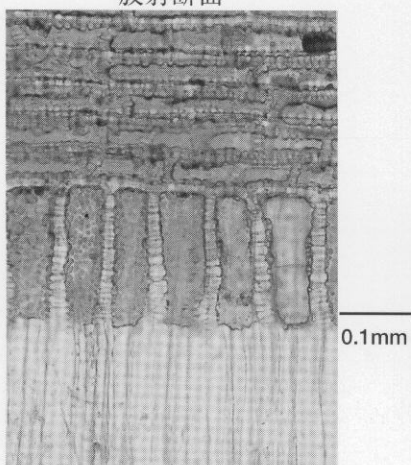
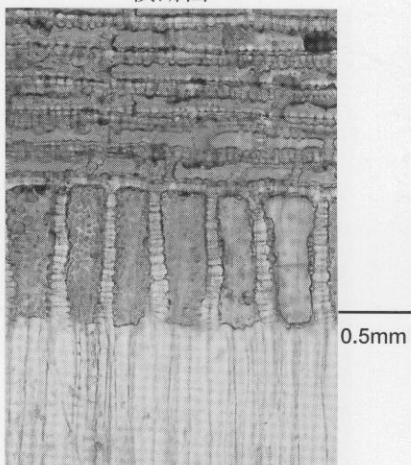
PL.4

横断面

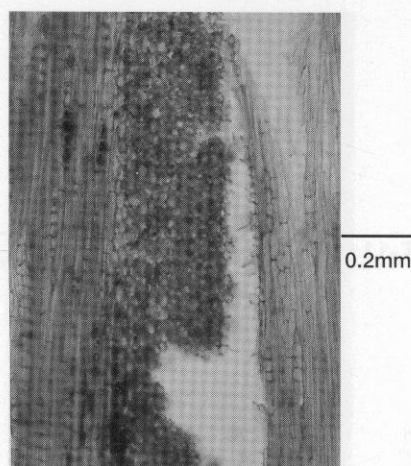
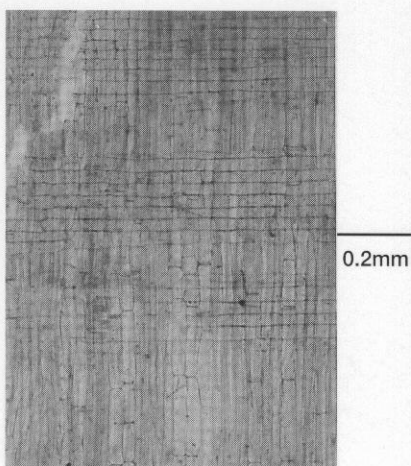
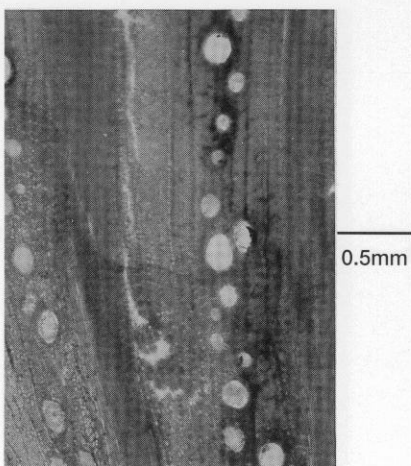
放射断面

接線断面

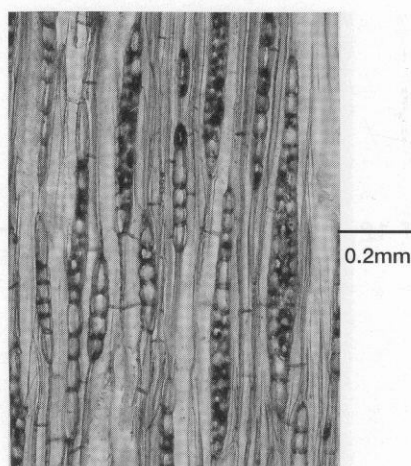
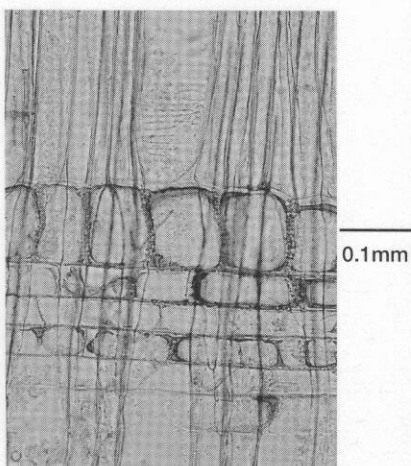
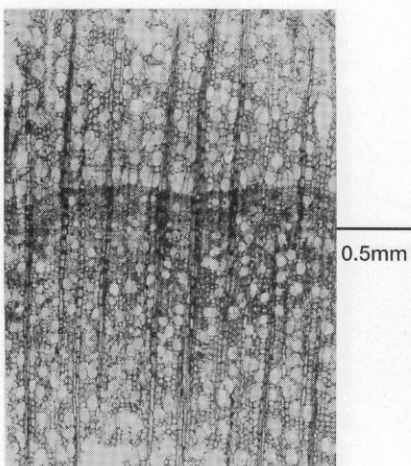
T-14



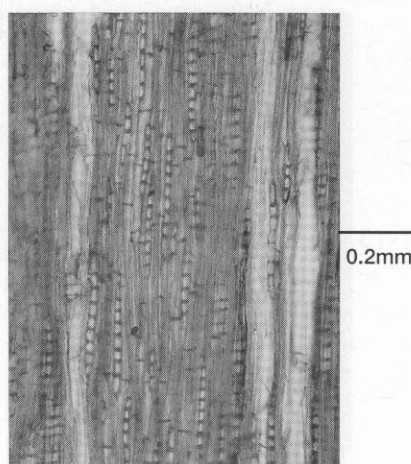
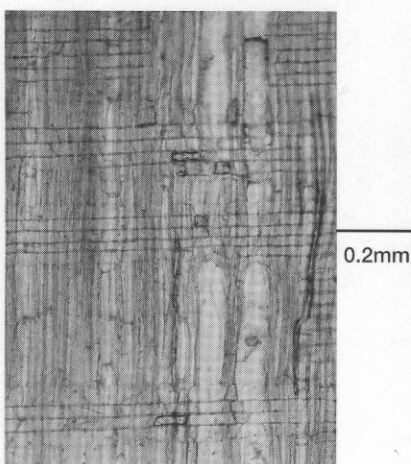
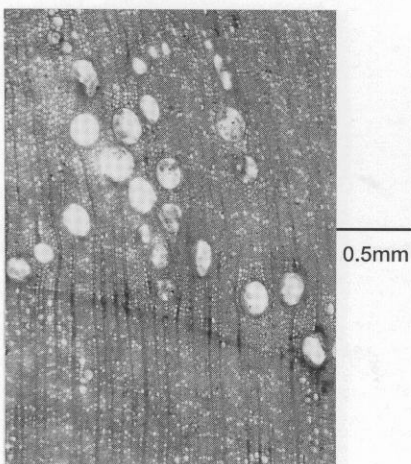
T-15



T-16



T-17



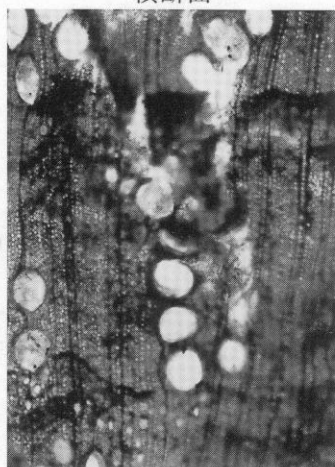
横断面

放射断面

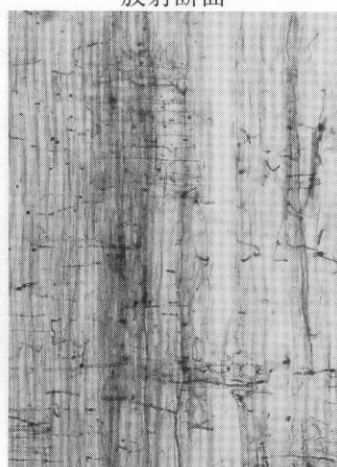
接線断面

PL.5

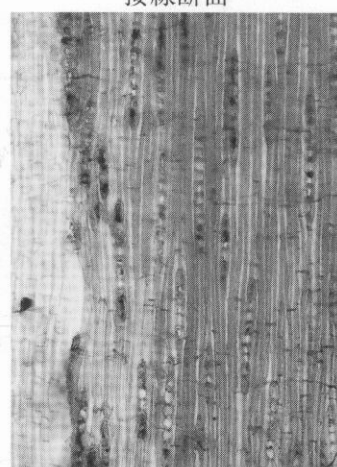
T-19



0.5mm

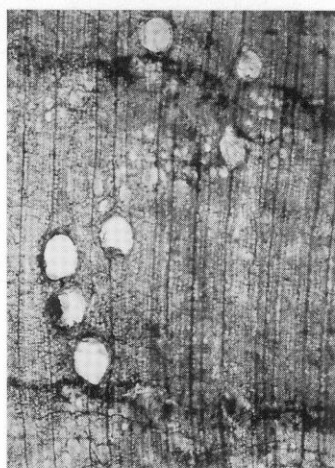


0.2mm

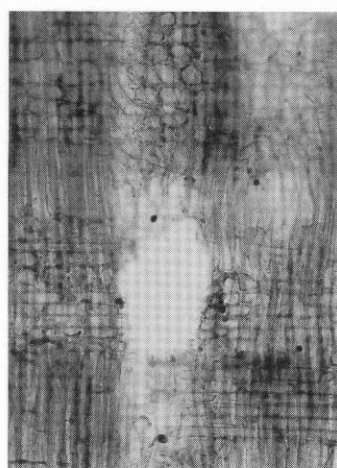


0.2mm

T-21



0.5mm

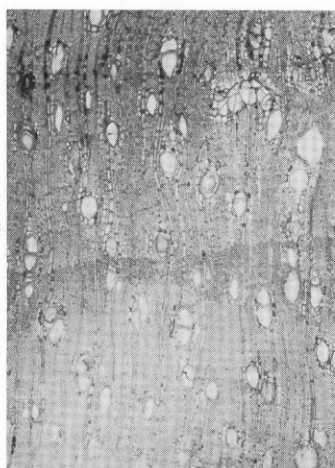


0.2mm

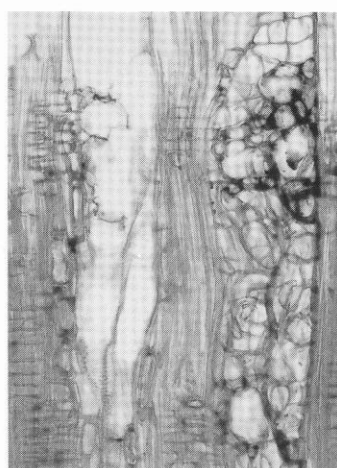


0.2mm

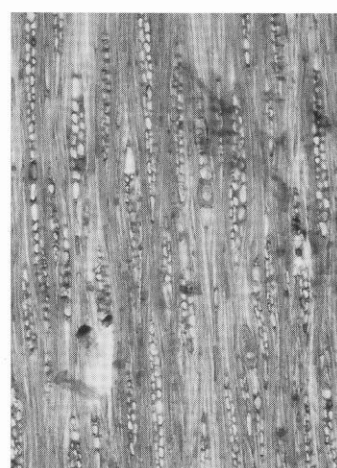
T-22



0.5mm

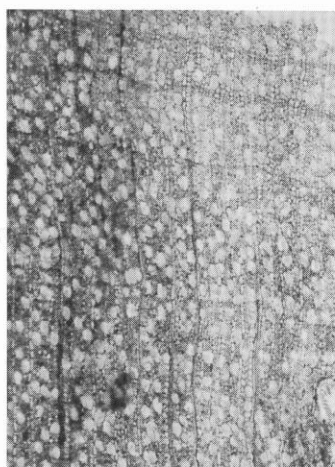


0.2mm

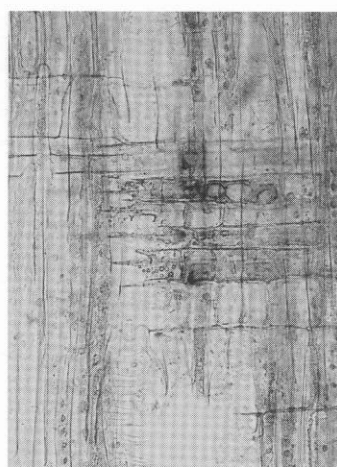


0.2mm

T-23



0.5mm



0.1mm



0.2mm

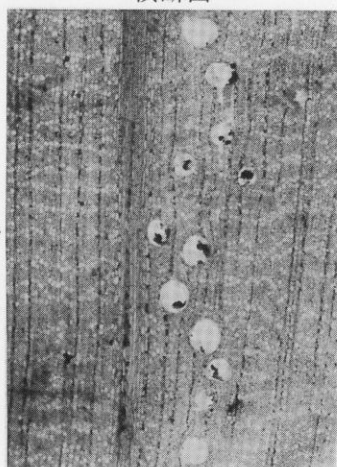
PL.6

横断面

放射断面

接線断面

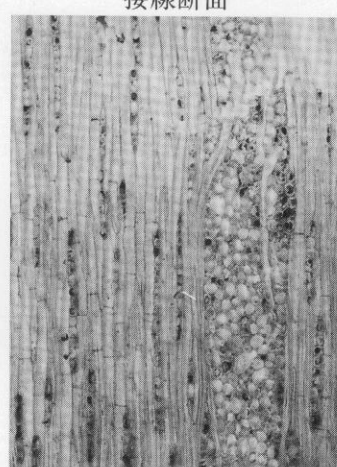
T-24



0.5mm

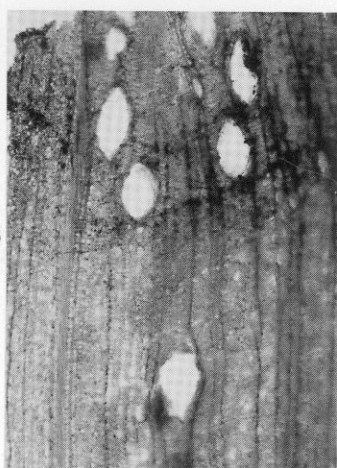


0.2mm

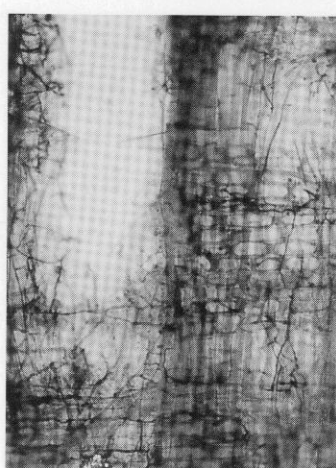


0.2mm

T-25



0.5mm

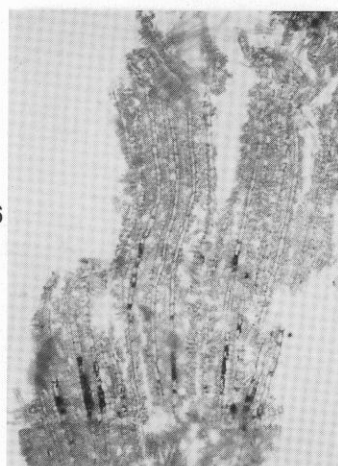


0.2mm

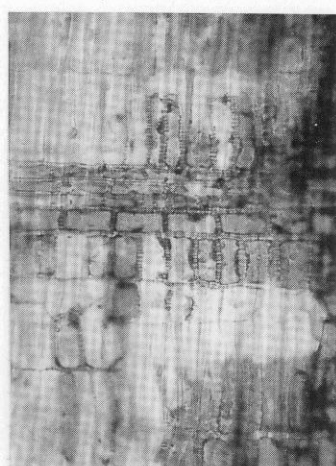


0.2mm

T-26



0.5mm



0.2mm



0.2mm

T-27



0.5mm



0.2mm



0.2mm

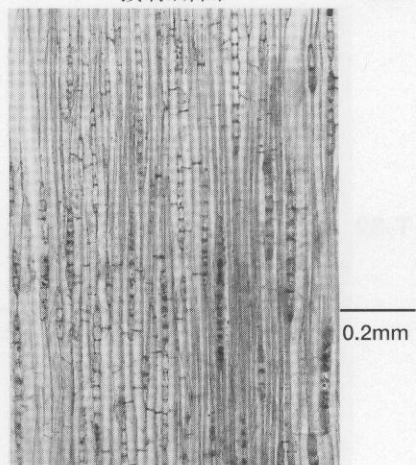
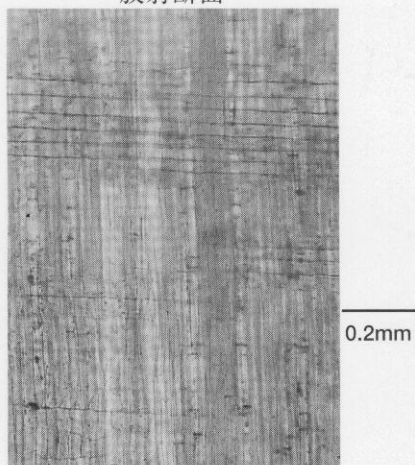
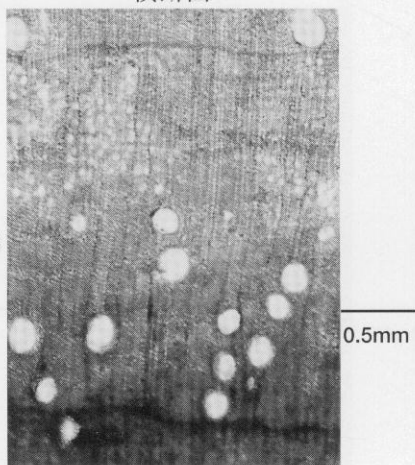
横断面

放射断面

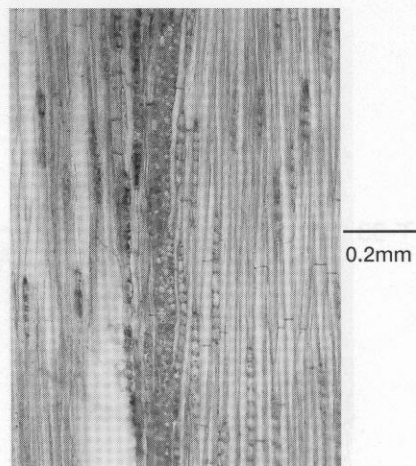
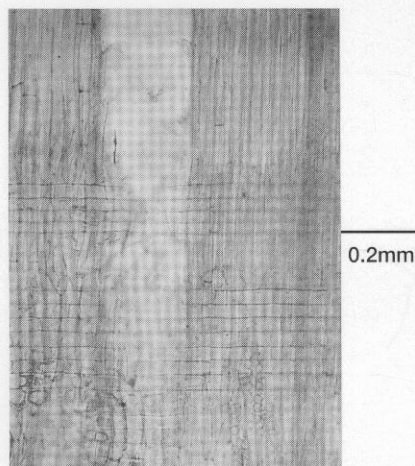
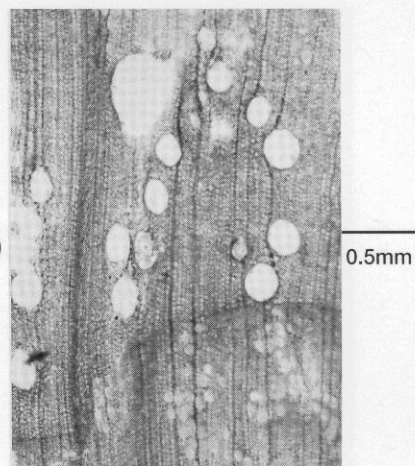
接線断面

PL.7

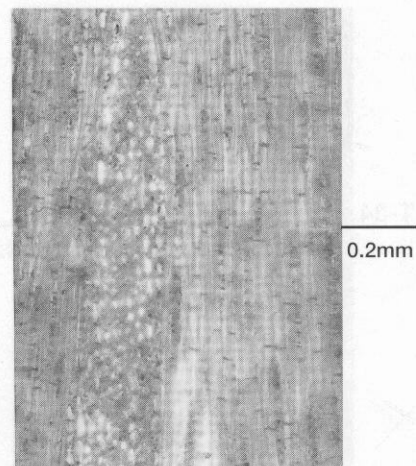
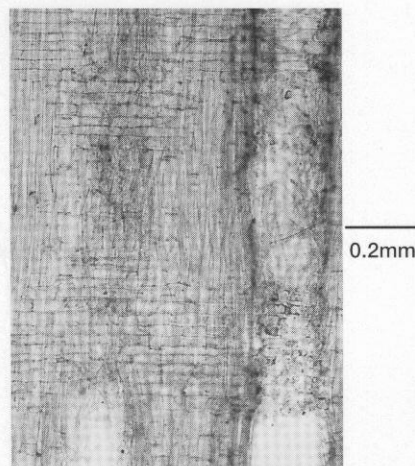
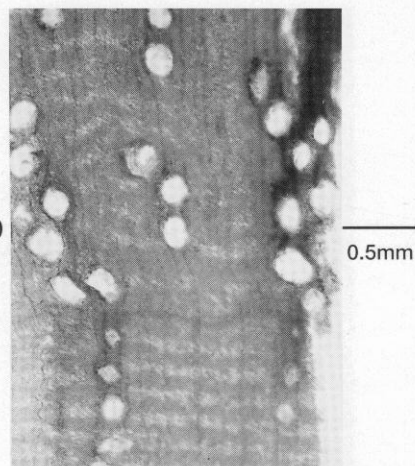
T-28



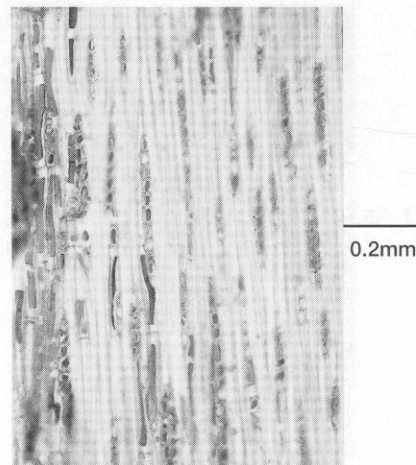
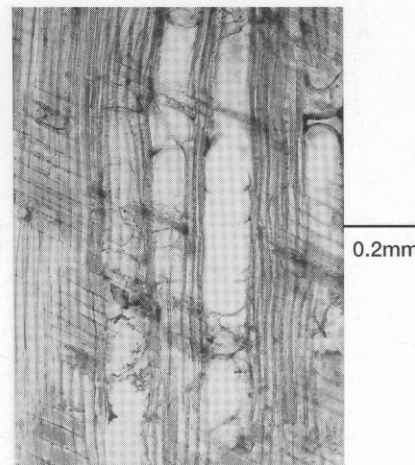
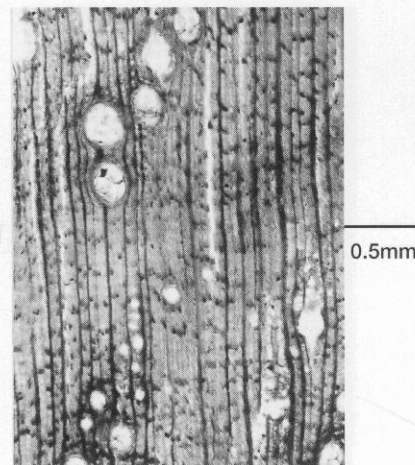
T-29

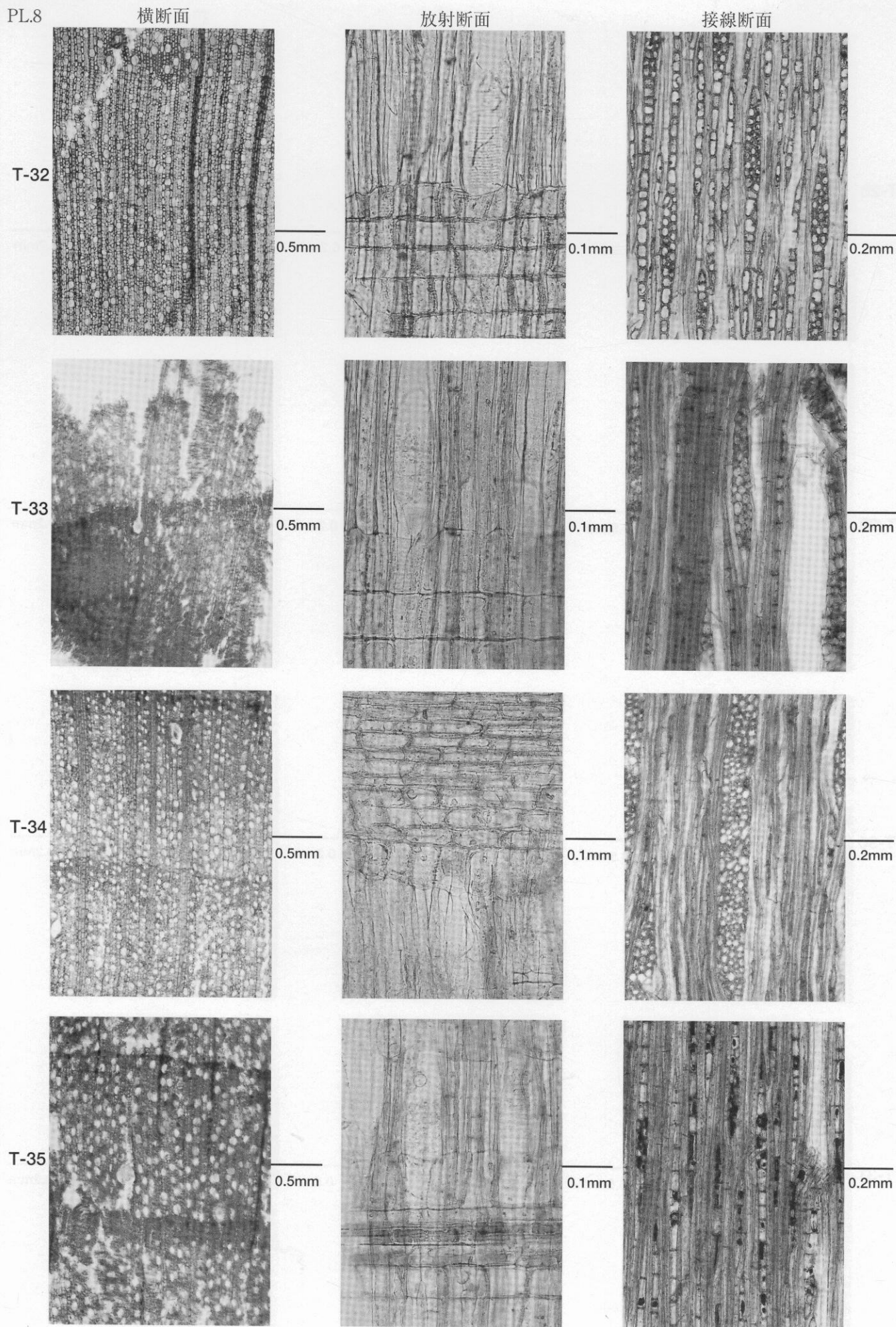


T-30



T-31





出土木材の顕微鏡写真⑧

横断面

放射断面

接線断面

PL.9

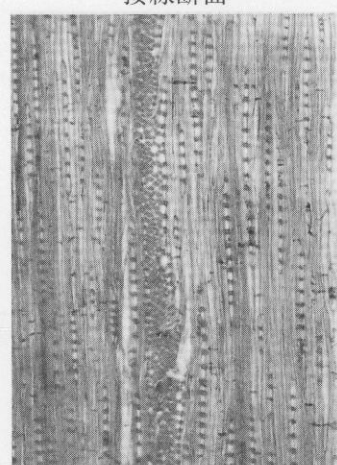
T-36



0.5mm

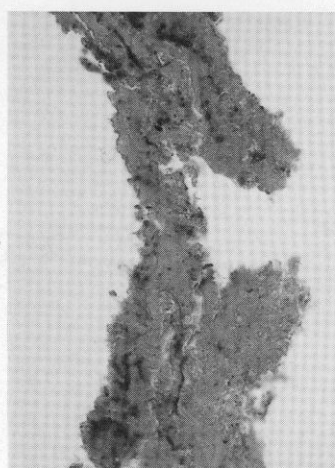


0.2mm



0.2mm

T-37



0.5mm

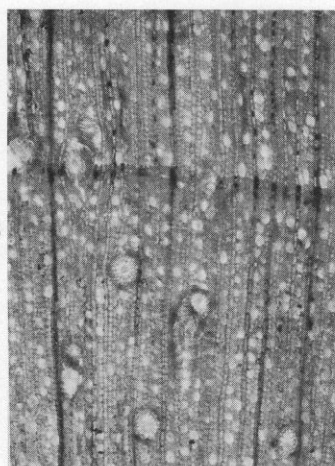


0.2mm

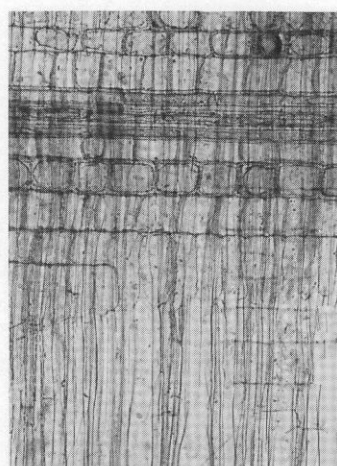


0.2mm

T-38



0.5mm

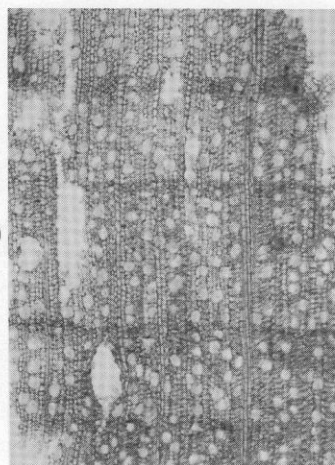


0.2mm

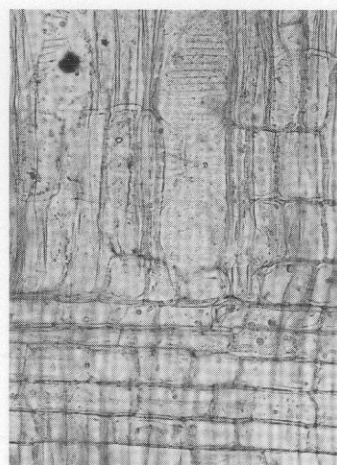


0.2mm

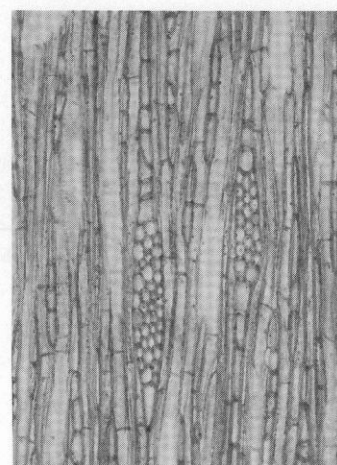
T-39



0.5mm



0.1mm



0.2mm

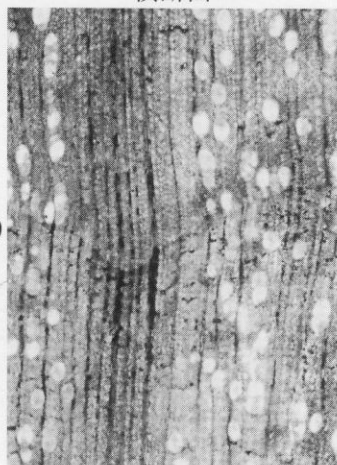
PL.10

横断面

放射断面

接線断面

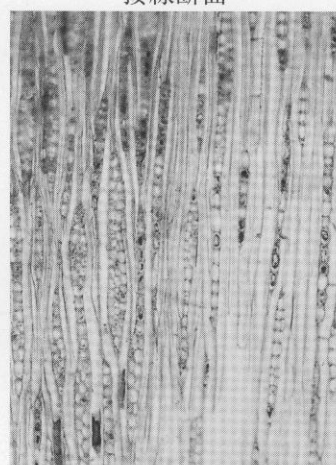
T-40



0.5mm

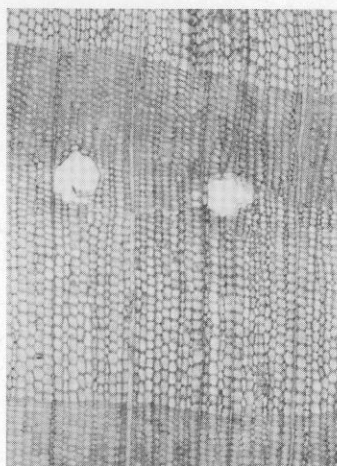


0.2mm



0.2mm

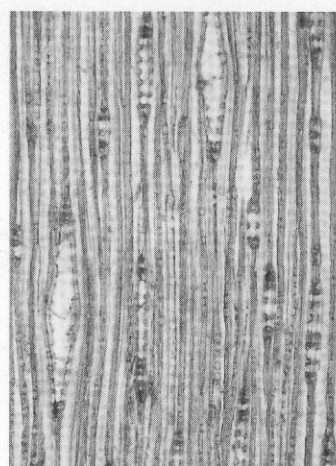
T-41



0.5mm

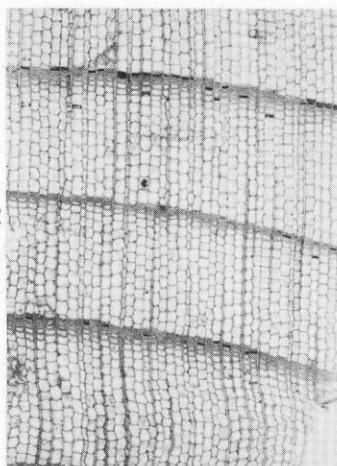


0.1mm

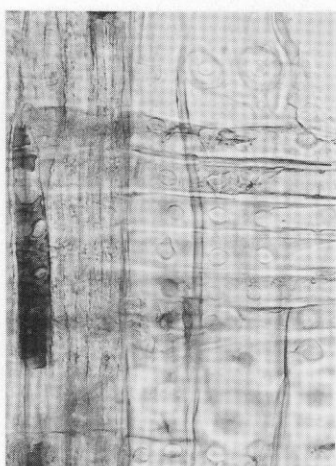


0.2mm

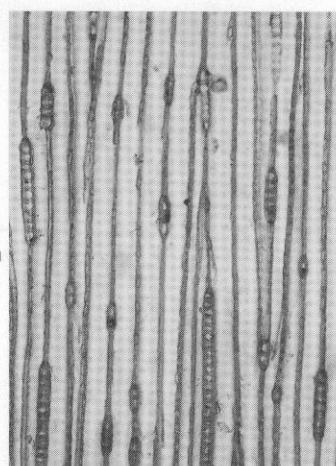
T-42



0.5mm

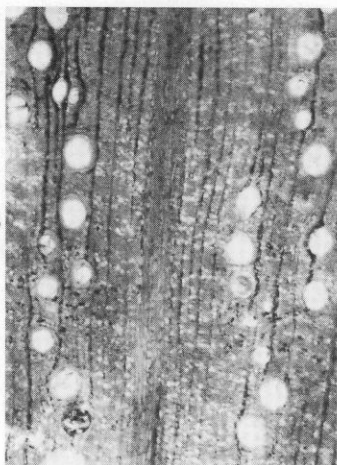


0.05mm

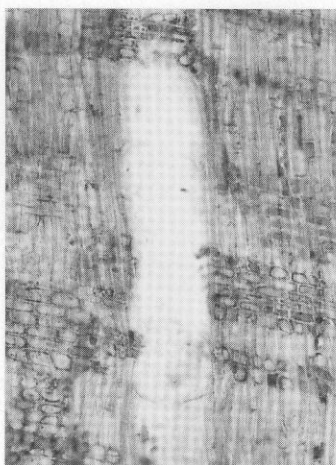


0.2mm

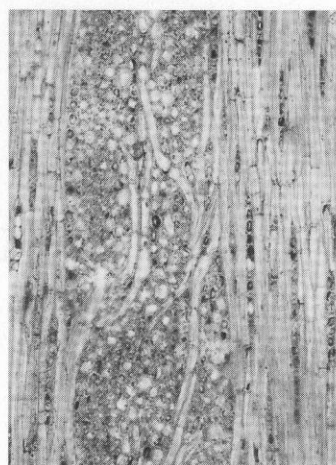
T-43



0.5mm



0.2mm



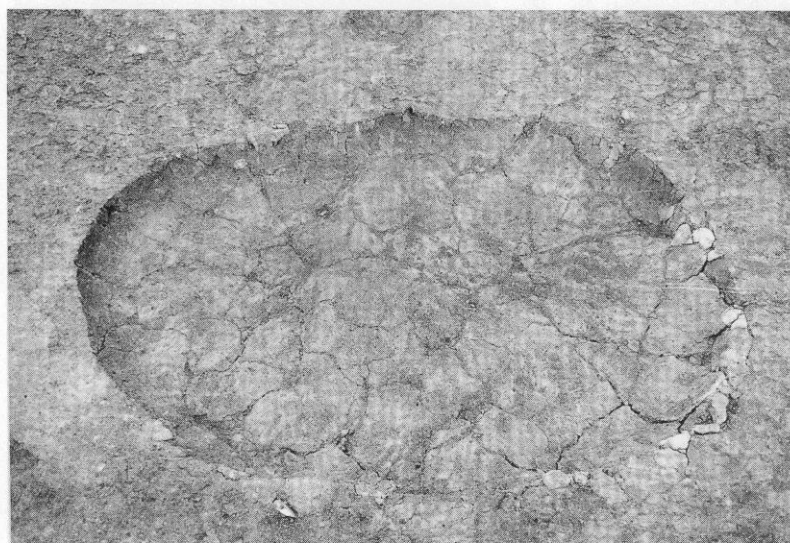
0.2mm



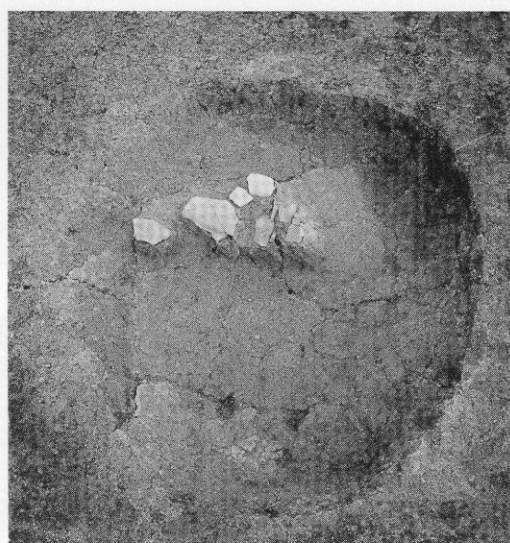
E 調査遠景 (北から)



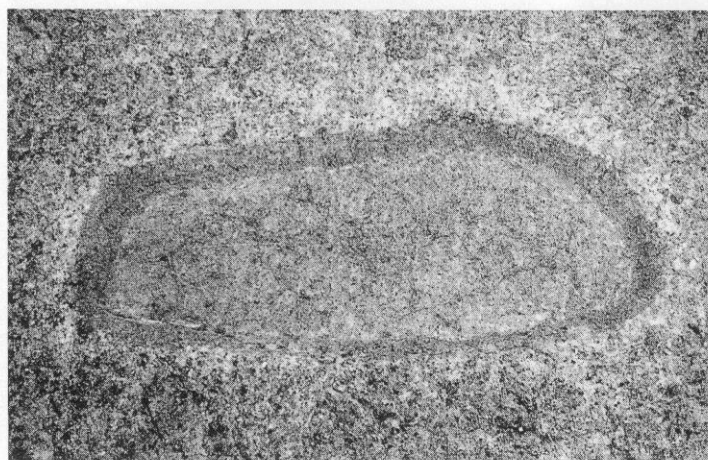
上空写真



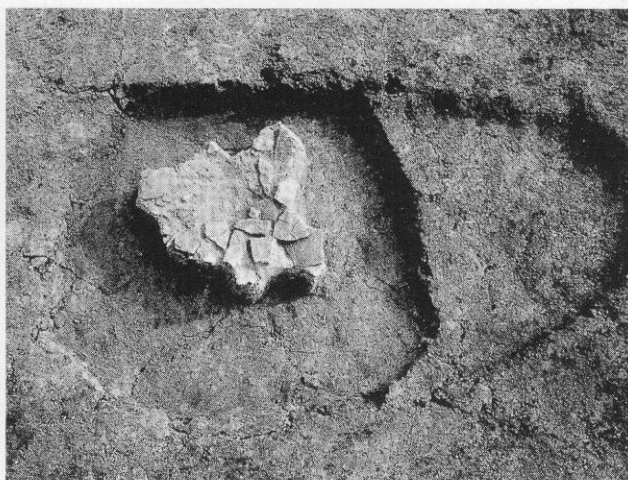
SK1



SK4



SK2



SK3



F 調査区土塁（西から）



土塁（北から）



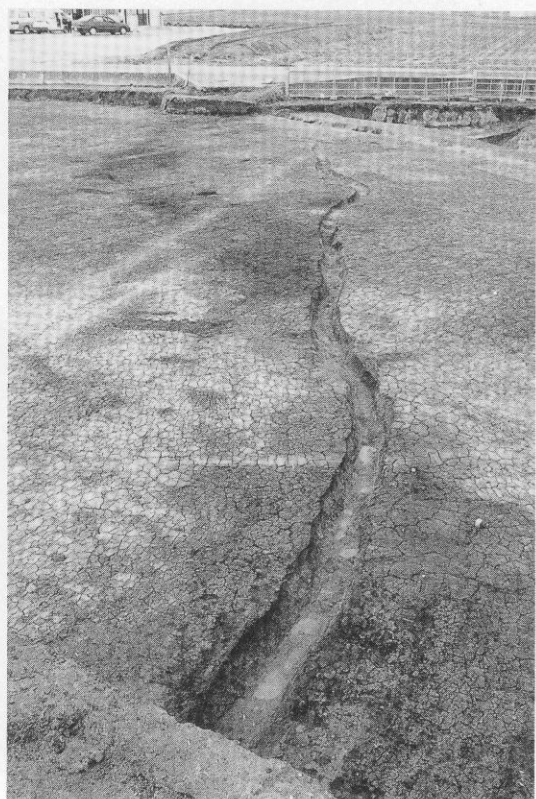
土塁断面



石 塔



H 調査区



SD 57



H・I・J 調査区（遠景）



I 調査区



J 調査区（東側部のみ）



SD 49（東南から）



J 調査区（西側部）



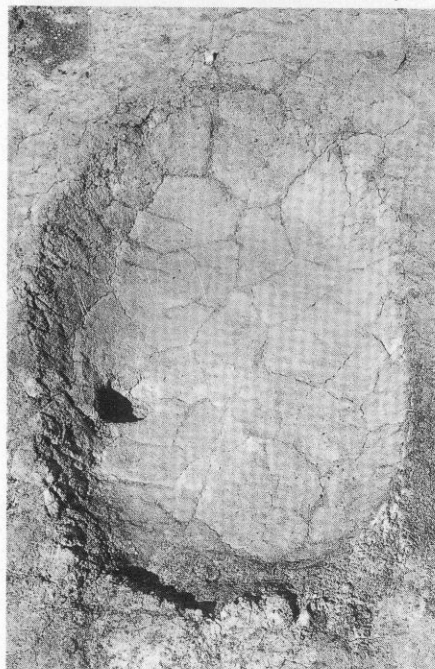
SD 49（北より）



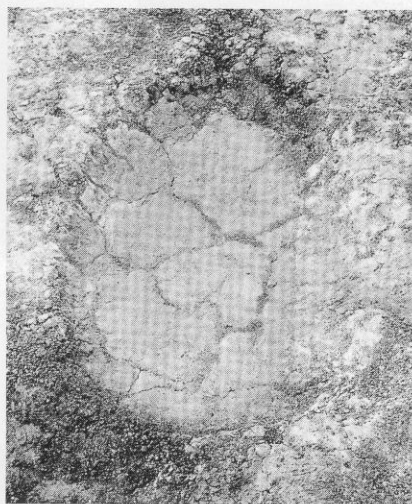
K 調査区(東側のみ)



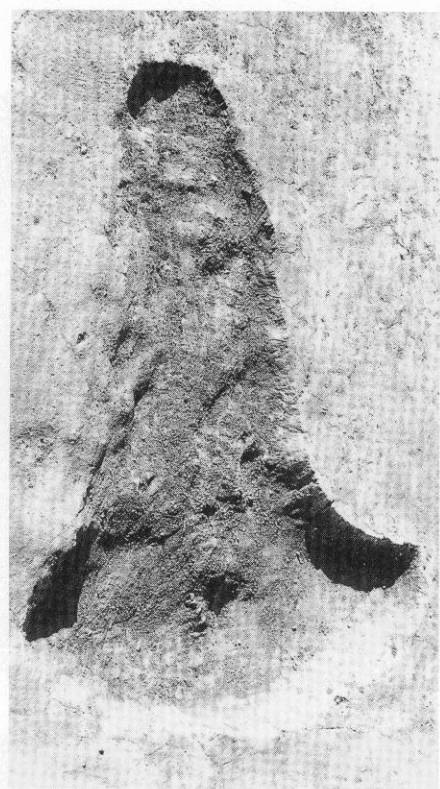
SD1・2・3 (東南から)



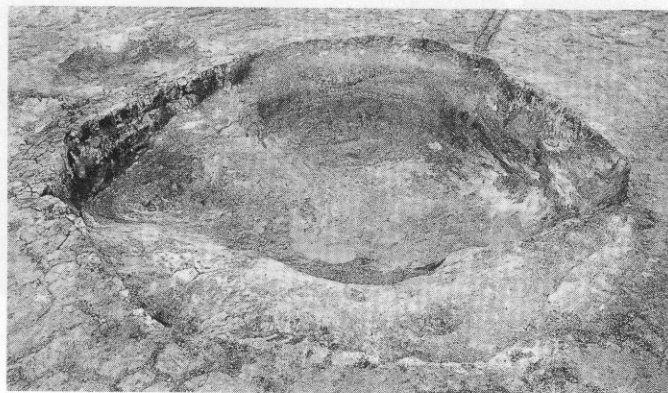
SK 6



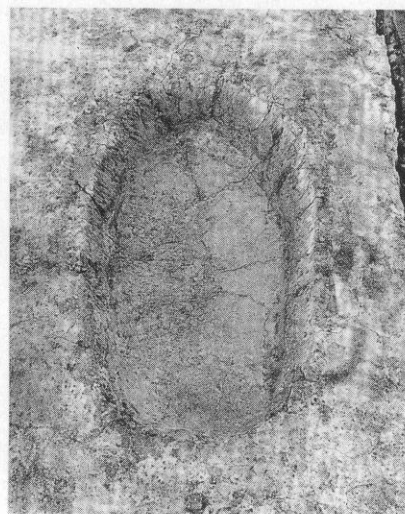
SK 9



SK 16



SK 67



SK 28



SK 11



SK 72・SK 66



SD 3 木器出土状況



SD 3 土器出土状況



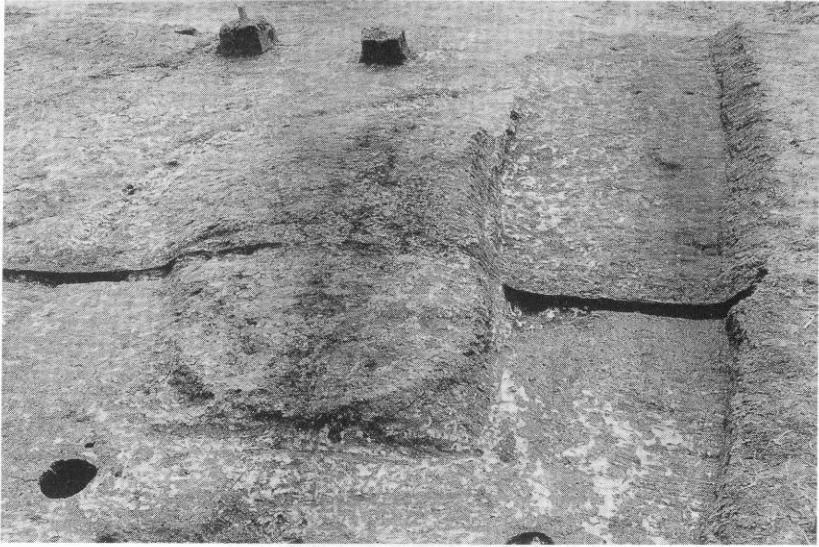
SD 3 柵状遺構



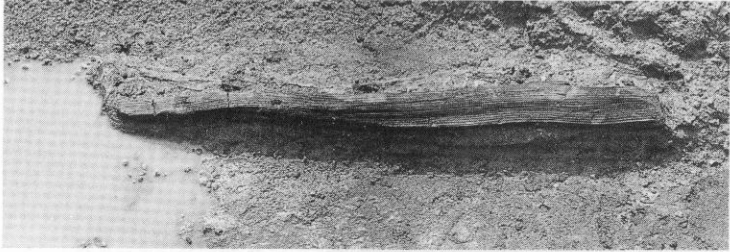
SD 3 木器出土状況



SD 3 木器出土状況



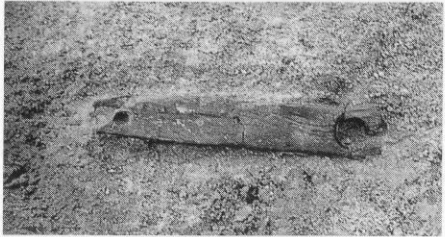
ダブリュー塚（東から）



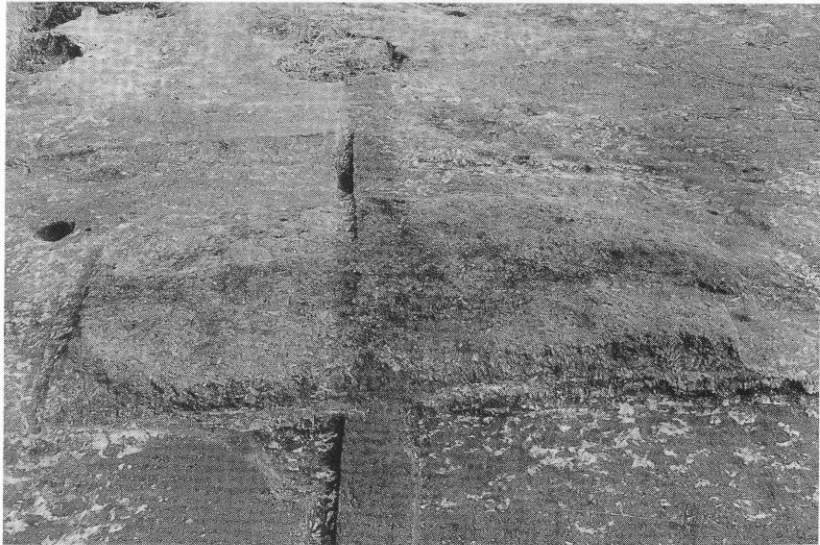
SD 3 木器出土状況



SK 3 遺物出土状況



SD 3 木器出土状況



ダブリュー塚（北から）



K 調査区 ダブリュー塚調査前

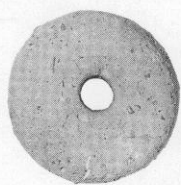
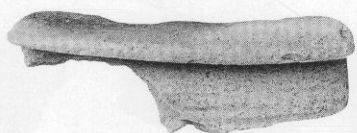


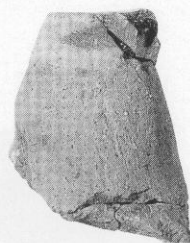
Fig.2-1



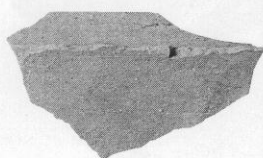
4



Fig.4-11



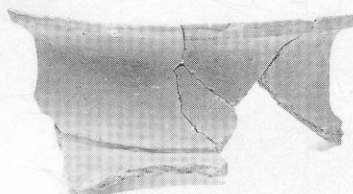
13



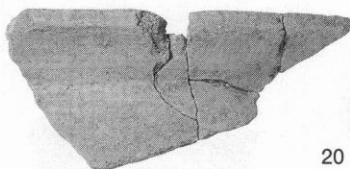
12



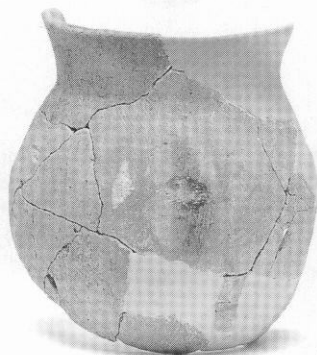
18



19



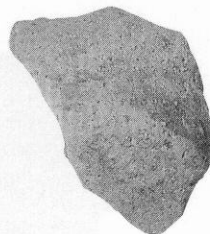
20



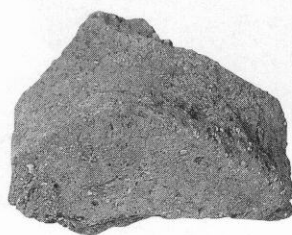
21



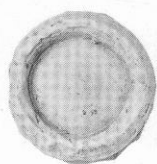
23



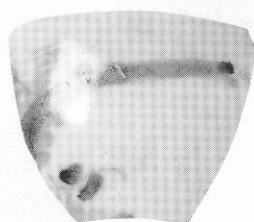
24



25



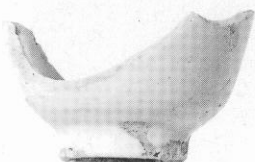
26



27



28



29



30

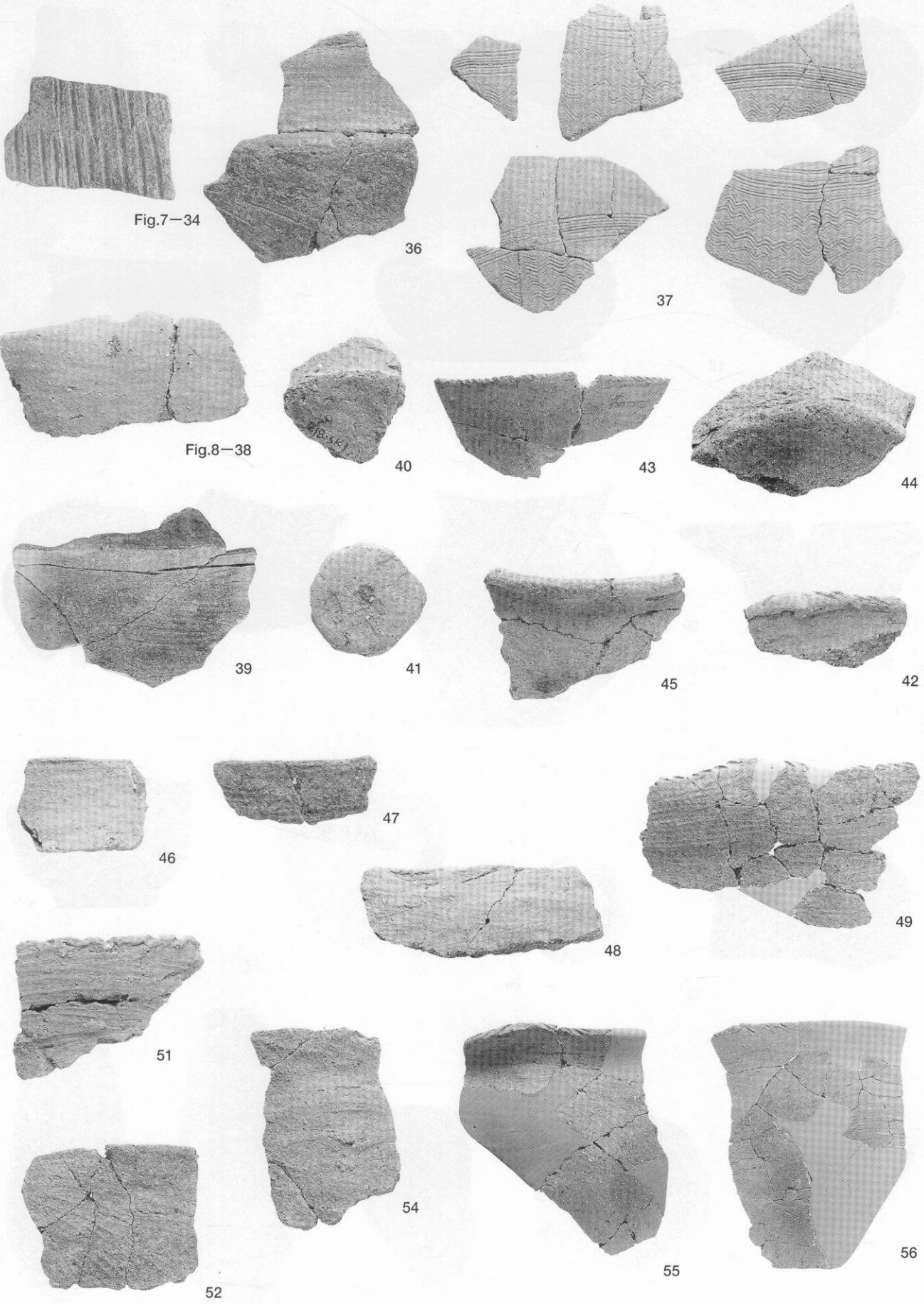


32



33





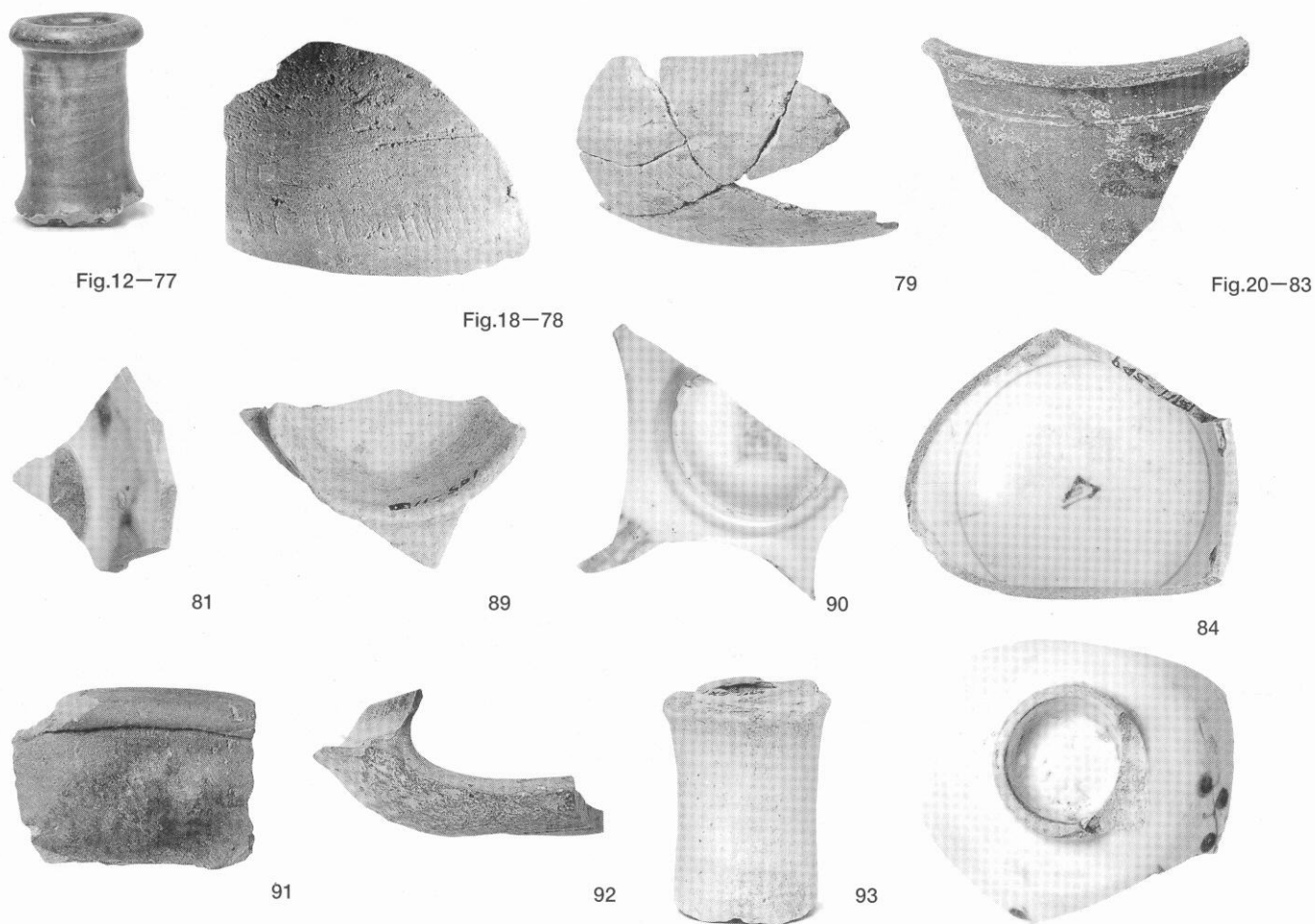
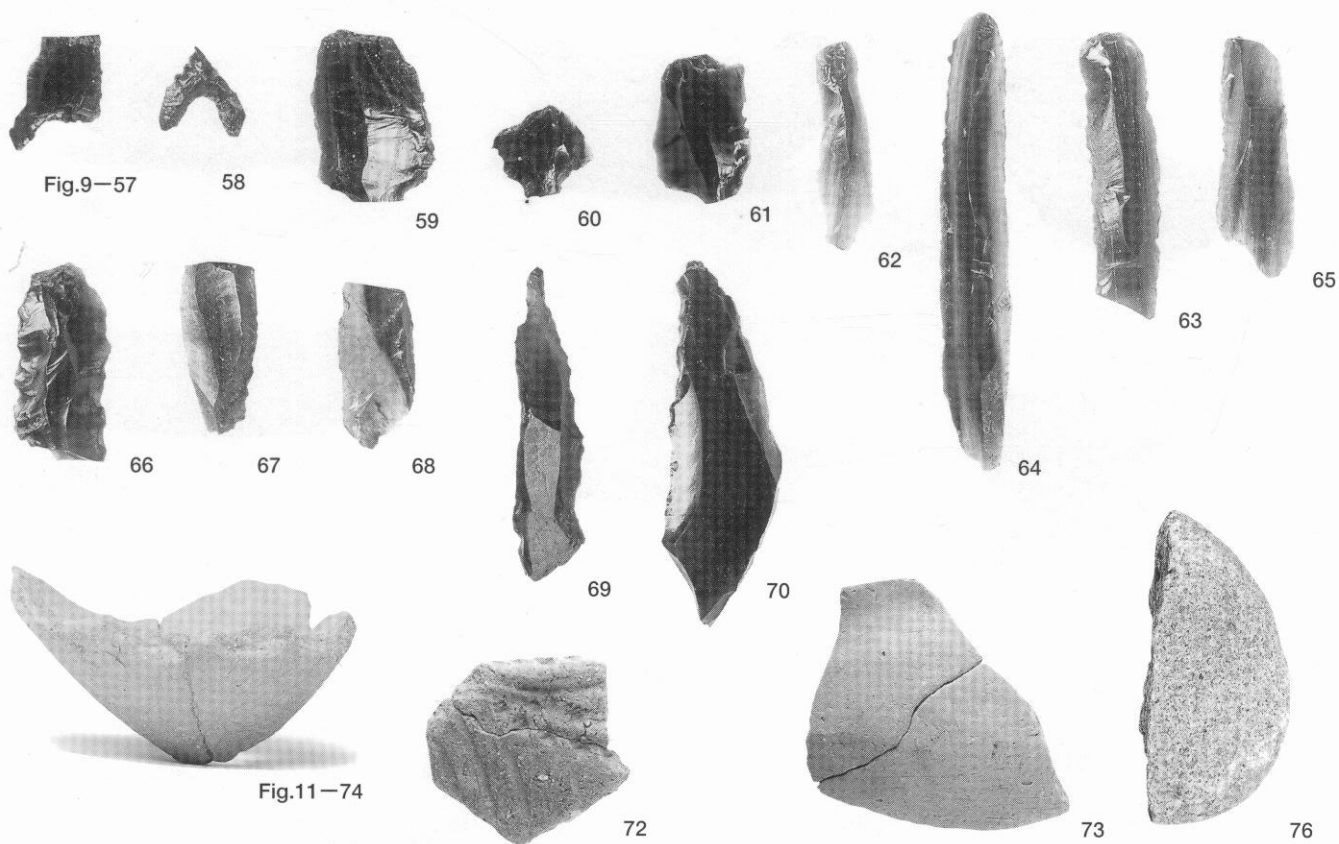
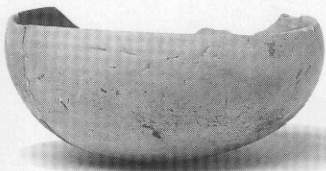




Fig.23—96



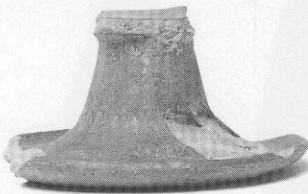
97



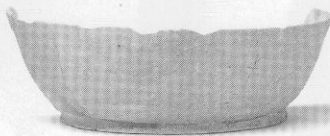
98



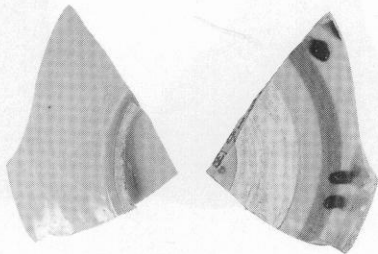
100



101



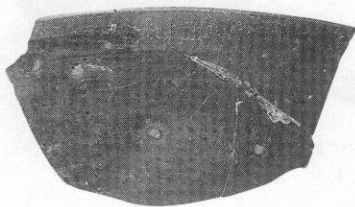
102



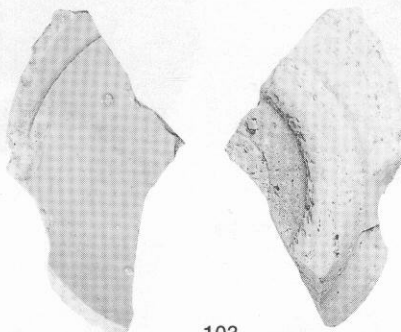
104



106



105



103

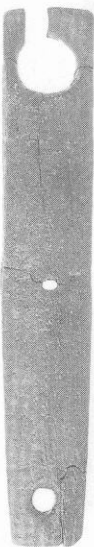
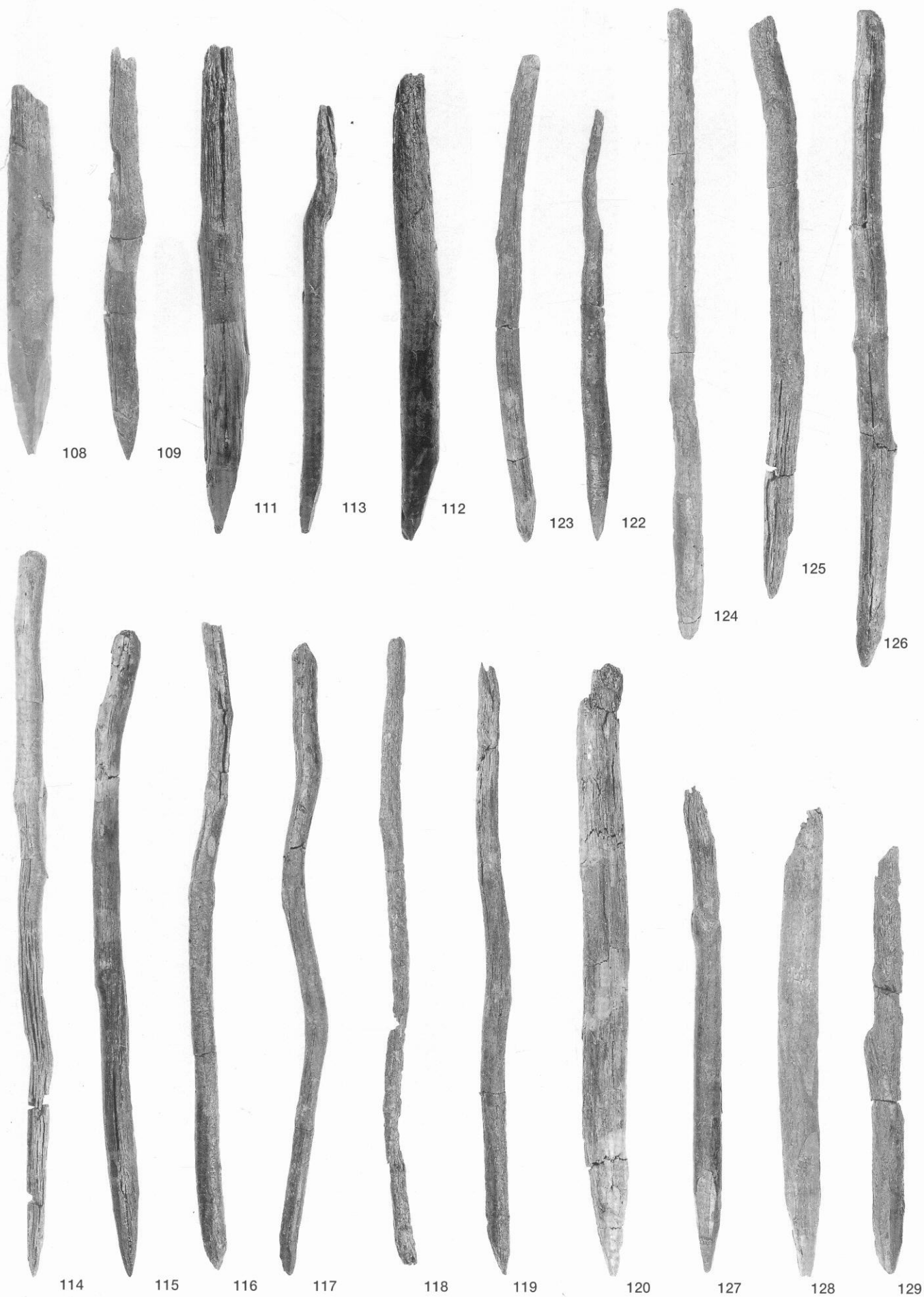


Fig.24—107





130



131



138



135



136



132



133



139



140



141



142



143

報 告 書 抄 録

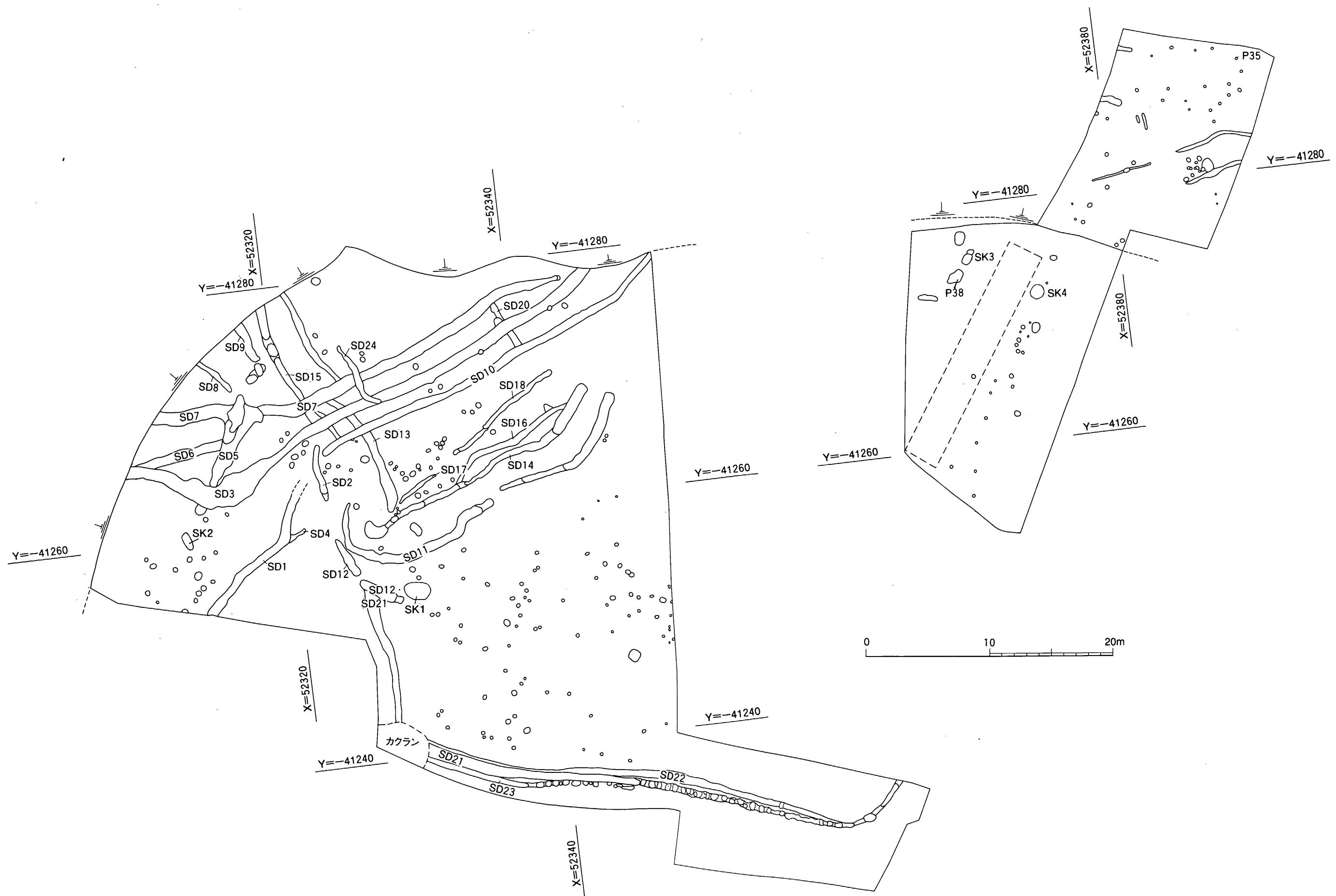
フリガナ	オカダチクイセキグンⅢ－Ⅱクノチョウサー							
書名	岡田地区遺跡群Ⅲ－Ⅱ区の調査－							
副書名	筑紫野市岡田土地区画整理事業に伴う文化財発掘調査							
巻次	第 56 集							
シリーズ名	岡田地区遺跡群Ⅲ							
シリーズ番号	Ⅲ							
編著者名	渡邊 和子							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL 092-923-1111(代)							
発行年月日	西暦 1998年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ' , "	東経 ° , ' , "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかだちく 岡田地区 いせきぐん 遺跡群	ふくおかけんちくしのし 福岡県筑紫野市 おおあだおかだ 大字岡田425-2	402176	170317	33° 28' 04"	130° 33' 32"	19940705) 19970630	約118,000 m ²	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
岡田地区 遺跡群	集 落	縄 文) 近 世	溝・土坑 ピット		縄文土器 剥片石器 弥生土器 須恵器 陶磁器			

岡田地区遺跡群Ⅲ －Ⅱ区の調査－

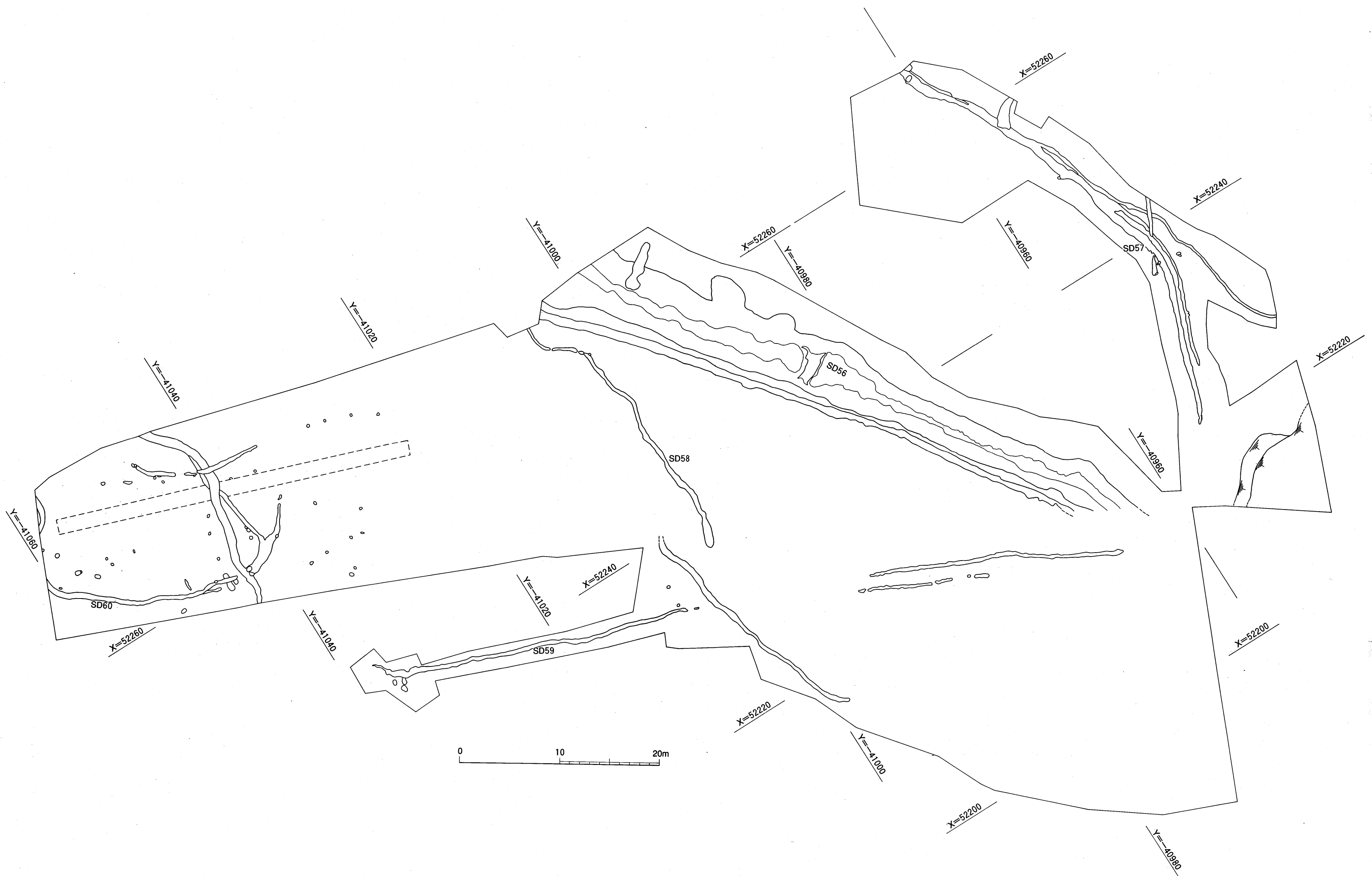
筑紫野市文化財調査報告書
第56集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

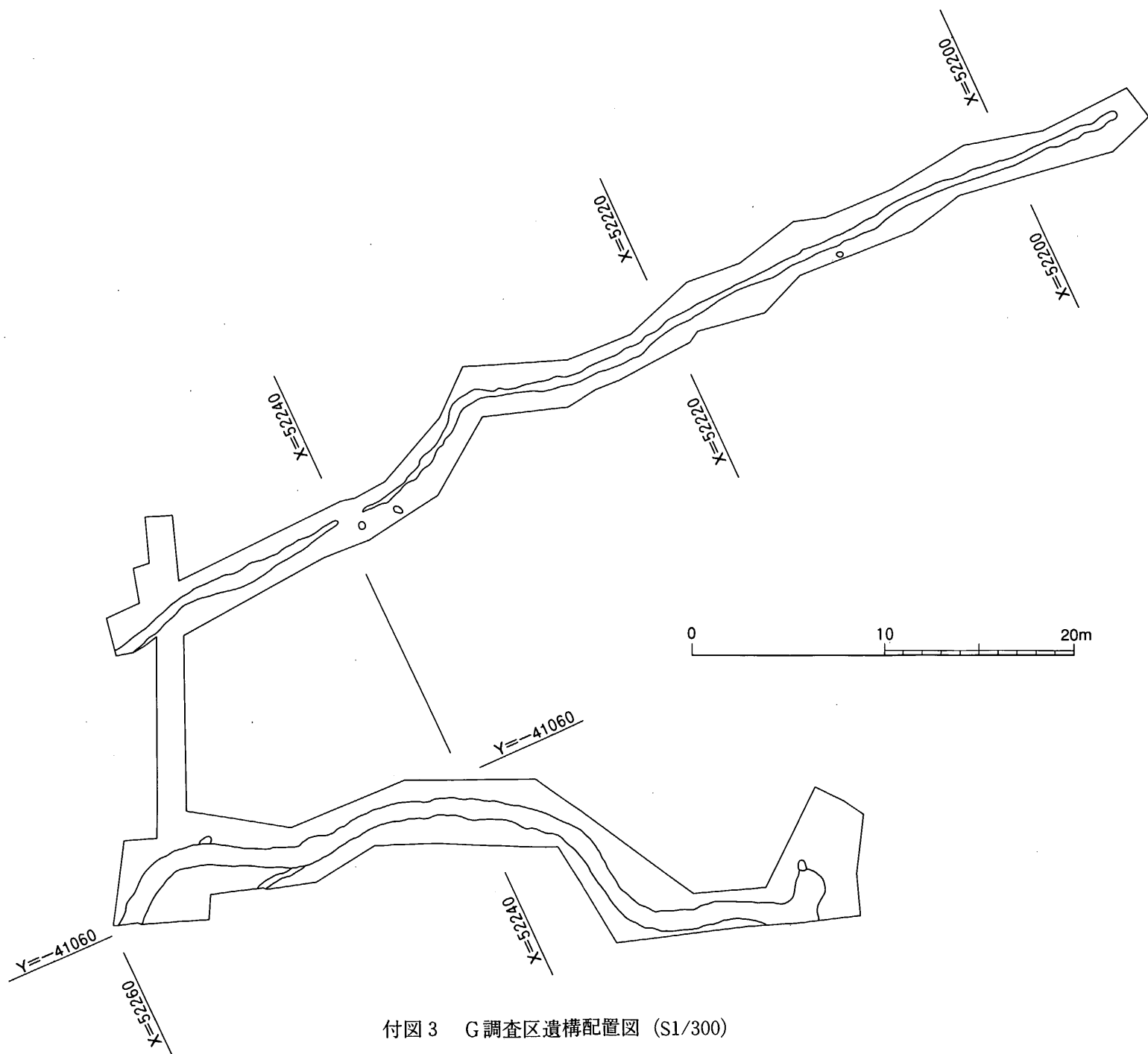
印刷 瞬報社写真印刷株式会社
〒810-0001 福岡市中央区天神5-4-16城戸ビル3F



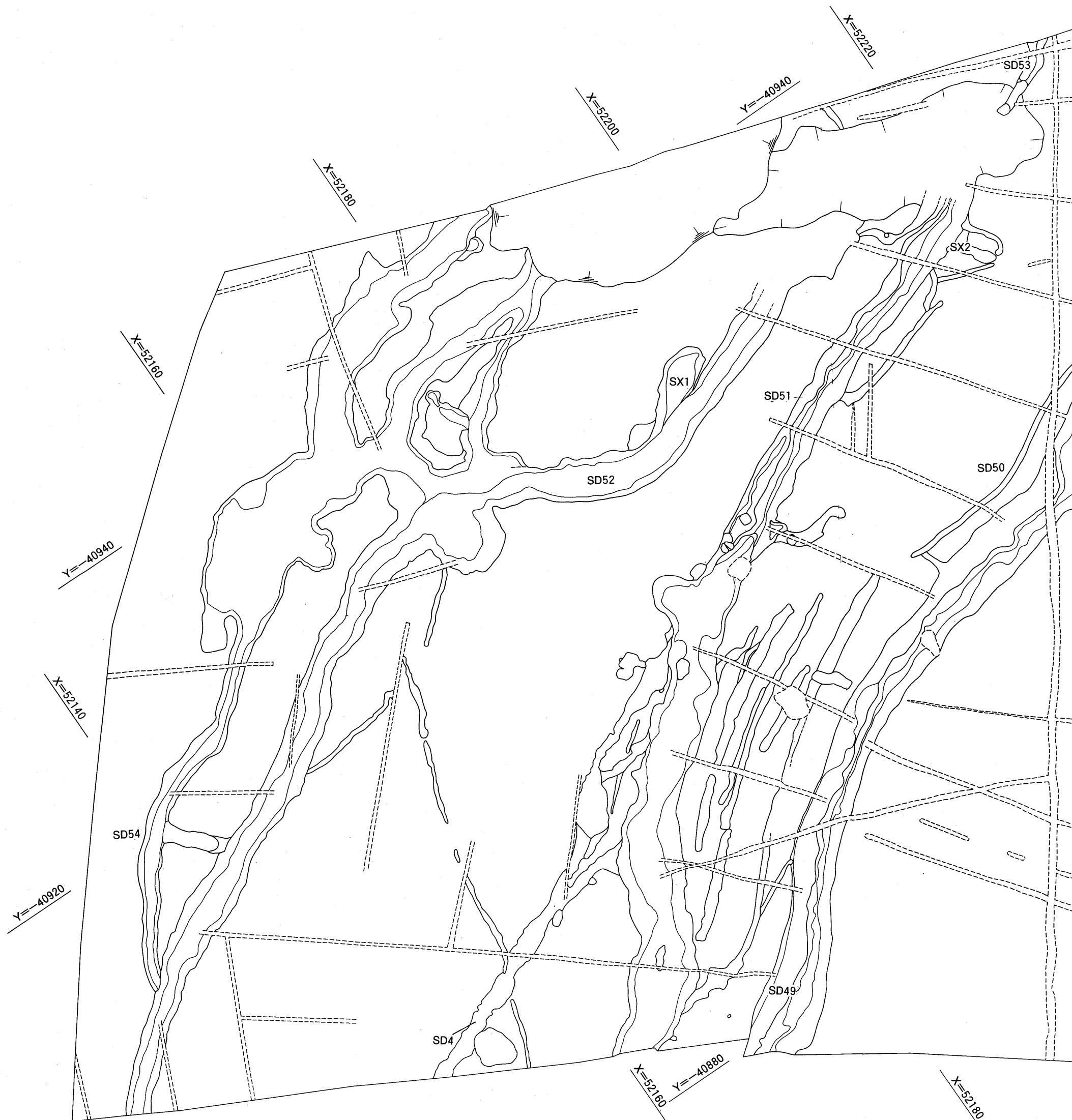
付図1 E調査区遺構配置図 (S1/300)



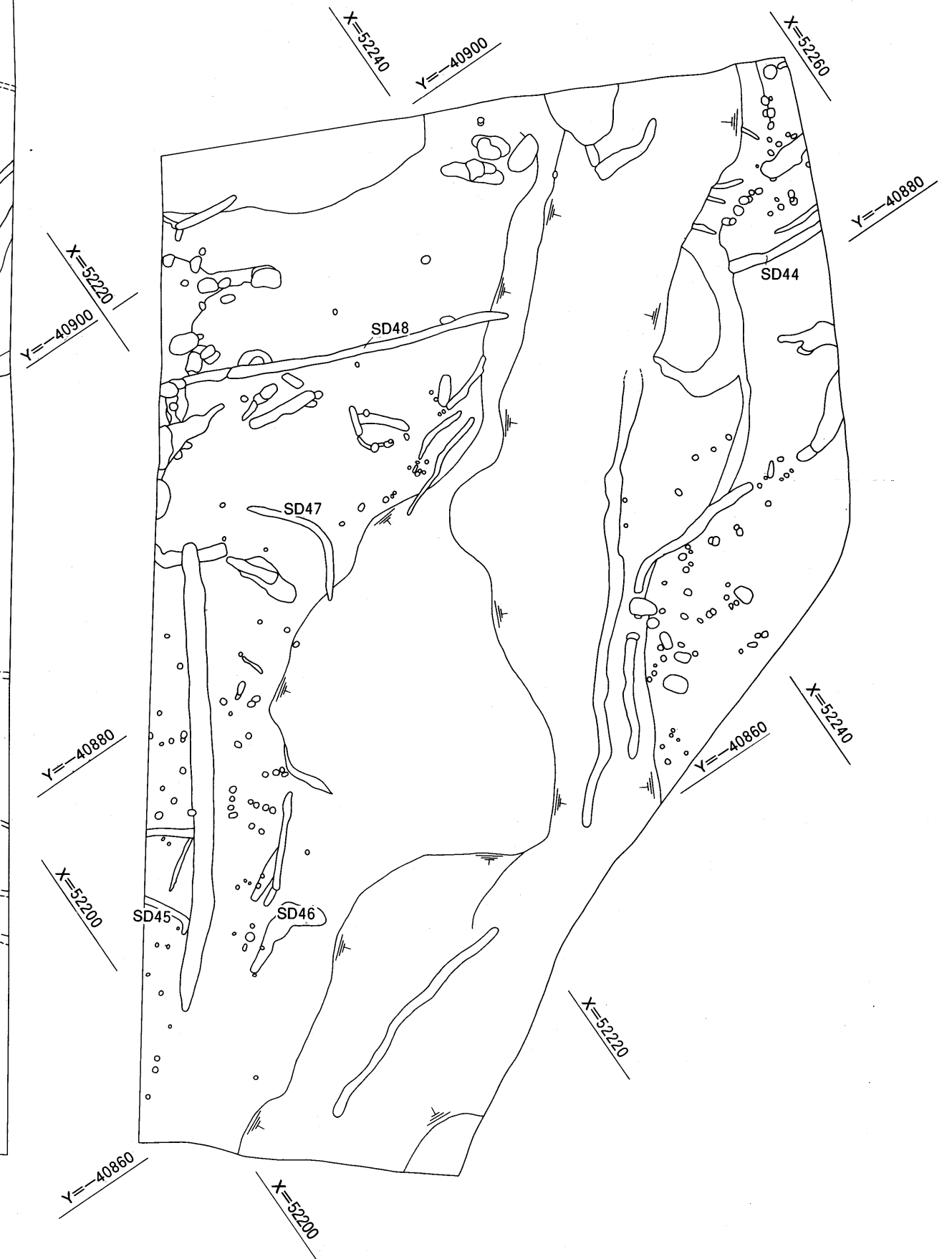
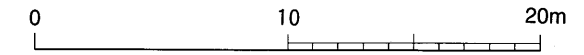
付図2 G・H調査区遺構配置図 (S1/300)



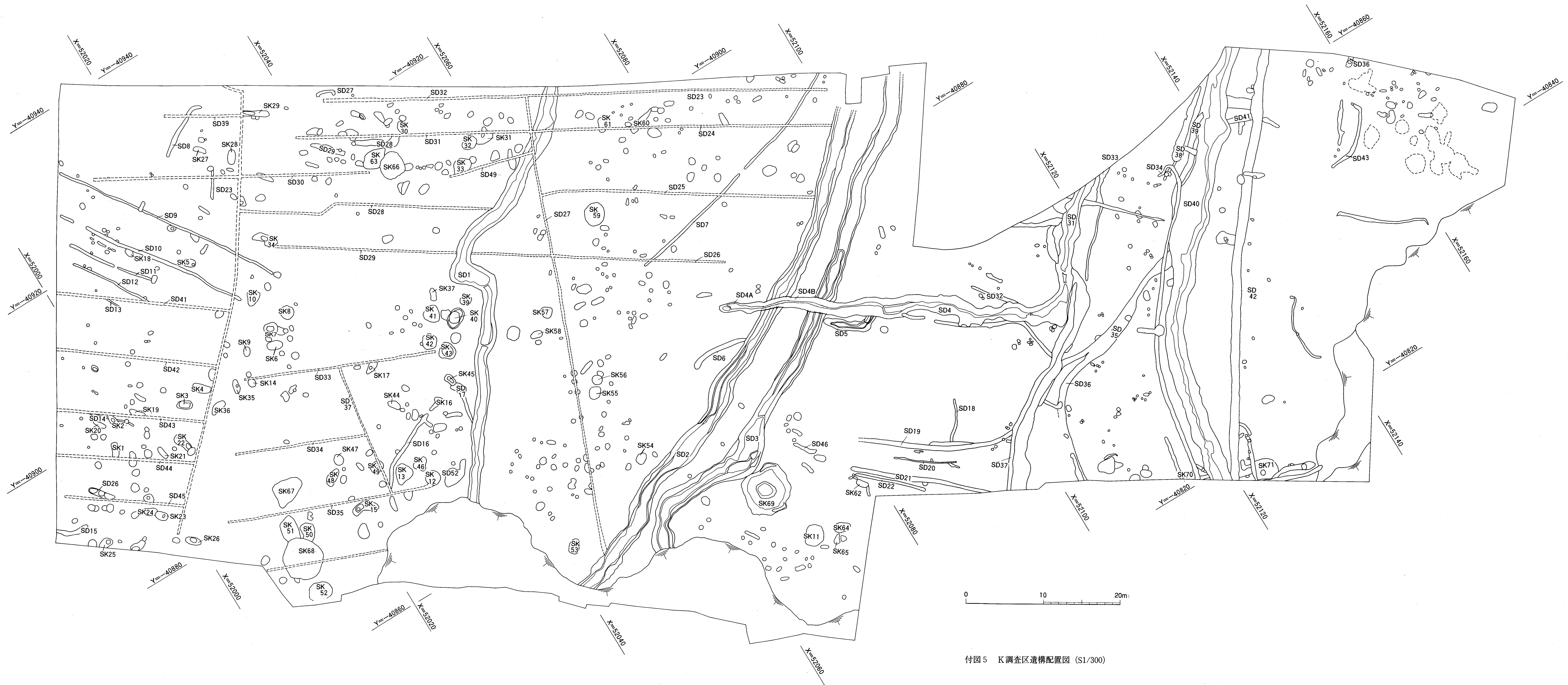
付図 3 G 調査区遺構配置図 (S1/300)



Y=-40920



付図4 I・J調査区遺構配置図 (S1/300)



付図5 K調査区遺構配置図 (S1/300)